
華国神記
奪われた真名
九条菜月
Natsuki Kujo



華国神記

奪われた真名

九条菜月

Natsuki Kujo



口絵・挿画　由貴海里

目次

序章……9
第一章……21
第二章……44
第三章……61
第四章……82
第五章……101
第六章……118
第七章……144
第八章……168
第九章……188
第十章……203
終章……214
あとがき……224

登場人物紹介

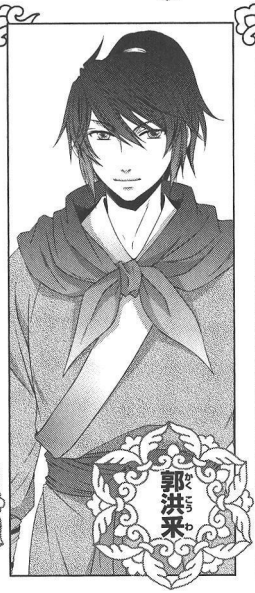



韓楊秀


花玉翠


花翠蓮


兎天


郭洪采


姫子虞



李沸儀
現皇帝

愛妾

黎貴妃
皇帝の寵姫

親子

親子

李博焚
太子

腹違いの兄弟

祥安

支援

韓楊秀（27歳）
禁軍右飛龍将軍

親友

鄭玄楽（27歳）
春蘭から真名を奪った男

花興奏（57歳）
中書令（中書省の最高責任者）
太子派の筆頭

幼馴染み

真名を奪う

上司

部下

追っている

腹違いの兄弟

伯父

姪

花翠蓮（15歳）

花玉翠（14歳）
花家の美人姉妹

鄭仲望（24歳）
元禁軍の気術兵。
現在は中書省書物補修係

李春蘭
（300歳／主人公）
小さな邑の元守り神。
真名を奪われ人間に戻る

家主

居候

雇い主

家僕

呂翰栄（？歳）
謎の男

高友寧（13歳）

孫啓璋（13歳）
鄭家につかえる少年たち

姫子慮（25歳）
龍乎虎慈軍隊長

仲間

杜文重（23歳）
子慮の副官

龍乎

郭洪采（20歳）
気術士

仲間

兎天（？歳）
鬼面で顔を覆う
組織の二番手

猩猩緋

人物相関図

華国神記
奪われた真名



青雲山に雲がかからなければ、その日は晴れ。

名に同じ青という文字を持つ少年は、自分で編んだ籠を片手に納屋を出た。中では、農機具の脇で一塊になって眠る弟妹たちの姿がある。夜明け前から家畜の世話に駆け回っていたため、仕事が一段落する頃には、折り重なるようにして眠ってしまうのが常だった。

本来ならば、青もそこに混じって束の間の休息を取りたかった。休憩が終われば、また家畜の世話に戻らなくてはならない。

青たちの家は貧しい農家だ。父と母は畑で汗を流し、歳の離れた兄も邑長の家で下男として働いている。それでも、暮らしは楽にならない。毎年、定められた年貢を納めるのに精一杯なのだ。それはどこの家も同じで、年貢が少しでも足りなかった場合は、厳つい顔付きの役人が罰としてその家の者を鞭打った。

今年、十になる青は、いつも笑顔を絶やさない父と母が、陰で深刻そうに話しているのを知っていた。もしかしたら、次の年貢を納めることができないのかもしれない。邑に通達された年貢の額は、昨年よりも増やされていたという。

青には難しいことはわからない。ただ、朝餉と夕餉の量が目に見えて減った。父と母の体がぐっと細くなった。家にわずかに残っていた、お金に替えることのできる品物がなくなった。

身近に感じる異変に、自分の家が退っ引きならない状況に置かれているのだということを肌身で感じていた。

だから、せめてもの腹の足しにと、休息の合間に青は森に出掛けようとしていた。

今は黄柑と呼ばれる柑橘系の果実が実る時季。子供の手で運べる量はたかが知れているが、それでも空腹を紛らわすことはできる。ひもじさのあまり草を齧って気を紛らわす弟妹たちを思えば、それがわずかな量であってもありがたいものだった。

「今日は、暑いなぁ……」

ふう、と熱の籠もった息を吐いて、青は周囲を見回す。小さな集落の近くには街道が走り、それに沿うように広大な森が広がっていた。青がいつも足を踏み入れていたのは、森の入口付近だ。その辺りでも、充分に黄柑は採れる。

森の奥は神聖な場所とされ、用もなく足を踏み入れることは禁じられていた。許されるのは、年に一度だけ。収穫祭が催される際、弓を担いだ大人たちが肉を得るために森へと入る。獲物の数も決められており、あまりにも多過ぎると森に住む神様の機嫌を損ねてしまうのだと言い伝えられていた。

だから、邑人たちはどんなに飢えようと、森の獣には手を出さない。神の怒りは、翌年の収穫に影響を及ぼすのだ。

黄柑を採ってはだめ、という決まりはない。青自身、このことを年長の友人に教えてもらったのだ。遠くの街に、商人屋敷の下男として働きに行った澡が、青だけに内緒で教えてくれた秘密の場所。

雪が降り積もる冬の時季以外、森はなにかしらの恵みを与えてくれる。たまに見つける山菜も、青にしてみれば貴重な食糧だ。

地面に隆起している木の根を慎重に避けながら、青は目的の場所に辿り着いた。木々が青々と茂り、近くには清涼な水を湛えた小川が流れている。

どこから種が運ばれてきたのかは不明だが、細くて背の低い二本の木に、黄色い果実がたわわに実っていた。実は青の掌に収まるくらい小さい。熟したものを、運べる分だけ籠に入れる。

本当は全部採ってしまいたいが、それではだめなのだと友人は言っていた。森の実りも神様のものだから、必要以上に欲を出してはだめなのだと。友人もそのことを、別の友人から教わったのだと言っていた。

いつか自分がこの邑を離れ、どこかへ働きに出る時、この場所は別の誰かに譲られることだろう。その時は、やはり先人たちの教えをきちんと伝えるつもりだった。

「このくらいかな……」

籠の半分ほどの量を採って、今日の分の収穫はお終い。枝に残っているのは、まだ熟し切っていない緑色のものばかりだ。明日はこの辺りで山菜を探そう。そろそろ蕗が大きく育っている時季だ。

弟妹たちが目を覚ます前に帰ろうと、踵を返した時だった。近くの茂みが、がさがさと奇妙な音を立てた。

森の動物だろうか。といっても、人里近くに現れるのは、害の少ない小動物だ。たまに猪が出没して畑を荒らしていくが、そのほとんどは秋に集中している。

だから、青は警戒心を抱かなかった。小動物は青の気配を察知すると、大慌てで逃げ去ってしまう。今日はどんな奴だろうか、と少しだけわくわくしながら茂みを覗いた青は、次の瞬間、声にならない悲鳴をあげた。

青の目の前に現れたもの。

それは、猪よりも遥かに巨大な獣だった。丸太のように太い四肢で地面を踏み締め、大きな口からは鋭い二本の牙が覗く。全身が雪のように真っ白で、美しい金色の瞳をしていた。

どさっ、と籠が手から滑り落ち、中身の黄柑が地面にばら撒かれる。青が初めて目にした獣は、足許に転がってきたそれに視線を向け、わずかに首を傾げた。

青は、ごくりと生唾を呑み込んだ。心臓が早鐘を

打ち続け、頭が殴られたように痛い。逃げなければと思うが、両足がその場に縫いつけられてしまったかのようにぴくりとも動かなかった。

白は神聖な、神様の色。もしかして、森の実りを採りすぎてはいけないという忠告を、知らず識らず破っていたのだろうか。青の脳裏を、忠告してくれた友人の言葉が過る。

だとすれば、罰として自分はこの獣に食べられてしまうのだろう。父と母、それに兄弟たちの顔が脳裏を掠めた。がちがちと歯が鳴り、瞳から涙が零れた。

ゆらり、と巨大な獣が青へと近付いてくる。この大きな口にかかれば、小柄な青など一瞬で丸呑みにされてしまうだろう。もうだめだ、と思った瞬間、獣の背から、どさりと音を立てなにかが地面に落下した。

恐る恐る視線を向ければ、驚いたことにそれは青よりも一回り小柄な少女だった。

落下した少女に気付いた獣は、その顔を労わるように大きな舌で舐めあげる。少女が食べられてしまうのでは、と青は危惧したが、その獣はまるで少女を起こすかのように、小さな体を前脚で優しく揺すり始めた。

やがて掠れたような呻き声があがり、地面に伏していた少女がゆっくりと目を覚ました。梳かせば綺麗な黒髪はぼさぼさで、見慣れない形の袍も裾や袖が泥に塗れていた。

表情が抜け落ちたような少女の瞳が、動けずにいる青を捉える。

沈黙の呪縛にかかったまま硬直していると、急に場違いな音が響いた。それが少女の腹の音だということに気付いたが、動けば謎の獣に食い殺されるのではないかという恐怖から、指の一本すら動かすことができない。

そんな青の目の前で、よろよろと起き上がった少女は、足許に転がっていた黄柑をぐしゃりと踏み潰

した。それを不思議そうに眺めたかと思うと、別の実を手に取り繁々と眺める。

そして、なにを思ったのか、いきなり黄柑に齧りついた。一心不乱に頬を動かす様は、まるで飢えた小動物のようだ。口の周りをべとべとにしながら、少女は地面に転がっていた黄柑を瞬く間に平らげてしまった。

青が採った黄柑は皮を剝いて中身を食べるのだが、少女はそれを知らなかったらしい。「周りが苦い」と、文句を零していた。

「何者だ？」

ようやくこちらに気づいたという様子で淡々と問い掛けてくる少女には、巨大な獣が見えていないのだろうか。いや、そんなはずはない。ならば、なぜ逃げないのか。青は混乱する頭で、それでも必死に口を動かした。

「に、にげ、逃げ」

必死で逃げなければならないことを伝えようとするが、歯がかたかたと震えるせいで上手く言葉にならない。それに、少女が訝しげに首を傾げる。

「落ち着かぬか」

「ひぃぃぃ！」

少女がこちらへと手を伸ばすと同時に、その背後にいた獣がゆらりと動きだした。警戒するように尾を左右へと揺らし、金色の瞳が恐怖に震える青を捉える。

もうだめだ。今度こそ、頭からばりばりと食べられてしまう。

「あ、う」

謎の獣が大きく口を開いたと同時に、青の意識は途切れたのだった。

遠くで、自分の名を呼ぶ声が聞こえた。

どこか必死なそれに、青は重い瞼をこじ開ける。

わずかに薄暗さを感じるのは、日が落ち始めている

からだろう。ぽかぽかと暖かかったはずの陽気も、今は肌寒さを感じるほどになっている。

辺りを見回せば、そこは見慣れた森の中だった。日暮れも間近なせいか、闇の片鱗を見せ始めた森はどことなく不気味な雰囲気を漂わせている。

まだ眠気が残る頭で、青はなぜこんなところにいるのだろうかと首を傾げた。いつもならば家畜の世話を終えて、夕餉の支度をする母の手伝いをしているはずだ。

どうして、と考えた時、青の脳裏に巨大な獣の姿が過った。

「う、うわぁ！」

悲鳴をあげ、慌てて周囲を見回すが、それらしい影はどこにも見当たらない。どきどきと早鐘を打つ胸を片手で押さえ、青は思わず安堵の息を吐いた。

「もしかして、夢……？」

黄柑を採りに来た時、疲労のあまりに眠ってしまったのかもしれない。そう考えれば、見たこともない巨大な獣との遭遇も、夢の中での出来事のように思えた。

また、遠くで自分の名を呼ぶ声が聞こえた。きっと、なかなか戻ってこない青を心配した家族が捜しに来てくれたのかもしれない。休憩の合間に、青が森に通っていることを父と母は知っていた。

ここにいるよ、と声をあげようと思った時だった。

青は、地面に転がった籠に気付いた。しかし、収穫したはずの果実が一つも見当たらない。もしかしたら、収穫したことすら夢だったのだろうか。訝しげに周囲を見回し、足許を見下ろした青は愕然とした。

兄のお下がりである古びた短服が、なぜか真っ白な袍に変わっていたのだ。裾には乾いた泥が付着しているが、細かく織られた生地の手触りに、上等な糸で作られたものだということが知れた。

ただ、着せ方が乱雑で、襟の合わせ目はぐちゃぐちゃで適当に結ばれた帯も歩いただけで解けそうな

くらい緩い。

「でも、これって……さっきの」

青は唖然として呟く。

謎の獣の背に乗っていた少女の服を、なぜ自分が着ているのだろうか。そして、本来、自分の服であるはずの短服はどこに消えてしまったのだろうか、と。

青は半狂乱になった両親に見つけられるまで、その場で茫然としていたのだった。

そんな馬鹿な話があるか、と崔は心中で悪態をついた。

王都、華安へと続く街道の警備隊に配属されて十五年。今年、三十五になる崔は、念願の隊長職に任ぜられたばかりだった。

関所の近くにある集落には、愛しい妻と、目に入れても痛くないくらい可愛い子供たちが住んでいる。家族のためにも真面目に職務に励んでいるわけだが、その内容といえば関所の通行税に文句をつける商人の相手が大半だ。滅多なことでは野盗や妖も出没しない、実に平和な職場である。

そんな街道警備隊に連絡がもたらされたのは、昼も過ぎた頃だった。

慌てふためいた様子の商人たちが、続々と関所に駆け込んできたのだ。なかには荷駄を放り出し、馬に乗って逃げてきた者もいるほどだ。野盗にでも襲われたのかと気を引き締めて問い質せば、真っ白な虎が街道を走っているのだという。

「馬よりは小さかった。だが、見たこともないくらい巨大な虎だった」と、顔を青ざめさせた商人たちは口々にそう証言したのだった。

しかも、その虎の背には小さな子供が乗っていたらしい。冗談にしても、あまりにも馬鹿馬鹿しい話である。

「崔隊長。どうします？」

どう反応してよいのかわからないといった様子で、部下が声をあげた。一人ならば夢でも見たのだろうと笑い飛ばすこともできるが、複数の目撃証言が寄せられている。

「念のために確認しておいた方がいいだろう」

商人たちの話を頭から信じたわけではない。だが、巨大な虎が街道を走っているという報告を受けて、そのままにはしておけない。少なくとも、真偽を自分の目で確かめる必要があるだろう。

「馬を準備しろ。確かめに行くぞ」

「はい！」

街道の関所に設けられた警備隊には、見回り等の業務はない。見回りに兵を割く余裕がない、というのが本音である。配属される人数が少ないのだ。兵力を分散させている時に野盗の報告を受けても、少人数ではどうすることもできない。そのため、問題が発生したという報告を受けてから現場へと向かうのが常だった。

もっとも、そのような事態は、崔が警備隊に配属されてから、数えるほどしかなかったが。

「久方振りの出動理由が、真実味のない情報ですか。どうせ、あいつらの見間違いでしょうよ」

古株の部下の一人が、気だるげに呟く。確かに、背に子供を乗せた大虎など見間違い以外の何物でもないだろう。

短服の上から、胸甲と背甲を肩で結ぶ形の鎧甲を身につける。肩から腕を防御する披搏と、足を防御する膝裙をつければ準備は完了だ。

「とにかく、確認だ。文句を言うのはそのあとでもいいだろう」

出動するのは全員で十名。万が一に備えての人数だ。関所に数名の部下を残し、馬を走らせた。

街道とは銘打たれているが、剝き出しの地面には凹凸が多い。おかげで古い荷馬車が脱輪して立ち往生することもしばしばだ。中にはなんとかしてくれと苦情を言ってくる者もいるが、街道の整備は警備

隊の管轄ではない。

馬たちもたまに走り辛そうに速度を緩めるが、王都によほど近いところでもない限り、どの道も似たようなものである。道の両脇には田園が広がり、それが過ぎれば鬱蒼とした木々が待ちかまえていた。

訴えどおりに子供を乗せた虎がこちらに向かっているとすれば、そろそろ出会うはずである。子供を振り落とさないためにか、虎の走りは馬のそれよりも遅いとのことだった。

――本当に虎がいるのだろうか。

それは、崔だけの思いではなく、他の者たちの心境も似たようなものであった。

従来、虎は山奥に生息する生き物である。獰猛な性格に反して警戒心が強く、滅多なことでは人里に姿を現すことはない。崔自身、虎の死体は目にしたことはあっても、生きたそれを目にしたことは一度もなかった。きっと、部下たちも似たようなものだろう。

ただの見間違いならば、商人たちに酒でも奢らせるとしよう。どうせ、あいつらが大げさに喚いているだけだ、と崔が心中で商人たちを嘲笑った時である。

視界に白い塊が映った。

「さ、崔隊長。商人たちが言っていたのは、あれですよね」

声をかけてきたのは、今年入隊したばかりの新人だった。

声が微かに震えているのは、相対しているものが証言通りの巨大な虎だからだろう。あれに襲い掛かられたら、一溜まりもない。馬たちも興奮するように体を震わせている。

手綱を引き速度を緩めれば、相手も一定の距離を置いて立ち止まった。

「本当なんだ」

「ああ。そのようだな」

見たこともないほど巨大な、というには語弊があるが、それでも充分な巨軀を誇る大虎は、威嚇するようにこちらを凝視している。それだけで、崔の背筋に冷たいものが流れた。

だが、任務を放り出して逃げることはできない。そうしたいのは山々だが、部下の一人が告げ口しようものなら、隊長である自分の首はあっという間に胴から離れてしまうだろう。任務の放棄は、それほどまでに重いのだ。

「隊長、あの、子供は……？」

大虎の背に跨るのは、十歳かそこらの小柄な少女だった。農民の子だろうか。明らかにお下がりだとわかる身の丈に合わない短服は、少し離れた場所からでもわかるくらい着古されたものであった。

しかし、農民の子がなぜ大虎の背に跨っているのか。いや、跨っていられるのか。通常ならば救出するために動くのだが、あまりの異様さに崔は命令を下せずにいた。

「……おかしいだろう、あれ」

背後で聞き慣れた声がそう呟いた。商人たちの見間違いだ、と言っていた古株の部下だ。確かに、目の前の光景はおかしい。肉食獣である虎が、人を乗せて走るわけがないのだ。ならば、背に跨る子供もおかしいということになる。

「もしかして、妖か？」

「人に化けているのかもしれませんよ」

前者は困惑するように、後者は脅えを滲ませた口調で告げられた。人に扮することのできる妖など聞いたことはないが、誰も知らないだけかもしれない。妖ではない、と否定する根拠はなかった。

「どうします？」

「……退治するしかなかろう」

特に大虎の方は野放しにしておくことはできない。こちらに被害を出さずに退治できるかどうかは不明だが、四方から囲んだ上で槍を突き出せば猛獣であ

っても逃げ道はないだろう。
　警備隊は全員で十名。誰もが腕に自信のある者たちばかりだ。崔は表情を引き締めた。
「周囲を囲んで、一気にとどめを刺すぞ」
　崔の声に、周囲の部下たちは頷いた。指示に従い、道を遮るように広がる。道の端にいる者たちが、徐々に大虎との距離を縮めはじめた。
　崔自身も慎重に相手との距離を計りながら、少女に向かって話し掛けた。人の形をしているということは、もしかしたら言葉が通じるかもしれないと思ったからだ。
「貴様、何者だ！」
　得体の知れないものを相手にするという恐怖を感じながら、崔はできるだけ貫禄のある声を出した。こちらは九名の部下を率いる身である。多少のことで怖じ気づいては示しがつかない。
「答えろ！」
　重ねて問えば、大虎に乗っている少女が顔を上げた。一切の感情を失くしたような瞳に、崔は言い知れぬ畏れを感じずにはいられなかった。
「――そこを退け。そなたらに構っている余裕はないのだ」
　凛とした声音。十やそこらの子供にはない威圧感に、崔はわずかにたじろいだ。しかし、ここで怯んでいては隊長職は勤まらない。
「やはり、子供の姿をした妖か！　その虎を従えなにをするつもりだ！」
「ふむ……私は妖ではないのだがな」
「我々を惑わす気か！」
　崔が片手を上げ、部下たちは馬上から、担いでいた槍を片手で構えた。馬たちは興奮しているが脅えている気配はない。
　一気に片をつけるため、崔が命令を下そうとした時だった。
「咆えろ、白桃！」
　少女の命令に従い、大虎は地響きのような咆哮を

あげた。それに真っ先に反応したのは、部下を背に乗せた馬たちだった。

勝手に走り出す馬もいれば、混乱のあまり乗り手を放り出す馬もいる。崔の乗る馬も脅えて駆け出そうとしたため、手綱を引いて押さえるので精一杯であった。

その混乱に乗じて、少女を背に乗せた大虎は颯爽と兵士たちの間を駆け抜けた。制止する暇もない。気付いた時には、すでに双方の距離は大きく開き切っていた。

今から追えば、そう遠からずに追いつくことはできるだろう。しかし、馬たちは脅えきっている。また、森に逃げられてしまえばそれまでだった。

「崔隊長、どうしますか……？」

「関所に戻って華安に報告だ。なにを目的としているかは不明だが、あんな猛獣を野放しにしておけるものかっ」

吐き捨てるように告げれば、慌てたように新人が頷いた。あの大虎がこのまま街道を走り続ければ、また別の関所でも行く手を阻まれることだろう。それが、彼奴等の最後だ。

「さっさと馬を宥めろ！　行くぞ！」

しかし、崔の予想は裏切られることになる。

この関所を最後に、大虎の目撃情報はぱたりと途絶えたのだった。



二百六十五年の歴史を持つ華国。その王都華安は、豊かな水量を誇る長河の流域に位置する。水路と陸路の両方を兼ね備えた華安は、王都と呼ぶに相応しい華やかな都市として栄えるに至った。

華安一の規模を誇る龍神大路は、幅広の道脇に様々な露店が軒を連ね、夕刻の鐘まで人波が途切れることはない。

威勢のよい声が飛び交い、怒声が混じり、雑多の足音、俥を引く馬の蹄が地を蹴り、場の喧騒を作り上げている。無許可で開かれた露店を取り締まる役人が、たまに場を騒がせていくこともある。しかし、今日はその姿もなく、店を営む者、買い物に来た客にとって騒がしくも平穏な一日だった。

いつもと変わらぬ光景。

その際限なく続く人混みの中に、それを縫うようにして歩を進める一人の少女がいた。

歳の頃は十ほど。頭上で丸めた黒髪を桃色の巾で包み、両脇の耳にかかる部分を胸まで垂らしている。なぜか幼く愛らしい風貌とは不釣り合いな、農家の少年がまとうような麻の短服を着ていた。大人の男の腰までしかない小柄な体が、服の中で泳いでしまっている。

少女の名は春蘭。

腰紐の先に揺れる金色の玉が、春蘭の歩みに合わせ揺れている。この年頃にしては、足早な歩みだった。

大路から小路に入り、時折、太陽の位置を確認しながらも迷いのない足取りで進む。やがて辿り着いたのは、立派な門構えの屋敷だった。

「ふむ。どうやら、ここのようだな」
なにかを確認するように一つ二つ頷き、おもむろに「誰かおるか！」と声を張り上げる。すると、姿を見せたのは十三、四に見える少年たちだった。
一人は気の強そうな、もう一人は気弱そうな顔付きをしている。質素な短服を着た少年たちは、門前に立つ少女に訝しげな眼差しを向けた。
その視線に、春蘭は怯む気配すら見せずに問い掛けた。
「ここは、誰の屋敷だ？」
「お前、誰だ」
口を開いたのは、気の強そうな少年だった。春蘭を見る目は、お世辞にも友好的とはいえない。
「誰の屋敷だ、と訊いておる」
対して、春蘭は落ち着き払った態度で今一度、質問を繰り返した。その泰然とした雰囲気に気圧されたのか、少年は不満げではあるが春蘭の求める答えを口にした。
「官吏である鄭仲望様の屋敷だ。お前のような餓鬼の来るところじゃない」
「ふむ。鄭家、か」
少年の威嚇も、飛び回る蠅ほどに気にならない春蘭は、その答えに満足し笑みを浮かべた。どうやら、ここが目的の場所で間違いはないようだ。
「――来い、白桃」
腰元の金色の玉が、その声に反応するように淡い光を放った。
次の瞬間、現れたのは巨大な虎。
あまりのことに声が出せない少年たちを尻目に、春蘭は颯爽とその背に跨った。
「行け！」
「ウオオォン」
雄々しい咆哮をあげた白桃は、たった一蹴りで見上げるほど高さのある家門を飛び越えた。着地したと同時に再び地面を蹴り、また見事な跳躍を見せる。
背後からは悲鳴のような少年たちの声が聞こえた

が、春蘭を乗せた白桃はかまわずに進む。春蘭もまた、少年たちを振り返ることはなかった。

塀と屋敷のわずかな隙間を走り抜け、屋敷の裏側に回ろうとしたところで、春蘭は回廊に寝そべる一人の青年に気付いた。

まず目に付くのが、顔の右半分を覆う長い前髪だ。よく見ると、実は端整な容貌であるとわかるのだが、そこまで観察する人間はそういないだろう。髪は布で包まずに首の後ろで一本にまとめられ、若葉色に染められた袍が、落ち着いた雰囲気を漂わせる青年に似合っていた。

回廊の日当たりのよい場所に寝転がり、はみ出した片足をぶらぶらと揺らし遊ばせている。少なくとも春蘭の常識では、真昼間から若人が取る姿勢ではなかった。一言で言えば「だらしない」。

「ふむ」

家僕には見えない。家主にしては若いが、直感的に見過ごせないと感じた春蘭は、鋭い声で「止まれ」と命じた。

白桃は青年の真正面で足を止め、威嚇するように低い声で唸った。青年は驚きも、恐れもせず、観察するように、白桃と、その背に跨る春蘭を見詰める。しばらくすると、飽きたというように視線を逸らしてしまった。

今まで会った者たちは、白桃に驚き慌てふためいて逃げ去るか、街道の警備隊のように敵意を向けてくるかのどちらかだった。

そのお陰で、白桃は人に受け入れられ難い姿をしているのだと悟った春蘭は、人目を避けるようにしてここまで辿り着いたのだ。

しかし、青年はまったく違った反応を見せた。白桃が恐ろしくはないのだろうか。

「ぬしは、白桃が恐ろしくはないのか？」

「普通の虎なら、怖いだろうね」

その普通の虎よりも巨大な白桃を、なぜ青年は恐れないのだろうか。春蘭の疑問に気付いた青年は、

面倒臭そうに体を起こした。
「虎は君に従順だ。君が命令しない限り、俺を害するようなことはないだろう。初対面である君に恨まれるような覚えもないから、だから、俺がその虎を恐れる必要もない」
胡坐を掻いて座りなおした青年は、たったそれだけで喋り疲れたといった風に溜息をついた。この青年が、少年たちの言っていた人物なのだろうか。半信半疑ではあったが、確認のために春蘭は口を開いた。
「ぬしが鄭仲望か」
「そうだけど？」
感情の籠もらぬ素っ気ない返答に、少女は目を細める。自堕落な人物なのか、単なる物臭か、どちらにせよあまり褒められたものではない。あの少年たちも苦労しているのだな、と春蘭は内心で深く同情した。
「私は李春蘭。盗人――鄭玄楽の居場所を教えてもらおうか」
「はあ？」
「……なんだ、その返事は。隠すつもりか」
春蘭の不機嫌な声音に反応し、白桃が「ウォン」と青年に向かって大きく咆えた。しかし、それに怯んだ様子は見られない。
心の底から億劫そうに、青年は溜息をつく。
「うーん、でもなぁ……」
「でも、なんなのだ。はっきりせんか」
「えー……面倒だよ」
「鄭玄楽の居場所を言うだけのなにが面倒なのだ。別にそこへ連れて行けと言っているわけではない」
青年が言い淀んでいると、二つの軽い足音が二人に近付いてくる。
「旦那様！　虎が！　おっきな虎が！」
「無事ですか、旦那様！」
「旦那様が食べられちゃったらどうしよう！」
「馬鹿！　不吉なこと言うな！」

「だ、旦那様ぁー！」
交互に響く怒鳴り声と泣き声がだんだんと大きくなったかと思うと、二人の少年が勢いよく駆け込んできた。少年たちは大虎を見るやいなや、顔を真っ青にして互いの手を握り合った。
「に、にには逃げてください旦那様！」
「食べられちゃいますよ！」
真剣な訴えに返されたのは、のんびりとした青年の一言だった。
「えー、逃げるの面倒だよ」
なに馬鹿なこと言ってるんですか、と青筋を立てた少年たちに怒られた青年は、大きく肩を竦め億劫そうに立ち上がった。
「房に案内するように」
そう告げると、ふらふらとした足取りで回廊の奥へと姿を消した。それを見送った春蘭は、とりあえず話は聞いてもらえるようだと頷き、少年たちの恐怖と困惑の視線にさらされながら、白桃を玉に戻したのだった。

案内されたのは、中庭が望める房だった。室内には卓と椅子が置いてある。
春蘭を案内するのは、門前で出会った少年たちの気の弱そうな方だった。もう一人は、春蘭に文句を言おうとして、仲望に止められていた。
「あの……こちらで、お待ちください」
「うむ」
遠慮なく椅子に座り、視線を中庭へと向ける。
「畑、か」
ぽつりと呟くと、顔を真っ赤にして俯く少年が視界の端に映った。
屋敷の規模から考えられる、壮麗な庭園の姿はなかった。昔は中庭であったであろうそこには、百花の代わりに様々な野菜が植えられていた。間違っても客に見せられるようなものではない。

もっとも、庭園の価値も魅力もとんとわからぬ春蘭にしてみれば、美味そうな野菜が実っている畑の方が好感が持てた。見事な庭園は眼福ではあるのだろうが、それだけでは腹は膨れない。

「ふむ。よく育っているな。ただ、少し土が痩せているのではないか？」

「え、えっ、え？」

「種を蒔く前に、腐葉土を混ぜるといい。今年はよいが、来年は貧弱な野菜しか実らぬぞ」

「ふ、ふようど？」

「知らぬのか？　私の邑では、秋になれば子供たちが落ち葉を掻き集めて作っていたものだが」

困惑する少年に、春蘭は案内の礼とばかりに、腐葉土の作り方を教授することにした。

「まず、庭の日当たりの悪い場所に穴を掘る。そこに落ち葉を集め、土を被せておくのだ。水気がなければ多少湿らせておけばなおよい。やがて、よい具合に腐った落ち葉を土に混ぜれば、野菜がよく実るようになるのだ」

突然の助言に少年があたふたとしていると、盆を手にした仲望が姿を見せた。少年を下がらせると、盆の上の茶器を卓に置く。

「白湯だけど、どうぞ」

「ありがたくいただこう」

春蘭自身、己が招かれざる客であるという自覚はあった。役人に突き出されてもおかしくない状況にもかかわらず、屋敷に招き入れてもらえたのだ。出されたものに文句は言えない。

白湯というには生温いそれを、春蘭は半分ほど飲んだ。

「見事な畑だな」

「俺は見てるだけだけどねぇ」

「質素倹約か。よい心掛けだ」

「貧乏だから」

「雨露をしのげる屋敷があり、こんなに立派な畑もある。家僕も歳の割には働き者だ。これのどこが貧

しいのだ？」

春蘭の認識では、貧しいというのは、寝床も狭く、日々の食べ物にも困るような生活を表す言葉だ。地方の邑に行けば、過酷な年貢の取り立てに苦しめられている者は多い。

「……そう言われれば、そうかな？」

「この周囲には立派な屋敷が多いからの。それらと比べれば、貧しいという認識もあながち間違いではないだろう」

鄭家の屋敷が位置する場所は、裕福な者たちだけが集まったと思える立派な屋敷が並んでいた。

家僕の少年たちは、仲望は官吏であると言っていた。もしかしたら、この辺りは宮中に勤める者たちが住む一画なのかもしれない。似たような職業の者たちが、一箇所に集まって暮らすのはよくあることだ。

「ところで、鄭玄楽はぬしの兄か？」

「そうだよ」

「確かに。よく似ているな」

何事にも興味のなさそうな表情が、ほんのわずかな反応を見せた。それは本人も気付かぬくらい、些細な変化だった。はて、兄弟で似ていると言われてこのような反応をするとはいかなることか。春蘭は内心で首を傾げた。

「身にまとう〝気〟がよく似ている」

「……それは初めて言われたかな」

「外見はちっとも似ておらんがな。あやつは、髪の色も瞳も真っ赤だった」

記憶に焼きついている男の顔を思い浮かべ、春蘭は思わず顔を顰めた。華国の住人たちは、その大半が黒い髪と瞳をしている。違う色を持つとすれば、それは異国の民だ。

「さて、そろそろ玄楽の居場所を教えてもらおうか」

「あー、うん。知らないんだよね」

「それでは困るのだ。五日前のことだ。あやつは私

から〝真名〟を盗んだ。どうあっても見つけ出さねばならん」

真名、と呟いた仲望は、不思議そうな——もしくは、どこか抜けていそうな——眼差しで、春蘭を見詰めた。

「へー、そりゃ大変だ」

まったく大変そうには聞こえない呟きに、春蘭は呆れる。

「……ぬしは、ちゃんと意味がわかって言っておるのか？」

背を丸め、だらしない姿勢で卓に頬杖をついていた仲望は、「まあ、それなりに」と曖昧な返事を寄越した。

〝真名〟は、魂の名だ。それは神のみが持つ。魂魄は万物に宿り、器である肉体より離れると形を保つことができない。すぐに霧散し、無に帰してしまう。しかし、真名を持つものは魂魄のみで存在できた。

故に、神聖なるものとして崇められた。中でも守り神は水害や疫病、災厄から人々を守っている。

その守り神である春蘭から、鄭玄楽は真名を奪ったのだ。

あの時の自分はきっと油断していたのだろう、と春蘭は述懐する。

未だかって、守り神から真名を奪おうなどという不届き者はいなかった。奪うことはできても、守り神を隷属させることが困難であるという理由もある。身を滅ぼしかねない相手に、誰が手を出すというのか。

だが、あの男はそれをやってのけた。

なにを目的としての行為かは不明だが、禁忌とされる守り神に手を出したのだ。人を食ったような笑みを浮かべていた赤髪の男を思い出し、春蘭は唇を噛み締めた。

「わかってるよ」

「本当か？」



春蘭が胡乱げな眼差しを向ければ、仲望は面倒臭そうに息を吐いた。それでも、会話を放棄することなく春蘭に応じる。

「ええと、君は神様だ」

「うむ」

「で、兄に真名を奪われた」

「そうなる」

頷いた春蘭に、仲望は次の言葉を探すように視線を彷徨わせた。しばらくして、仲望の片方しか見えない瞳が春蘭に向けられる。

「神様は、人になれるんだ？」

「人の姿にはわけがある。隷属を防ぐためだ」

「へー」

「……本当に理解しているのか？」

してるしてる、とばかりに仲望は首を上下させた。だが、どう見ても適当に相槌を打っているようにしか見えない。

「守り神を隷属させるなど、あってはならぬ鬼畜の所業。実行した者は神殺しとして、世を追われ死後も悪名を残すことになる」

「だろうね」

またもや適当に頷いて寄越した相手に、春蘭は首を傾げた。春蘭から真名を盗んだのは仲望の兄である。つまり、世を追われ、死後も後世に悪名を残すのも彼の兄なのだ。

それにもかかわらず、なぜこうもあっさりとした反応しか返さないのだろうか。先ほど兄と似ていると言った時の微妙な反応といい、彼らにはなにか確執のようなものがあるのかもしれない。もっとも、真名を取り戻すことを第一とする春蘭には、関係のないことではあったが。

「私は、ここから人の足で二十日ほどのところの小さな邑の守り神だ。いや……だった、と言うべきか」

真名を奪われ隷属させられれば、主となった者の許しなく力を使うことはできない。主を持つことになり、それでは守り神として邑を守ることはできな

い。

「人の姿をとれるのは、私が神となる前、ぬしと同じ人であったからだ。肉体は私の〝神気〟によって生前の形を留めてあった。李春蘭に戻れば、真名は意味を失くす。とっさに神としての力を封じ、魂魄を元の器に戻して、形勢を立て直すために逃げたのだ」

「ずいぶん遠いとこから来たんだ」

どこまでも気の抜けた返答に、春蘭は微かな苛立ちを感じた。ぬしはこの事態をどう思っておるのだと詰問しそうになる。だが、声を荒らげたところで、この男の態度が改まるとは思えない。

ゆっくりと呼吸し、春蘭は昂りそうになった気持ちを落ち着けた。久しく忘れていた〝感情〟は、同時に戸惑いも運んでくる。

〝生きる〟という感覚は、あまりにも久し振りで、時に息をすることも忘れてしまいそうだ。時が経てば腹が減り、夜がくれば眠くなる。不便極まりないと感じるのは、守り神として長い時を過ごしてきたからだろう。

やはり、早く真名を取り戻し、元の姿に戻るに限る。

「ぬしは、鄭玄楽の居場所を私に教えるだけでよいのだ。弟ならば、兄の居場所くらい知っておるだろう」

仲望を睨みつければ、深い溜息が漏れた。

「死んだよ」

告げられた言葉を理解できず、春蘭は眉を寄せた。仲望は抑揚のない声音で淡々と続ける。

「四年前の戦で死んだ。教えられるとしたら、墓の場所だけだよ」

予想外の答えに、春蘭は唖然とした。

鄭玄楽が四年前に死んでいた。そんなはずはない、と春蘭は心中で否定する。真名を奪ったのは、間違いなく鄭玄楽という男だった。

「隷属させるということは、自身の名を相手の魂魄

に刻みつけるということだ。神であった私の魂魄には、鄭玄楽の名が刻まれている。それが虚偽であれば、そもそも隷属は成立しない」

人の〝名〟は、真名とは違う。だが、この世に誕生した際、〝名〟をつけられたことによって、人は人として存在するのだ。

現世で名を偽ることはできても、一人に対し、〝名〟は一つしかない。

「遺体は見つかったのか？」

「……」

返答はなかった。見つからなかった、ということだろう。春蘭は思わず安堵の息を吐いた。

「ならば、あやつが生き延びていてもおかしくはないな」

「そうだね」

もう少し驚いてもよさそうなものだが、仲望は相変わらず気の抜けたような口調を変えない。仕える主人がこれでは、あの少年たちはさぞ苦労していることだろう。春蘭は再び、同情を寄せた。

「私は生前、占師をしていた。己の行く末を占った結果、ここへ向かえという答えが出たのだ」

てっきり、鄭家の者に鄭玄楽の居場所を訊けば解決するとばかり思っていたのだが、どうやら違ったらしい。ならば、なぜ卦はここを指し示したのだろうか。

「盆を借りるぞ」

春蘭は、卓の脇に立てかけられてあった盆を手に取り、そこに白湯を注いだ。

「む。水が足りぬな。ぬしのも貰うぞ」

仲望の前に置いてあった茶器を手に取り、同じように白湯を盆に注ぐ。その間、仲望は春蘭を咎めるでもなく、無言のままその行動を見詰めていた。

懐から八角形の盤を取り出した春蘭は、それを盆に張った水の上に浮かべる。春蘭が手を掲げると、水面で小刻みに揺れていた盤がぴたりと静止した。盤の表面に彫られた複雑な文様を、水が出口を探す

かのようにゆっくりと辿っていく。
それを目で追った春蘭は、ぽつりと呟いた。
「……やはり、ここか」
占は変わらず鄭家を示している。あの男から逃れた際、手掛かりを求めて占った結果と寸分も違わない。
その時のことを、春蘭は思い出した。

――逃げることができたのが、せめてもの救いだった。
そうでなければ、自我を抑制され生ける操り人形とされていたことだろう。
脳裏に浮かぶのは、紅い髪の男。
油断していたのだ。
〝守り神〟に手を出すなど、誰が思うだろうか。白い虎の背に必死でしがみつきながら、春蘭は臍を噛んだ。

「――止まれ、白桃」
鋭い声で命じれば、岩場を見事な跳躍で進んでいた虎が動きを止めた。その背から下りた春蘭は、ゆっくりと周囲を見渡した。
春蘭が立つのは、山肌が露出した岩場の中腹だった。視線を下に向ければ、鬱蒼と生い茂る木々の森が広がっている。一度迷い込んだら二度と出ることは叶わない、そんな印象を抱かせる不気味な森だ。
ごうごうと、岩場に向かって突き上げてくるような風が、少女の長く豊かな髪を乱した。
ここまでくれば、追うのも容易なことではないだろう。
「水場の匂いがする……」
足許に気をつけながら岩場を移動していると、少し離れた場所に小さな滝を見つけた。岩を伝い落ちる冷水でのどを潤し、ほっと安堵の息をつく。
ここでようやく、春蘭は重度の緊張から解放された。よく見れば、指先が小刻みに震えていた。なぜ

震えるのか、と訝しげに首を傾げる。

人が体を震わせる時。それは、恐怖を感じた時だ。では、自分はあの男に恐怖を感じていたのだろうか。

「わからぬな」

そもそも春蘭は、〝恐怖〟という感情自体を忘れて久しいのだ。喜びも悲しみも苦しみも、怒りすら感じずに長い時を過ごしてきた。

「……実体があるとは、不思議な感覚だな」

岩の窪みに溜まった水に気付いた春蘭は、そこに映し出された懐かしい姿に目を細めた。この体に戻るのは、どれほど振りだろうか。

水鏡に映るのは、十ほどの小柄な子供だった。腰に届くほどの豊かな黒髪は、虎の背にあったせいで乱れに乱れている。死に装束と呼ぶには華美な白い着物も、至るところに泥が撥ね黒い染みを作っていた。

「名は……確か、李春蘭だったか」

それが、人としての少女の名だった。人として生まれ、春蘭の親が名付けてくれた名だった。

手についた泥を水で落とし、その手をゆっくりと日差しに翳す。いつの間にか震えは治まっていた。その代わりとばかりに、岩場に吹く風の冷たさに指先がじんと痛んだ。

――やはり、違和感は拭えない。

指先を動かしながら、まるで一つ一つの動きを確認するかのように春蘭は自身の体を点検した。長い間、離れていたとはいえ元は自身の体だ。動いているうちに馴染むだろう。

目立った外傷がないことを確かめると、春蘭は懐から八角形の盤を取り出した。大きさは子供の顔ほどだろうか。盤の表面には複雑な文様が彫られ、その中心に乳白色の丸石が嵌め込まれていた。

それを水溜まりに浮かべ、盤上に手を翳す。眠っていた記憶を手繰り寄せながら、ゆっくりとそこに〝気〟を注いだ。

しばらく水面で小刻みに回転していた盤が、なに

かを見つけたようにぴたりと動きを止める。盤上の溝を浸食する水の動きを眺めていた春蘭は、強い決意の滲んだ眼差しでとある方角を睨みつけた。
「烏の方角が、私にとっての〝吉兆〟か」
盤を手に取り縦に振り下ろせば、水飛沫が岩を濡らした。あの男にかんする手掛かりを、少しでも多く集めなければ。
そうして、春蘭の長い旅が始まったのである。

あれから五日。華安に辿り着くまでは苦労の連続だった。
〝人〟としての感情や、生きる上で当然と思われる行動を、春蘭はすっかり忘れてしまっていた。途中で幾度死に掛けたことか、と嘆息する。
しかし、真名を取り戻すためには、ここに留まる必要があるようだ。
「決めた。しばらくの間、ぬしの世話になる」
よろしく頼むぞ、と言い掛けた時、室内に勢いよく影が駆け込んできた。
「ふざけんな！　誰がお前みたいな得体の知れない奴を居候させるもんか！　子供だからって甘えんじゃねぇぞ！　すぐに追い出してやる！」
「啓璋、落ち着いて！　ぼ、暴力はだめだよ！」
春蘭に摑みかかろうとする少年を、もう一方の少年が涙目になりながら必死に制止する。
「なんだ。立ち聞きしておったのか」
「違う！　旦那様、違いますからね。ちょっと様子を見に来たら、こいつが旦那様の世話になるとか言うから。それ以外は、なにも聞いてません！」
元気のよい家僕だな、と春蘭は掌で耳を押さえた。卓に乗り上げるような勢いで叫んでいた少年は、はっと身を正したあと、睨むような眼差しを主である仲望に向けた。
「……旦那様。まさか、面倒だから居候させようなんて思ってないでしょうね？」

「えー、だめかな？」
「だめに決まってます！　まったく、なに言ってるんですか！　あんな化け物みたいな虎に乗るような得体の知れない奴、屋敷に置くなんて絶対に反対です。それでなくとも、うちに客人を養うような余裕はありません！」
「啓璋、そういうことをお客様の前で言っちゃだめだよ！」
　その言葉に、春蘭は視線を畑となった中庭へと向けた。
「そんなのかまってられるか！　食べて行くのがやっとなんだぞ！」
「でも、僕らの分をちょっと減らせば……小さい子だから、そんなに食費もかからないよ」
「馬鹿！　これ以上、量を減らしたら伸びる背も伸びなくなっちまうぞ！」
「え、でも、背なんて放っておいても伸びるって、裏のおじさんが……」
「食うもん食ってればの話だろ！」
「そうなの？」
「それに、あの虎がどんだけ食うか、考えただけで頭が痛くなる！」
　少年の怒鳴り声に、仲望が思い出したように春蘭を見た。
「そういや、さっきの虎は？」
「うむ。白桃は先代の守り神から譲り受けたものだ。だから、神としての力を封じても、姿を現すことができる」
　神獣は神の使いとして崇められる。稀に人が隷属させることもあるが、それはほんの一握りにすぎない。
　隷属させられた神獣はそれまでと違い、隷属した相手から気を得るようになる。そのため、よほど強い気の持ち主でない限り、神獣は衰弱して死んでしまうのだ。また、それは気を吸い取られ続ける側も同様だった。

その名の通り、神獣は神の獣。神でなければ、従わせることは難しいのである。

「先代の守り神は、今は緩やかな眠りについておる。そして、二度と目覚めることなく消滅を迎えるだろう。それまでは、白桃も私の傍にある」

春蘭は腰紐に結わえてある玉を、慈しむように撫でた。神となった時から今に至るまで、白桃だけが変わらず傍にあり続ける。

「あれの食の心配は無用だぞ。白桃は神獣。なにも食べなくとも生きてゆける」

神獣の存在が理解できないのか、少年たちは揃って不可解そうな表情を浮かべた。

しかし、屋敷があり、畑もあるが、鄭家の貧窮具合はよほどらしい。先ほど、門前で啓璋が主は官吏だといっていたはずだが、それほどまでに薄給なのだろうか。

仲望の着ている袍は、上等なものとは言い難いが丁寧な作りで、顔付きさえ正せば気品のある格好に仕上がるだろう。

少年たちも、体にぴったりと合う短服をそれぞれ着用している。春蘭が華安に来る途中、偶々出会った少年と交換した服に比べれば、生地も格段によいものだ。

だが、それ以外はどうだろうか。広い屋敷の内部をすべて見て回ったわけではないが、どこか寂れた雰囲気が漂っていた。察するに、雇われているのも少年たち以外にいないようだ。使用人を雇えないほど困窮している風には見えないが、春蘭が知らないだけで大きな借金でも抱えているのだろうか。

「とにかく、絶対に断ってください！」

「……面倒臭いなぁ。いいじゃないか、部屋は余ってるんだし」

「そういう問題じゃありません！」

気の強い方の少年は、今度は自分の主に食って掛かっている。

やはり、面倒臭がっているばかりの主には手を焼

いているようだ。これでよく家僕である少年たちに愛想を尽かされないものだと、春蘭は逆に感心してしまった。

しかし、食糧が貰えないというのは痛い。〝食事を取る〟という概念を失念していた春蘭は、華安へ向かう途中、空腹のせいで行き倒れそうになったのだ。

あの時、偶然、果実を持った少年に出会わなければ飢え死にしていたことだろう。その少年は、なぜか白桃を見て気絶してしまったので、ついでに着ていたものを動き易い服と交換させてもらった。おかげで、白桃に跨る際、どうしても邪魔になっていた裾を気にする必要もなくなった。

「――つまり、自分の食い扶持をなんとかすればよいのだな？」

春蘭の言葉に、主に食って掛かっていた少年は胡乱げな眼差しを、もう片方の少年は困惑したような眼差しを向けた。仲望はあいかわらず、ぼんやりとしたなにを考えているのかわかり辛い表情を浮かべている。

「私とて、無償で世話になる気はない。それ相応の対価は払うつもりだ」

「なにをくれるっていうんだ？」

「ちょっと、啓璋！」

「友寧は黙ってろ。生活がかかってるんだぞ」

挑むような少年の視線を受け、春蘭は再び盆に浮かんだ盤に向き直った。

「時に、そなたの名はなんという？　そっちの勝気な方だ」

「……孫啓璋」

「ふむ。では、そなたは？」

「えっと、高友寧っていいます」

水面をくるくると旋回する盤を眺め、それがぴたりと静止すると、春蘭は顔を二人に向けた。

「猿の方角……つまり、大路の方角だな。そちらに向かってみよ」

「なんでだよ？」
「行けばわかる。ああ、周りに注意を払いながら進むとよいぞ。もしも、何事もなく戻った場合は、私の占い違い。居候させろとは言わぬ」
「本当だな？」
「むろん」
頷けば、不本意げな表情を浮かべつつも、啓璋は友寧の手を摑んで出て行った。文句を言いつつも根は素直そうな子供だ。
「ところで、白湯をもう一杯貰えるか？　喋り続けたせいでのどが渇いた」
気だるそうにのろのろと房を出て行った仲望は、しばらくして新しい器を手に戻ってきた。
「水だけど」
「かまわぬ。ああ、今日くらいは水だけで我慢できるぞ」
啓璋の主張を信じるならば、現在、鄭家は金銭事情が大変厳しいらしい。子供が一人増えただけでもあの騒ぎようだ、仲望の俸給は雀の涙ほどしかないのかもしれない。ならば、自分の食い扶持くらいは自分で稼がねばならぬだろう。それくらいの甲斐性はあるつもりだった。
「それは、啓璋と友寧に言ってくれ」
家を取り仕切っているのは少年たちらしい。普通は屋敷の主の意向が最優先のはずだが、鄭家ではその主が権利を放棄しているようだ。つくづくできた家僕たちである。
「私を屋敷に逗留させるということは、兄の味方にはならないということでよいのか？」
「断っても無駄そうだし。それに面倒臭い」
仲望はどうでもよさそうな口調で告げた。
確かに、春蘭はなんとしてもここに居座るつもりだった。占いの結果が、この屋敷を示しているのだからしかたがない。
しかし、鄭家の主である鄭仲望という男は、実に摑みどころのない人物だ。本当に自堕落などうしよ

うもない男だったら、啓璋と友寧の態度にもそれが表れるはずである。しかし、少年たちの主に対する言動は遠慮のないものではあるが、尊敬や親愛の念が感じとれた。

ならば、この男は単なるだらしのない人物ではないのかもしれない。もっとも、眠たそうに欠伸する姿を見ていると、買い被りかもしれないという気持ちの方が強くなってしまうが。

それに、気になるのは鄭玄楽との関係だ。死んだと思われていた兄が生きているかもしれないという情報を得たにもかかわらず、仲望の態度は薄情とも取れるほど淡々としたものであった。普通ならば、なにがしかの反応があってもいいはずだ。

また、春蘭が玄楽を盗人と罵ったことに対しても、終始無反応を貫いていた。兄を庇う素振りも、兄を罵られ激昂することもなかった。

いったい、この男はなにを考えているのだろうか、と不審に思わずにはいられなかった。

春蘭が仲望を観察しつつ、水でのどを潤しつつ畑を眺めていると、あいかわらず不機嫌な啓璋と、その反対に上機嫌な友寧が、二匹の日干しにされた魚と、籠いっぱいの芋を持って帰ってきた。

「これで決定だな」

うむうむ、と頷く春蘭に、啓璋が食って掛かる。

「どういうことだよ！」

「まずは、なにがあったのか説明すべきではないか？」

春蘭の言葉に、啓璋はぐっと押し黙った。友寧と目を見合わせてから、渋々という風に口を開く。だが、あくまでも主に対する報告だと主張するように、仲望に向かって話し始めた。

「……俺たちはこいつに言われた通り、大路に向かって歩いて行きました。そしたら、途中の道端で荷物を背負ったまま蹲ってる爺さんがいて、声をか

けたら腰を痛めたって言うんです」
「それで、僕が荷物を、啓璋がお爺さんを背負って、家まで送り届けたんです。そしたら、お爺さんの家の人にすごく感謝されて。お礼だって、こんなにたくさん食べ物を貰いました」
「俺は、ただの偶然だと思います」
「僕は、偶然にしては出来過ぎてるかなって思います。なんか腑に落ちないっていうか……」
「なんだよ、じゃあこの餓鬼の占いが当たったとでも言うのか？」
「で、でも、偶然で片付けるのはちょっと……」
話を終えた二人は、説明を求めるように春蘭へ視線を向けた。ことの発端は、春蘭の占いによるものである。
それに、春蘭はすまし顔で答えた。
「私は宿泊させてもらう対価として、そなたたちの吉となる方角を占った。占いに従った結果、そなたたちは善意の対価として物を得た。これで、数日はそなたらの食い扶持が減ることはなかろう？」
しかし、啓璋は納得するどころか、顔を真っ赤にして怒鳴り声をあげた。
「ふざけんな！　俺たちは、見返りのために善行をしたわけじゃない！」
憤慨する啓璋の隣で、友寧もまた悲しげな表情を浮かべていた。春蘭は、なぜ彼らがそんな顔をするのかわからずに首を傾げる。
「ふむ。だが、ぬしらは私に対価を求めたであろう？　私はそれに答えただけだ。ふざけているわけではない」
啓璋は悪びれた風もなく淡々と答える春蘭に対し、「ふざけんな！」と捨て台詞を残すと、脇目も振らずに走って行ってしまった。それを追い掛けるようにして、友寧も房を出て行く。
「……あやつらは、なにがそんなに気に入らないのだ？」
腕を組み、納得できないと春蘭は眉を寄せる。守

り神であった頃は、託宣で邑に幸福をもたらせば喜ばれた。

そもそも啓璋たちの人間的な徳があるからこそもたらされた結果であるのに、なぜああも怒らねばならないのか。

説明を求めるように仲望を見れば、「いい子に育ったなぁ」と、声が返ってきた。

「どういう意味だ？」

「うちの教育がよいという証拠」

意味はわからなかったが、仲望の言葉には賛同しかねる部分があった。

「反面教師という例もあるぞ」

「ふーん」

「……雇い主が抜けていると、使用人たちはしっかり者になるのかもしれんな」

勝手に結論づけた春蘭は、椅子から下りると仲望の前に立った。

「それではしばらく、世話になる。食い扶持は違う方法で稼ぐ」

早々に鄭玄楽が見つかればいいが、そうでなければこの屋敷に滞在する糧を稼ぐ必要がある。

「一人増えたところで、今更なんだけどなぁ」

どんな台所事情なのかすら把握できていなさそうな仲望が呟く。春蘭は呆れて、思わず窘めてしまった。

「あの者らの言うことはもっともだと思うぞ。働かざる者、食うべからず、だ。世話になるのだから、対価を払うのは当たり前だ」

そういえば、国に仕える偉い官吏様が、日中にもかかわらず屋敷にいてよいのだろうか。

春蘭が守護していた邑では、それこそ大人子供関係なく、邑人たちは朝から晩まで汗水垂らして働いていたものだ。そうしなければ、暮らしが成り立たない。こんな風にのんびりしている者など一人もいなかった。

まったくもって〝官吏〟に見えない相手に、春蘭

は疑問を抱いた。
「ところで、ぬしの仕事はなんなのだ？」
「書籍の管理」
「宮廷に行かなくてもよいのか？」
「まあ、俺がいてもいなくてもよいようなところだからねぇ……でも、偶には参内しているよ。啓璋たちがうるさいから」
「よくそんな態度で辞めさせられぬものだな？」
仲望の言葉が本当ならば、俸給の無駄ではないのだろうか。なぜ、このような男を官吏として雇っているのかわからない。
「まあね、大人には色々と事情があるんだよ」
どうでもよさげに告げる仲望に、やはり反面教師だな、と春蘭は納得したのだった。



春も終わったこの時季。華安やその近辺の街は、雨季が訪れるまで穏やかな陽気に恵まれる。春蘭がここに辿り着く間も、気まぐれな夕立に遭うことはあっても、一日中雨が降り続いたことはなかった。

華安に到着した翌日の空は、前日と同じで、抜けるような青さが広がっていた。あてがわれた房室で着替えを済ませた春蘭が厨房に向かうと、不機嫌顔の啓璋に椀に盛られた芋粥を押しつけられた。

春蘭のことは気に食わなくとも、主の言いつけはきちんと守るようだ。やはり、主に似ずできた家僕である。

友寧は裏で薪割りをしているようで、薪を割る音が一定の調子で響いていた。

「……ところで、お前のあの虎はなんなんだよ。俺たちに危害を加えたりしないだろうな？」

春蘭は芋粥をすすりながら答えた。

「む。白桃のことか？　あれは私に隷属している神獣だ。私が命令しなければ、無闇に人を襲うことはない。ああ、でも私に危険が迫った時は違うがな」

「しんじゅう？　なんだそれ」

「説明してもわからぬだろう。とりあえず、白桃は無害だ。心配するな」

説明するよりも、芋粥で腹を満たすことの方が先決である。嵩増しのために入れられた雑穀のおかげもあり、汁をすする頃にはかなりの満腹感を得ることができた。

「やはり、果実とは違うの。種があると食べるのも面倒で、すぐに腹が減る」

「まさかお前、鄭家の財産を狙ってんじゃねぇだろ

うな？　そんで、旦那様に取り入ろうってのか！」
「ここには狙われるほどの財産があるのか？」
　空になった椀を一瞥し、春蘭は首を傾げた。悪意があっての台詞ではなかったが、啓璋は悔しげに奥歯を噛み締めている。
「そういえば、その仲望の姿が見えんな」
「旦那様を呼び捨てにすんな！」
「仲望はなにも言ってなかったぞ。もしや、まだ寝ているのではあるまいな？」
　ぎりぎり、と音が聞こえそうなほど歯を噛み締めた啓璋は、眉を吊り上げ怒鳴る。
「お勤めに決まってんだろ！」
「なんだ、今日は仕事に行ったのか」
「どういう意味だよ！」
「そのままの意味だ」
　啓璋の文句を聞き流しつつ食事を終えた春蘭は、これからの行動を考えることにした。
　第一の目標であった、盤が指し示す場所に辿り着くことはできた。
　鄭玄楽の居場所は摑めなかったが、それでも占いの結果はこの場所を示し続けている。ここに留まっていれば、玄楽本人に会えるか、そのための手掛かりを摑むことができるかするのだろう。
　啓璋には嫌われてしまったが、とりあえず数日の宿と食事は確保できた。問題なのは、その逗留期間だ。短く済めばいいが、長期にわたって滞在を余儀なくされる可能性もある。
　仲望は不要なようなことを言っていたが、実際のところ、家計をやりくりしているのはどう見ても啓璋たちである。その彼らが言うのだから、やはり火の車なのだろう。
「のう、啓璋。仲望は、それほどまでに薄給なのか？」
　鄭家の家人は、啓璋と友寧の二人だけだという。これほど立派な屋敷ならば、もっと多くてもよさそうなものだが。

洗い物に精を出していた啓璋は、不機嫌な態度を崩さずに答えた。

「今はどの官だって薄給なんだよ。まともに俸給を貰ってる方が珍しいぜ」

「ふむ。国の財政は、それほどまでに逼迫しておるのか？」

しかし、春蘭の記憶ではここ数年、大規模な戦が起こった覚えはない。

四年前――仲望の言葉を信じるならば、鄭玄楽が戦死したという戦も、相手は異民族だったと記憶している。社の近くに住む村人たちが、徴兵された家族や友人の無事を祈りにやってきたのだ。

もっとも、守り神としての春蘭は、邑を自然災害から守ることはできても、戦に向かった者まで守ることはできない。それでも、無事に帰ってくることができればよいと、祈った覚えがある。

もしも大規模な戦があれば、兵役に取られた者の身内が無事を祈願しに来ただろう。

同時に、飢饉という可能性も否定される。ここ数年は稀にみる豊作が続いているということで、春蘭の守護していた邑も飢えに喘ぐ者はいなかった。遠くの土地で飢饉が起こった場合は、必ず肥沃な土地を求めて民の流動が起こる。そのような兆候も見られなかった。

となれば、考えられるのは朝廷の腐敗か。

「なんだお前、知らないのか？」

「なにをだ？」

「この国のことだよ！」

「？」

そう言われても、守り神となってから今までの数百年間、自分が加護する邑より出られなかった春蘭は、邑以外の事情をほとんど知らない。祈願に訪れる者たちの口から、わずかな情報を得ていたくらいだ。

「華国の民なら、子供だって知ってるぞ」

「生憎だったな。私は知らぬ」

「お前、それが教えてもらう時の態度かよ！」
「なにか問題でもあるか？」
「おおありだ！」
「そう怒鳴ってばかりだと、のどを痛めるぞ」
「お、お前は、どうして、いちいち人のあげ足取りを……！」
　啓璋は、顔を真っ赤にしてさらに声を張り上げる。その声に驚いたのは、薪割りをしていた友寧だった。裏口から厨房を覗き込み、地団太を踏んでいる啓璋に目を瞠った。
「だめだよ、啓璋！」
「はぁ？」
　啓璋と春蘭の間に割って入った友寧は、涙を溜めた瞳で訴える。
「鍋で女の子を殴るだなんて！」
　よく見れば、確かに啓璋は右手に鍋の取っ手を摑んでいる。今の春蘭は十二歳の時の体だ。子供とはいえ一回り大きい啓璋に殴られては大変なことになる。
「なんだ、ぬしはか弱い女子を殴るつもりだったのか？」
「そんなことするわけねぇだろ！」
「えっ、違うの？」
「当たり前だ！　お前らと話してると、調子が狂う！　洗い物するから、もう話しかけてくるんじゃねぇぞ！」
　啓璋は肩で荒い息をしながら、鍋を乱暴な手付きで擦り始めた。
　一方、どうやら自分の勘違いだったと気付いた友寧は、困ったように啓璋の背中を見詰めていた。話しかけるなと言われてしまった手前、謝るにも声をかけ辛いのだろう。同じ家僕仲間というよりは、友人同士といった方がぴったりな二人だ。
　それを眺めていた春蘭は、啓璋から肝心の答えを聞いていないことに気付いた。話しかけてはいけないようなので、代わりに友寧の袖を引く。

「のう、友寧。なぜ、この国の財政は逼迫しておるのだ？」
「ええとね……偉い人たちが、贅沢ばっかりしてるから、かな？」
「もっと詳しく説明してくれ」
「え、でも春蘭にはちょっと難しいんじゃ……」
「子供扱いはしないでもらおう。私が幼いのは外見だけだ」
「そ、そう？」
外見だけを見れば、春蘭は友寧よりも年下である。そんな子供には聞かせたくない話のようだったが、真っ直ぐな瞳を向けていれば、友寧はやがて観念したように口を開いた。
「あのね、今の皇帝陛下は贅沢が大好きで、宮廷を何度も建て増ししたり、新しい離宮を造ったり、国のお金を散財しているんだ。そのせいで、国庫は空っぽなんだって」
「ふむ。なぜ、周りの者たちは皇帝を諫めぬのだ？」
「皇帝陛下に逆らった罪で、一族全員が死を命じられるからだよ。実際に、たくさんの官吏が処罰された。だから、みんな陛下が恐くてなにも言えないんだって」
「そのつけが、下々の者たちに回ってきているというわけか」
春蘭は眉を顰めた。春蘭が守る邑は、ここ数年、豊作が続いていた。
そのおかげもあって、決められた年貢を納めることにも苦労はないようだった。しかし、それは豊作だからこその話だ。
飢饉が続いた時は、本当に悲惨なものだった。春蘭は持てる限りの力を尽くしたが、それでも防げない場合もある。
そういう時は、弱い者から命を消して行くのだ。
「……地方の反乱が起こりそうな話だな」
負荷を強いられるのは、いつの時代も農民たちと相場が決まっていた。春蘭が人であった頃も、宮廷

の腐敗が酷く、地方では農民たちによる一揆が相次いでいた。

結局、春蘭が生まれ育った国は反乱軍によって滅びた。三つの勢力に分かれた反乱軍は、その指導者がそれぞれ皇帝を名乗り争い続けた。そして、三国が統一され、華国が誕生したのである。

「うむ。大体は理解したぞ」

「そう？」

「仲望は、なかなか大変なところに勤めておるのだな」

「うん……」

友寧の顔が不安げに曇った。友寧の語るような暴虐な皇帝の下で仕事をしていれば、なんの拍子に他人の巻き添えを食らうかわからない。しかも本人があれでは、心配するなという方がむりだ。

「旦那様が、そんなへまするわけないだろ！」

鍋を洗い終えた啓璋が憤然とした様子で、会話に加わってきた。

「旦那様は優秀なお方なんだ。処罰されるようなことをするはずない！」

「そ、そうだよね！」

「四年前の戦だって、大功を立てられたんだ。怪我さえなければ。あんな、なくてもいいような閑職に追いやられることも……」

啓璋は全身を震わせ、唇を噛み締めていた。友寧が慰めるように啓璋の背中をさする。

「戦……仲望は武官だったのか？」

あのぐうたらな姿で剣や槍を扱う姿を想像し――春蘭は挫折した。啓璋たちには悪いが、実際に見てみない限り信じることはできそうにない。

「禁軍では、弓の名手として名を馳せてたんだぞ」

「狩りに出掛けては、たくさんの野鳥を獲ってきてくれたよね」

「どれも一発で仕留められてたしな！」

啓璋と友寧は我がことのように、誇らしげに語る。だが、二人には悪いが、聞けば聞くほど別人のこと

を語られているようだった。
「ふむ。〝きんぐん〟とはなんだ？」
「お前、禁軍も知らないのか」
唖然とした様子の啓璋と友寧に、春蘭は頷いて見せた。軍というからには、多数の兵が所属するところなのだということはわかる。だが、それがどれだけの規模で、どのような時に動くのかまったく見当がつかなかった。
「禁軍は皇帝陛下直属の部隊なんだぞ。華国全土のせいえいが集められてるんだ。旦那様はそこに所属しておられたんだ。どうだ、すごいだろ！」
「なるほど。で、総勢でどれくらいの兵士が所属しておるのだ？」
「え、全部で？」
両目を見開いた啓璋は、助けを求めるように友寧を見た。しかし、わからないといった風に友寧は首を横に振る。
「た、たくさんだ！　大勢、所属してる！」
つまり、わからないというわけか。皇帝の直属というからには、それなりの規模だろうな、と春蘭は見当をつけた。
「とにかく、ぬしらが仲望を尊敬していることはよくわかった」
頷き、春蘭は椅子から立ち上がった。これ以上、主の自慢話を聞いている暇はない。
「さて、私はこれから屋敷の中を見て回ることにする。どちらか案内してくれぬか？」
「はぁあああ？　なんでそんなことしなきゃなんねーんだよ！」
「迷子にならぬためだ。それに探し物もある」
「ここに金目のものはねぇぞ！」
啓璋は目尻を吊り上げ、春蘭を威嚇する。金目のものを探していると言った覚えはないのだが、なにをそんなに怒っているのだろうか。
「鄭玄楽の形見の品もないのか？」
「な、なんでお前が玄楽様のことを知ってんだ

よ？」

　不審なものでも見るような眼差しを向けられるが、春蘭は構わずに続けた。

「あるのかないのか答えよ」

「ねーよ！」

　本当だろうか、と春蘭は啓璋から友寧へと視線を移した。すると、困惑した様子の友寧が、同意するように頷いた。

「その……あまり、私物を持たれる方じゃなかったから」

「そうか」

　鄭玄楽の遺品があれば、それを手掛かりに居場所を占うことも可能だった。〝物〟は持ち主の気を一番に受けやすい。長く持ち続けていればいるほど、気は移り香のように色濃く残る。

　しかし、玄楽が死亡したとされるのは四年前。さすがに、肌身離さず大切にしていた物でもない限り、居場所を探る手掛かりとして利用するのはむりか、と春蘭は嘆息した。

「ならば、案内だけでもしてくれ」

「誰がそんなことするか！　いいか、お前は余所者なんだ。勝手に屋敷内を歩くんじゃないぞ！」

　役所に突き出してやるからな、と啓璋は鼻息も荒く春蘭に詰め寄る。これは、実際に屋敷内を歩いていたら、この調子で怒鳴り散らされそうだ。

「しかたがないの。では、私はこれから外に出てくる。昼になっても戻らぬかもしれぬが、心配はせずともいいぞ」

「誰が心配するか！　そのまま帰ってくんな！」

「け、啓璋！」

「では、行ってくる」

　慌てる友寧と、そっぽを向く啓璋を残して卓を離れる。のどの荒れに効く薬草を見つけたら、摘んできてやろうと思いながら、春蘭は鄭家の門をくぐった。

門から出た春蘭は、青空の下、これから行くべき道を考える。

現在の体力では歩ける範囲は限られているため、そう遠出はできない。白桃を出すことができれば楽なのだが、街道を走っていた時のように囲まれては堪ったものではない。人の目があるところで、神獣は無闇に出すべきではないと学習していた。

最短距離で大路へと向かうこともできるが、今日は鄭家の周囲を散策し、周辺の地理を覚えておくのも悪くはない。

まずは、辺りの屋敷の特徴を覚えるように周囲を歩いた。どの屋敷も立派な門構えで、中を覗けば、忙しそうに行き来する家僕の姿を見ることができた。春蘭をじろじろと不躾に眺める者もいれば、露骨に無視する者もいた。見知らぬ子供が迷い込んだとでも思っているのだろう。

こういう屋敷は、中庭を畑にしなくても生活してゆけるのだろう。

「……さて、そろそろ大路に向かうか」

周囲の散策を終え、春蘭は大路へ向かうべく歩き出した。

啓璋や友寧が協力してくれれば、昨日のように食糧を手に入れることも可能だったが、あの二人にはそれが不評で、元々よく思われていなかったところを余計に嫌われてしまった。

「人とは不便よのう……」

守り神であった時は、物を食べる必要性がなかった。実体のない魂魄を維持するには、自然の気を吸収するだけで事足りたのだ。

今は一食でも抜くと、体が空腹を訴えてくる。無視すると、すぐに動けなくなってしまう。これは、華安に来るまでの間に実証済みだ。

鄭家に迷惑をかけるのは本意ではない。なんとかして食い扶持を稼がねばならなかった。

「こんなことならば、供物を銭に替えておけばよか

った――ん？」

しばらく歩いたところで、春蘭の足が止まった。耳を澄ませば、微かに人の言い争う声が聞こえる。すぐ傍の小路に誰かいるようだ。

塀の陰に身を隠し覗いてみれば、四人の粗野な風体の男たちが立派な俥を囲んでいるところだった。俥の傍には二人の少女の姿もある。十六、七歳の娘ざかりの少女たちだ。

春蘭が観察していると、男たちは二手に分かれ、それぞれ少女たちの腕を両脇から拘束するように摑んだ。

「姉様から手を放しなさい！　私たちを花中書令の姪と知っての狼藉ですか！」

妹が、顔を真っ赤にして怒鳴る。しかし、二人掛かりで両腕を捕まえられているため自由が利かないようだ。

一方、姉の方は具合がよくないのか、真っ青な顔で男たちにされるがままだ。

「騒がしい者たちだの……」と呟いた春蘭は、特に気にもせずその脇を通り過ぎようとする。しかし、春蘭に気付いた男に行く手を遮られてしまった。

「なんだ、この餓鬼は？」

「近所の餓鬼には見えねぇな」

値踏みするような男たちの視線に、春蘭は不快げに眉を寄せた。しかし、口を開く前に、焦ったような少女の声が響く。

「なにしてるの、早く逃げなさい！」

男たちに抗いながら必死で怒鳴る少女に、春蘭は足を止めて小首を傾げた。少女と自分には面識がない。なぜ怒られなければならないのだろうか。

「私のことか？」

「そうよ！　今すぐ逃げるのよ！　誰か、大人を呼んで、助け、むぐぐっ」

腕を押さえていた男に口を塞がれた少女は、真っ赤な顔で苦しげに唸っている。〝助けて〟とかろうじて伝わった言葉に、春蘭は足を止めた。

「ぬしら、娘が苦しんでいるではないか。放してやれ」

だが、男たちは春蘭を見て、揃って爆笑した。なにがそんなに愉快なのか、体をよじって笑う者までいる。

「ははは、こりゃすげぇ。俺たちに向かって〝放してやれ〟だとよ！」

「よくわかってないんじゃねぇか？」

姉の方を抱え上げようとしていた男たちが、野卑な笑みを浮かべ春蘭をねめつけた。そんな彼らに対し、妹の口を押さえていた男が怒鳴る。

「ついでだ、そっちの餓鬼も捕まえとけ！」

「こっちは服はぼろいが、なかなかの器量だ。この年齢でも、妓楼に高く売れるぜ」

「おい、顔に傷つけんなよ。値が下がっちまう」

「わかってるって」

どうも話が見えない。春蘭は訝しげな視線を男たちに向けた。

「ぬしらは、何者だ？」

「俺たちは怖い怖い人買いだ」

げらげらと笑い合う男たちに、その正体を知った春蘭は冷めた視線を送った。

春蘭がまだ人であった頃より、さらに百年前。人間の売買は法によって禁じられた。しかし、それでも女子供を誘拐まがいの手法で拉致し、妓楼や、裕福な者たちの妾、商人屋敷の家僕にと、売り飛ばす不届き者は存在した。

春蘭が守り神として守護していた邑でも、長年にわたりそういった被害が後を絶たなかった。中には貧困から、あえて子供を手放した親もいる。しかし、それ以外の親たちは、社を訪れ涙ながらに訴えた。奪われた子を無事に帰してほしい、そして、盗人共には神罰を、と。

だが、家族の許に戻された者は、誰一人としていなかった。

「愚か者め」

どす黒い感情が胸を覆う。
春蘭の〝怒り〟に気付かぬ男は、嬉々として手を伸ばしてきた。
男たちは疑わない。
金銭をもたらす商品が一つ増えた、それを単純に喜んでいる。まさか、その獲物が牙を剝くなど、夢にも思わないだろう。
感情の籠もらぬ声で春蘭が「白桃」と呟こうとした瞬間だった。
突然、どこからともなく投げつけられた槍が、男たちの足許に突き刺さった。
「てめぇら！　俺様の管轄でなにしてやがる！」
馬鹿でかい声に顔を向ければ、そこには二十代半ばと思しき青年が仁王立ちしていた。
気の強そうな目尻が特徴的で、なかなか精悍な顔付きをしている。眉を寄せ、男たちを睨みつける眼差しは厳しい。
青年は短服の上から、胸甲と背甲を肩で結ぶ形の鎧甲を身につけていた。その外見から、華安の警備兵か、どこかの屋敷で雇われている私兵だということがわかる。
「くそっ、よりによって龍乎かよ！」
「相手は一人だやっちまえ！」
剣を手にした四人の男たちは、殺気立った目付きで目配せしあうと、青年に向かって一斉に躍りかかった。
道幅は狭くはないが、それでも俥が通れるほどしかない。動きが制限される場所で、青年は四人もの男たちを相手にどう戦おうというのだろうか。
「んだ、てめぇら。俺様が姫子慮だとわかって向かってくんのか？」
明らかに不利な状況にもかかわらず、姫子慮と名乗った青年は、強気の姿勢を崩さない。剣を振りかぶる男たちを鼻先で笑い、腰に佩いていた剣を抜き放った。
がきん、と鈍い音を立て、目前に迫っていた男の

剣が真っ二つに折れる。茫然と立ちすくむ男の胴を薙ぎ払い、向かってきた二人の男の剣を素早く弾く。そして、側面の塀を蹴って男たちの背後に回ると、男たちの背中を蹴りつけ、よろけたところを剣の柄で頭を殴り気絶させてしまった。

「さーて、残りはてめぇだけだ」

「く、くそっ！」

孤立無援となってしまった四人目の男は、形勢不利と見たのか、近くにいた春蘭の腕を引き寄せ、乱暴な手付きで剣をあてがった。

「動くな！」

首筋に感じるひんやりとした刃の感触に、春蘭は「ふむ」と呟いた。視線の先では、子慮が悔しげにこちらを睨んでいる。

「この餓鬼を殺されたくなかったら――」

「のう」

春蘭は目の前の袖を引っ張り、腕の中から男を見上げた。

「私を殺したら貴様も終わりだと思うぞ。つまり、貴様には私を殺せないということだ」

男が春蘭に意識を向けた瞬間だった。疾風のように迫った子慮が、男の手から剣を撥ね上げる。春蘭の体を突き飛ばし、体勢を崩した男の肩を切り裂いた。

「ざまあみろ！」

剣の切っ先を仰向けに倒れた男の鼻先に向け、子慮は会心の笑みを浮かべ声高らかに哄笑した。突き飛ばされて地面に転がった春蘭は、その光景を唖然として見詰める。

「あなた、大丈夫！」

地面に座り込んでいた春蘭を助け起こしてくれたのは、男たちに取り押さえられていた少女だった。

「怪我はない？」

「うむ。平気だ」

服についた埃を叩き、少女は春蘭が怪我をしていないかどうか全身をくまなく確かめる。

「ぬしの連れの方はよいのか？」
「……ええ。大丈夫よ」
　春蘭の子供らしからぬ古風な言葉遣いに、一瞬、戸惑ったようだった。だが、少女はにっこりと笑って答える。
　見れば、俥に寄り掛かっている姉は、具合こそ悪そうではあったが、怪我を負っている風ではなかった。人買いも、商品を傷つけて、価値を下げるような真似はしないだろう。
「この俥はぬしらのものか？　御者はどうした？」
「あ……そこで気絶して」
　少女の視線を辿れば、俥の陰で倒れている若い男がいた。顔や手足の至るところが紫色に腫れ上がっている。
「派手にやられたようだな」
　腫れている部分に触れ、骨が折れていないことを確認する。
「ふむ。誰か屋敷に知らせに行ければよいのだが……」
　春蘭は、未だに哄笑を続けている青年に意識を向けた。
「おい」
「ふはははははっ！」
「おい」
「ふはははっ、はっ、ごほっ、ごほ！」
　笑い続け過ぎたせいか、今度は盛大にむせはじめた子慮を春蘭は呆れはてて見詰めた。
「ぬしは、なにをやっておるのだ」
「う、うるせ、げほっ、勝利の雄叫びって、やつ、げほっ」
　しゃがみ込んで荒い息をついている子慮の背を、春蘭はしかたなくさすってやった。戦いで勝つと、先ほどのような高笑いをしなければならないのだろうか。
「ふぅ、死ぬかと思ったぜ」
「むせたくらいで人は死なぬぞ」

「気分だ、気分！」

すっくと立ち上がった子慮は、一つ咳払いをすると茫然としている少女へと向き直った。そして、頬を朱に染めながら口を開く。

「お、おおおお怪我はありませんか？」

「何回〝お〟をつけるつもりだ」

「ばっ、ちょっと緊張しただけだ！」

「緊張する意味がわからん」

春蘭が首を傾げていると、俥に寄り掛かっていた年嵩の少女が、青い顔をしながらもこちらへとやってきた。そして、子慮に向かって拱手する。

「私は花翠蓮。妹は玉翠と申します。この度は、危ないところを助けていただきありがとうございました」

「あ、う、いえ、俺じゃなくて、私は龍乎虎慈軍の隊長を務める姫子慮と申します」

「龍乎の方でしたか。どうりでお強い、あっ――」

眩暈を感じたのか、翠蓮はふらりと体を傾かせる。咄嗟に少女を支えようと手を差し出した子慮だったが、玉翠に体を突き飛ばされて派手に転倒してしまった。

「姉様！」

翠蓮を支えた玉翠は、姉を気遣うように見上げた。

「お辛いのなら、俥に戻っていてください」

「大丈夫よ。ちょっと眩暈がしただけだから」

「本当ですか？」

「ええ」

仲睦まじい姉妹を見ながら、春蘭は転んだ拍子に肘を打って悶絶していた子慮に話しかけた。

「ぬしは、怪我をして動けぬ御者の代わりに、姉妹を家に送り届けてやるとよい」

「いってぇ……ん、ああ。それはいいが、ここどこだ？　そんで、てめぇは誰だ？」

体を起こした子慮の言葉に、春蘭は思わず自分の耳を疑った。

「私のことはどうでもよいが……ぬしは、先ほど

その男らに、ここは自分の管轄だと言わなかったか？」

「おう。間違いなく俺様の管轄ではあるが、一々道を覚えてるわけじゃねぇ。今日は偶々、道を覚えてる奴が迷子になったんだ」

「迷子になっているのはぬしの方だろう」

「俺から目を離すあいつが悪い」

立ち上がったあと、偉そうな口調でそう告げた相手に春蘭は同意できなかった。こんな男が隊長で、大丈夫なのだろうか。

「道を訊きながら行きゃいいだろ」

「訊ねた相手が、姉妹の屋敷を知っていればよいがな」

「知っている奴に訊くに決まってんだろうが。片っ端から声をかければ、一人くらい捕まるだろ」

自信満々の様子で笑みを浮かべる子慮に、春蘭は「そうか」としか言いようがなかった。自分は同行しない以上、意見を挟むつもりはない。

大路に出れば人で賑わっているのだ、子慮の言う通り姉妹の屋敷を知っている者くらい見つかるだろう。俥から推測するに、姉妹は身分のある家の子女だ。顔は知らずとも、姉妹の家はわかるかもしれない。

「よし、そうと決まればそいつを俥に運ぶか」

勝手に納得した子慮が、意識のない御者を俥に運び込んだ時だった。春蘭が来た道の逆の方向が騒がしくなったと思えば、血相を変えた複数の男たちが「翠蓮様！　玉翠様！」と姉妹の名を一心不乱に叫びながら、こちらへと向かって走り寄ってくる姿が見えた。

「あれは、ぬしらの家の者たちか？」

寄り添い合う姉妹に訊ねれば、安堵のためか涙ぐむ二人は何度も頷いた。家人たちが来れば、もう問題はないだろう。

「では、私はこれで――」

「待って」

腕を摑まれ、春蘭は歩き出そうとしていた足を止めた。

見れば、少しばかり憤慨した様子の玉翠がいた。家人が来たことで落ち着きを取り戻したせいか、先ほどのしおらしさを微塵も感じさせぬ顔付きで少女は言った。

「助けてもらったのだから、お礼をするわ」

「気にせずともよい。それに、ぬしらを助けたのは私ではなくあの男だ」

「でも、あなたも私たちを助けようとしてくれたわ。方法はちょっと無謀だったけど、受けた恩義は返すのが筋。そうよね、姉様」

「ええ。ぜひ当家へお越しくださいな」

「ほら、姉様もこう言ってるのよ」

頷かなければ、絶対に手を離さないという気迫が伝わってきそうだ。まあ、これもなにかの縁か、と春蘭は自分に言い聞かせた。

「礼は食べ物がよいな」

銭や物を貰っても、啓璋と友寧に疑いの眼差しを向けられそうだ。ならば、腹に消えてしまうものがいい。

「わかったわ」

「うむ。では、馳走になるぞ」

「あなた、喋り方が本当に変ね」と、玉翠が朗らかに笑った時、御者を俥に乗せ終えた子慮が「準備ができたぜ、じゃなくて、できました……って、なんでこんなに人がいるんだ？」と、首を捻った。



腹はさほど減ってはいないと言った春蘭の前に、糖蜜を惜しげもなく使用して作られた干菓子が出された。陶器の皿に山と盛られ、一度には食べ切れないほどである。

口当たりのよい甘露茶も供され、なんとも贅沢な礼だと思いながら、春蘭は干菓子を口にした。

「美味いな」

口内に広がる甘味に、春蘭は思わず顔を綻ばせた。生きるために食べ物を口にしなければならないのは面倒だが、これほど美味いものならば話は別だ。つい皿に手が伸び、たくさん用意された干菓子はあっという間に半分に減ってしまった。

ほどほどのところで手を止め、甘露茶でのどを潤しながら、春蘭は窓の外に広がる中庭へと目を移した。

眼前に広がる庭園は、見事の一言に尽きた。

視界に収まりきらぬ規模の池には橋が架けられ、見晴らしのよい場所には東屋がある。庭園側に面した回廊、客間、どの場所からも美しい景観が楽しめるようにと配慮されていた。庭石の大きさや形、植木の品種にも細かい拘りが窺える。

しかし、なによりも素晴らしいのは、それらすべてのものが互いの存在を必要以上に主張せず、絶妙な調和をもたらしているところだ。けっして質素すぎず、また華美でもない。

落ち着いた雰囲気は、造り手の技量の高さだけでなく、主の人格のよさを髣髴とさせるものだった。

「鄭家がこんな屋敷でなくてよかったな……」

おそらく、主を捜すどころではなかっただろう。

案内がなければ迷子になる。中庭でこの規模なのだ。屋敷自体、相当な広さだろう。

そのような中庭を持つ屋敷であるから、当然のように房内の装飾や調度品も、すべて高価なもので満たされていた。

鏡のように磨き込まれた卓や、壁に吊るされた水墨画の掛け軸。中庭を望むことのできる朱塗りの窓辺には、蓮の花を象った見事な彫刻が施されていた。春蘭が手にしている茶器すら、それなりに値の張るものなのだろう。

干菓子をもう一つ手に取り、小さく齧りついた。この菓子一つで、何日分の食糧に代えられるだろうか。菓子は甘くて美味い。しかし、春蘭には椀に盛られた芋粥の方が必要だ。

「――ところで、ぬしはいつまで固まっているつもりだ？」

「ふおっ！」

急に話しかけられた子慮は、盛大に肩を揺らした。

姉妹の屋敷に連れて来られたのは春蘭だけではない。男たちから姉妹を救ったということで、家人たちに感謝された子慮も、有無を言わせずに俥に乗せられてしまったのだ。

ちなみに気絶させられた男たちは、怒りに震える家人たちの手で縛り上げられ、そのまま役所へと運ばれたようだ。

「ばっ、いきなり話しかけてくるんじゃねぇ！」

「いつまで惚けているのかと思ってな」

わなわなと震え出した子慮は、血走った眼差しを春蘭に向けた。

「餓鬼にはわかんねぇだろうが、ここは花中書令のお屋敷なんだよ！　緊張しねぇ方がおかしいんだ。それに、も、ももももしも、花中書令ご本人が在宅で、ま、まままま万が一、挨拶に来られたら、お前、どうすんだよ！」

「私は餓鬼ではない」

春蘭の言葉に、子慮はがくりと肩を落とした。

「お前はいいよな、ちんちくりんで。緊張する必要ないもんな」
「誰がちんちくりんだ」
「どっからどう見ても、ちんちくりんだろうが」
「人を見た目で判断するのは、いかがなものかと思うが」
「ちんちくりんは、ちんちくりんだぞ」
ぺしぺし、と子慮は春蘭の頭を掌で叩いた。煩わしいその手を、春蘭は片手で払い落とす。
「ちんちくりんではない。私には李春蘭という名がある」
「じゃあ、ちびっ子は、どこのちびっ子だ？」
「私はぬしより年長者だぞ」
「迷子か？」
「ぬしと一緒にするでない」
再び頭に乗せられた手を払い落とした春蘭は、なおもこちらに構ってこようとする子慮に、自分が子供ではないのだと納得させるのを諦めた。
神同士では、神格は言葉にしなくても感じ取れるため、外見で侮られることはない。それだけに――人間の間では当然なのだが――春蘭は、見た目で年齢を判断されることに慣れていなかった。
「ところで、〝龍乎〟とはなんなのだ？」
「てめぇ、華安で暮らしていながら、そんなことも知らねぇのか！」
「知らぬから訊いておるのだろう」
不機嫌そうな眼差しを向けられるが、春蘭は気にせずに言い返した。数百年の時を経た今、春蘭の周囲は知らないことばかりだ。
「そもそも私は、昨日華安に来たばかりなのだ」
「ちっ、じゃあしかたねぇな。ちびっ子だしな」
「最後は余計だ」
名を告げたにもかかわらず、子慮は春蘭のことを〝ちびっ子〟と呼び続けている。その呼び名が気に入ったのだろうか。
「龍乎っていうのはな、華安の街を守る兵士のこと

だ」
「ふうん」
「もう少し驚けよ。んで、隊長の俺様を敬え！　兄貴って呼んでいいぞ」
「私はぬしの妹ではないからの。それと、敬うに値する人物だとは到底思えぬが」
「なんだちびっ子。難しい言葉知ってんだな」
ぐりぐりと頭を撫でられ、春蘭の小さな体が前後に大きく揺れた。
「これ、止めぬか。頭が取れる」
「取れるか、馬鹿」
「馬鹿はぬしの頭の中身だと思うが……して、中書令というのはなんなのだ？」
「あー……偉い官吏？」
中書令という言葉は知っているが、その役職を詳しくは知らないようだ。これできちんと華安の治安を守るというお役目を果たせているのか、と春蘭は思わず疑ってしまった。
「まあ、屋敷の規模を見れば、大体の想像はつく」
「そ、そうだよな！」
あははは、と笑い声をあげる子慮を余所に、春蘭は甘露茶を口に含んだ。見事な中庭をじっくりと堪能していると、回廊の方から軽快な足音が聞こえてきた。
ちらりと子慮に視線を向ければ、すでに額に大量の汗を滲ませ、石像のように体を強張らせていた。
「お待たせしてしまって、ごめんなさい」
色鮮やかな襦裙に着替えた玉翠は、にっこりと微笑み上品な仕草で椅子に腰を下ろした。
俥の中で、歳は十四になると聞いたが、こうしてすまし顔を見ているともう一、二歳は上に思える。それでも、ころころ変わる喜怒哀楽のはっきりとした性格と、たまに垣間見せる幼さが十四という年齢を物語っていた。
「姉君は大丈夫だったのか？」
「ええ。俥に酔ったみたい。着替えたら、ここへ来

ると言っていたわ」
「むりはせずともよいのだが」
「姉様も、春蘭と子慮様にお礼が言いたいそうよ」
なんとも義理堅い姉妹だ。
妹は多少、強引なところはあるが、恩人とはいえどこの子供とも知れぬ春蘭を対等に扱ってくれる辺りに好感が持てた。
「干菓子はどう？　お口にあったかしら」
「うむ。美味いぞ」
「よかった」
にこにこと微笑む玉翠の隣では、先ほどよりも一層顔を脂汗塗れにした子慮が、同意するように首を上下に動かしていた。春蘭の記憶では、子慮は干菓子を一口も食べていないのだが、どうして美味だとわかったのだろうか。
「ところで、なぜ護衛もつけずに外出していたのだ？　ぬしらは身分のある者の娘なのだろう？　不用心すぎるぞ」
「さっきから、ずっとみんなに同じことを言われて耳が痛いわ。別に遠出するわけではないから、平気だと思ったのよ……」
散々、使用人たちから注意されたのだろう。軽率だったとは感じているようだが、玉翠は不服そうに眉を寄せた。
「そ、それに……姉様の具合が悪くなってしまって。俥を停めて休んでいたら、あの人たちがいきなり！」
「もしもこの男が通り掛からねば、今頃どうなっていたか考えよ。なによりも、ぬしらを守ろうとして怪我を負った御者に申しわけないと思わぬのか。人には立場がある。ぬしらが迂闊な行動を取れば、周りの者にも影響が及ぶと身に沁みたであろう」
春蘭のきつめの声に、玉翠はぐっと言葉に詰まった。しかし、ここで黙っていられない男が一人。
「ちびっ子！　お前、お嬢様になんてこと！」
「子供の間違いを正すのは、大人の役目だ」

使用人たちは、花家に仕える立場だ。主である玉翠に、無謀なことはしないでほしいと哀願できても、強く叱ることはできないだろう。

玉翠の態度から、反省の色が窺えないことがその証拠である。ならば、なんの柵もなく〝大人〟である自分が叱ってやらねばなるまい。

「え、あなた、どこから見ても子供……」

「むう。人を外見で判断してはならぬぞ。今回は、幸い大事には至らなかったが、ぬしは自分たちの立場を自覚せよ」

腑に落ちない、といった表情を浮かべた玉翠だったが、春蘭の言葉にはなにか思うところがあったのだろう。渋々とだが、言い訳を口にした。

「だって、出掛けたいと言っても行かせてくれないもの。なら、こっそり行くしかないでしょう？」

「その結果が今回の事態であるぞ」

「……だから、反省してるわ」

「外に出してもらえぬ理由でもあるのか？」

確かに、上級官吏の身内や裕福な商人の家族――それも、婚礼前の若い娘――ならば、外出が制限されるのも珍しくはない。しかし、まったく外に出してもらえないとなると、なにか別の理由がありそうだ。

「それは……ほら、この間、例の事件で曹家のご令嬢がお亡くなりになったでしょう？　だから、みんなぴりぴりしてるの」

「例の事件？」

春蘭が首を傾げると、玉翠は大げさに目を剝いて見せた。その隣では、子慮がなぜか納得するように頷いている。春蘭だけがわからずに首を傾げる。

「まさか、知らないの？」

「私は故あって、昨日華安に着いたばかりなのだ。そのため、少々世俗には疎い」

春蘭がなにも知らないと聞くと、玉翠の目が輝いた。少女はお喋り好きなものだ。なにも知らない者に、知っていることを教えられるのは嬉しいのだろ

う。上機嫌な玉翠によって事件が語られる。
「今、〝攫猿〟という妖が都を騒がせているの」
「ほう、妖とな」
妖は、〝山堺〟と呼ばれる人里離れた霊域に住みつく異形の存在だ。
その種類は多く、広く知られていないものがほとんどである。なにしろ、人前に出ることがない限り、その存在を知られることはない。逆に、名が知られている妖は、人に害を及ぼすものが大半だ。
春蘭自身、守り神として長い年月を過ごしていることもあり、妖にかんする知識は人よりも多い。それでも、すべてを網羅しているわけではなかった。
春蘭も神であった時、幾度か攫猿に遭遇したことがある。
攫猿は雄が一匹で縄張りを作り、繁殖のために人里から婦女を攫う。攫われた女は攫猿の妻とされ、子を身籠もれば人里に返されるが、子を身籠もらなければそのまま山堺に留めおかれた。
己の子を人の手により養育させるのである。その子が死ねば攫猿の怒りに触れるため、人々は恐れながらも産まれた赤子を育てざるを得ない。
攫猿の子は人とほとんど区別がつかず、攫猿が出る邑里では、成人した子には特別な姓を名乗らせ区別しているという。間違っても、その子を殺してしまわぬように――。
妖は固有の気配を持つため、春蘭が守護する邑に近付いた場合は、有無を言わせず追い払ってきた。故に被害があるのは、守り神のいない邑と決まっていた。
「都に妖とは、珍しいこともあるものだ」
「攫猿は、形は猿に似てて、身の丈は男性の倍はあるそうよ。人と同じ二本脚で走って、それも風のように速いんですって」
「ふむ」
「しかも、子を産ませるために婦女を攫うんですって。子ができれば邑に帰されるそうだけれど……子

ができない女性は、山塀の気に耐えられずに、数年でその姿を攫猿に変え、人であったことを忘れてしまうそうよ。怖いわよね」

「……ふむ？」

春蘭は初めて聞く話に首を傾げた。確かに、山塀に長くいれば人を狂わせる。その大半が、正気を失い、餓死か、他の妖の餌になるか、だ。

だが、人が攫猿に変わったという話は耳にしたことがない。もしかすれば、それは人々の間で囁かれているうちに、正しい情報として定着してしまった飛語の類だろうか。

そもそも、繁殖の時期以外に、攫猿が人里に下りてくること自体がおかしいのだ。それも守り神のいない邑ならばいざ知らず、わざわざ王都までやってくるとは考え難い。

だが、人にはそのような理がわからないだろう。玉翠は得体の知れない妖が王都に出没し、恐ろしいとばかりに語るのであった。

「ことの始まりは十日前。張高厳様のお屋敷に、攫猿が現れ十六になるご息女が殺害されたの。そして、その三日後には、黄如恵様の十一になるご息女が。さらに、二日前には曹文親様の姪にあたる方が、攫猿に殺されてしまったのよ」

「……それは、本当に攫猿の仕業なのか？」

攫猿が人に危害を加えるのは稀である。婦女を攫うが、それはあくまでも繁殖のためだ。よほど抵抗されない限り、相手を殺すことはない。もっとも、武器をもって攫猿と対峙した兵士たちは、その限りではないが。

「ええ。何人もの目撃者がいるわ」

「そうか」

「被害に遭われたのが、狙いすましたように位の高い官吏様のお屋敷だったの。だから、家人たちがみんなぴりぴりしているのよ」

「ということは、玉翠の父親もそうなのか？」

「両親は私が小さい頃に亡くなったわ。それ以来、

父の兄である興奏伯父様の許に身を寄せているの。伯父様は中書省長官なのよ」

「それはどういった職なのだ？」

「うっ……偉い官吏ってことよ」

子慮と変わらぬ返答に、春蘭はやれやれと溜息をついた。見れば子慮も微妙な顔付きをしている。

「そのような事情があるならば、余計に外出を控えなければならぬのではないか？」

「大丈夫よ。攫猿は夜間しか行動しないもの」

「そういう問題ではない」

胸を張って見せる玉翠に、春蘭は思わず溜息をついた。一度危ない目に遭っているにもかかわらず、玉翠は懲りるということを知らないようだ。良家の子女とは、もう少しお淑やかで分別を身につけているものではないのだろうか。

「でも、攫猿が捕らえられるのは時間の問題よ。皇帝陛下の勅命で、禁軍が動かされるそうなの。きっとすぐ退治されるわ」

「禁軍、か」

啓璋の説明では、仲望が以前所属していたところだ。皇帝直属の機関で、華国全土から優秀な兵が集められていると聞く。もっとも、それ以上、詳しいことはなにも知らないのだが。

「春蘭は禁軍も知らないの？　あなたどんな田舎からここに来たの？」

呆れたような表情を浮かべた玉翠だったが、教えること自体が嬉しいのか、再び得意そうに説明を始めた。

「禁軍は皇帝陛下の直属の軍で、選りすぐりの兵たちが集められているのよ。でも、禁軍は皇帝陛下の勅旨がない限り動くことはないの」

「ほう」

王都にとって今回の事態はよほどのことらしい、と思って玉翠の隣に視線をやる。そこには、なにやら面白くないといった様子で腕組みをする子慮の姿があった。

街の治安を守るという龍乎。皇帝直属の禁軍とは、また別の存在なのだろう。龍乎では手に負えぬため禁軍を動かす、と皇帝から宣言されたようなものだ。だからこそ、子慮は面白くないといった顔付きをしているのだろう。

春蘭が守護していた邑でも、よく見られた光景だ。邑長の側近が変わる度に、お払い箱となった者は似たような表情を浮かべていた。

しかし、玉翠はそんな子慮の様子には気付かず話を続ける。

「ええと……皇帝陛下のご威光を守るため、だったかしら？　伯父様が色々話してくださったのだけど、難しすぎて……」

玉翠がしどろもどろに説明すると、助け船は意外なところからもたらされた。

「――妖の出没は、世の乱れ。つまり皇帝陛下の威光が衰えてきた証拠だ、と流言が飛び交い始めたからよ」

「姉様！」

房の入口に顔を向ければ、玉翠の姉、花翠蓮の姿があった。

色の控え目な襦裙に着替えた翠蓮は、玉翠と一つしか歳が違わないにもかかわらず、落ち着いた雰囲気を漂わせていた。

翠蓮の登場に、また子慮が体を固くする。そんなに緊張ばかりして疲れないのだろうか、と春蘭は子慮を横目にしつつ翠蓮に問い掛けた。

「体の方は、もうよいのか？」

「ええ」

翠蓮は流れるような足取りで房内に入ると、春蘭と子慮に向かって深々と頭を下げた。

「先ほどは私たち姉妹を助けていただき、本当にありがとうございました。春蘭と子慮様がいらっしゃらなければ、どうなっていたことか。いくら感謝してもし切れません」

「よい。因果というものは、よいことも悪いことも

回り回ってくるもの。そなたらの日々の善行が、今回のことに繋がったのであろう」

春蘭の大人びた物言いに、翠蓮は目を瞠った。そして、わずかに戸惑ったように微笑む。どう対応してよいか悩んでいる様子だ。

一方、子慮は顔をより真っ赤にし、口をぱくぱくと金魚のように開閉していた。こちらも、なにを言ってよいのかわからぬようだった。

「……お褒めいただき、光栄ですわ」

「そうか」

「あの、春蘭はどうしてそのような口調なのでしょうか？」

控え目な口調で問い掛ける翠蓮に、春蘭はきょとんとした顔を向けた。

「私は昔からこういう口調だ」

「癖なのですか？」

「ふむ。癖と言われれば、そうなのだろうな」

「ごめんなさい。少し驚いてしまって」

「よい。気にするな」

やはり、翠蓮は春蘭の口調が気になるようではあったが、花が綻ぶような微笑みで内面の葛藤を押し隠した。

和やかな雰囲気が漂う中、ただ一人玉翠だけが面白くないといった表情を二人に向けている。それに気付いた春蘭は、玉翠がなにか言う前に口を開いた。

「翠蓮には反省の色が見える。きちんと反省している者に、厳しい言葉は必要なかろう？」

「もう！　春蘭の馬鹿！」

「玉翠。恩人にその言い方はなんですか」

「うっ」

母親代わりのような翠蓮に、玉翠はびくっと体を震わせたあと、頬を朱に染めながら小声で「だって……」と呟いた。どうやら、姉には頭が上がらないらしい。

「ところで先ほどの話だが、華安ではそんな噂が囁かれておるのか？」

「ええ。みな口々に噂しておりますわ」
「ふうむ」
友寧の説明では、暴虐の限りをつくす皇帝が下々の噂話に反応するとは思えない。むしろ、部下の誰かに退治しておけと命じ、あとは攫猿のことなど忘れてしまいそうなものだが。
「しかし、禁軍とやらは、選りすぐられた者たちの集団なのだろう？　たかが妖一匹に動くようなものなのか？」
守り神であった春蘭は、攫猿等の妖の気配を感じれば、自らの力を使いその都度追い払ってきた。妖は、自分よりも強い相手に敏感だ。敵わないと悟れば、よほどのことがない限り春蘭に刃向かうことはなかった。
攫猿の実力を知っているわけではないが、いまいち疑問が残るところである。
「犠牲になった方々が、身分のある方の血縁でしたから。きっと、陛下も不憫に思われたのですわ」
「そう考えることもできるか」
身内を殺害された高官が、皇帝に直訴した可能性もある。だが、友寧から聞いた限りでは、家臣からの訴えに耳を貸すような人物には到底思えなかった。
「とりあえず、今の華安が物騒なことだけはよくわかった。玉翠は、二度と供もつけずに外出しようとは思わぬことだ。攫猿の騒動が一段落すれば、自由に外出できるようにもなろう」
「そ、そうですよ！　禁軍の奴らなんかじゃなくて、俺がすぐに攫猿を退治して見せます！」
今だ、とばかりに子慮が声を張り上げる。彼の主張では、夜間の巡回の際、攫猿と鉢合わせすることはなかったそうだ。
連絡を受けて駆けつけても、攫猿は逃げたあとだったのだ、と悔しげに語った。
「次こそは、絶対に退治して見せます！」
「頼もしいですわ」
鈴が鳴るように可憐な声で翠蓮が言った。世辞と

も聞こえる言葉だが、翠蓮は本気でそう思っているようだった。

そんな二人を眺めながら、春蘭は別のことを考えていた。これほどの規模の都だ、守り神が祀られていないはずがない。華安の守り神は、なぜ攫猿を野放しにしているのだろうか。

ある程度の武力を保持する者たちがいるため、余計な手は出さずに静観しているのか、それとも――。

「さて、私はそろそろ帰るとしよう。世話になったな」

「もう？　帰りは俥で送らせるから、ゆっくりしていけばよいのに」

玉翠の言葉に、春蘭は首を横に振った。

「元々、華安の都を見物しようと思って外に出たのだ。気遣いは無用だ」

「あ、なら今度は私が街を案内してあげるわ！」

「玉翠……先ほど、外出は控えるようにと言ったばかりだぞ？」

やはり懲りていなかったのか、と春蘭は嘆息した。見れば、翠蓮も苦笑している。どこまでも懲りない少女だ。

「で、でも、次はちゃんと護衛をつけるし……」

「私は、そんな仰々しい供を連れて歩きたくはないな」

うっ、と言葉に詰まった玉翠は、諦め切れないのか春蘭に恨みがましい視線を向けてきた。

「じゃあ、また会ってくれる？」

「玉翠」

咎めるような翠蓮の声に、玉翠は不満げに眉を顰めた。

「だ、だって、姉様。せっかく知り合えたのよ？　約束を取りつけないと、もう会えないかもしれないわ」

厳しい説教をしたにもかかわらず、玉翠は春蘭を気に入ったようだ。外出できないというならば、友を家に招くことくらい許されるだろう、と姉に主張

する。

だが、妹の哀願に翠蓮は困ったように微笑むだけだった。春蘭の服装から、平民の子だと推測したのだろう。

裕福な家の子でない限り、春蘭くらいの年回りでも日中は家の手伝いをしなければならない。むろん、身分のある者の血縁である玉翠が望めば、大抵のことは叶えられる。

しかし、それでは平民相手に権力を以って我を通したということになる。翠蓮が危惧するのは、その辺りだろうか。

「春蘭の迷惑よ」

「そんなことないわ。そうよね、春蘭？」

「む……」

玉翠に悪気がないだけに、春蘭は苦笑するしかない。そもそも、春蘭には玄楽を捕らえて真名を取り戻すという使命がある。そのためにも鄭家に居候するべく、食い扶持を稼がねばならない。玉翠の相手などしていられないというのが本音だ。

しかし、それを口にすればこの少女のことだ、自分が食費を払うと言い出し兼ねない。それこそ、屋敷まで押し掛けられたあかつきには、面倒事を持って帰ってくるなと啓璋の怒りが爆発するだろう。気の強い者同士、啓璋と玉翠の相性は悪そうだ。

「そうだな……では、手が空いた時に顔を出すようにしよう」

「本当に？」

「ああ。だから、無闇に外へ出るではないぞ」

嬉々として頷いた玉翠に対し、翠蓮は申しわけなさそうな視線を春蘭に向けた。それは、断ってもよいのよ、と物語っているようだ。

「気にするな。これもなにかの縁だ」

自分はいずれ真名を取り戻し、故郷へ帰らねばならない。それまでの間、会えるとしても数えるほどだろうが、玉翠が満足するならばよい、と春蘭は頷いた。

「ところで、この残った菓子を貰ってもよいか？」
「気に入ったの？」
「うむ」
甘い干菓子は、啓璋たちも喜ぶだろう。もっとも、入手方法を話せば嫌な顔をされることは目に見えていた。だが、〝土産〟としてならば受け取ってくれるだろう。
「あ、では私も仕事がありますので、そろそろこれで」
「子慮様には、別にお礼の品を……」
「いいえ！　俺、じゃなくて私は自分の仕事をしただけですから」
春蘭に続き席を立った子慮は、翠蓮の申し出を慌てて断った。そして、あまりにも慌てすぎたせいで卓の端に足をぶつけ、姉妹には気付かれないように苦悶する。
涙目になりながらも引き攣った笑みを浮かべている子慮に、落ち着きのない奴だのう、と春蘭は嘆息した。
「では、またな」
布に包まれた干菓子を手に、春蘭は子慮と共に花家を後にした。
本日の収穫は、干菓子と二人の友人。
さて、この縁には意味があるのか、それとも単なる偶然のまま終わるのか。こればかりは、優秀な占師でもわからないだろう。
「ところで、ぬしは帰り道がわかっておるのか？」
「――ああっ！」
春蘭の隣を当然のように歩く子慮だったが、そう指摘され、思わずといった風に声をあげた。
「花家の者に道を訊ねればよかったものを」
「馬鹿野郎！　んなかっこ悪いことできるか！」
「では、当初の予定通り、道行く者に役所の場所を訊ねて回るのだな。花家と違い、役所ならば知らぬ者はいないだろう」
「そ、そうか。ちなみに、ちびっ子は役所までの道

を知らねぇか？」
「……華安には、昨日来たばかりだと言っておろう」
「あ、そうだったな」
じゃあ、適当に捕まえるか、と子慮が辺りをきょろきょろと見回した時だった。四つ辻を猛烈な勢いで曲がり、こちらに向かって土煙を上げながら突進してくる小柄な青年がいた。
「みーつーけーまーしーたーよー！」
「あ、文重」
「〝あ、文重〟じゃありません！」
子慮の前で停止した青年は、ぜえぜえと肩で荒い息をついた。
文重と呼ばれた青年は、子慮と同じ龍乎のお仕着せをまとっている。年齢は子慮のすぐ下くらいだろうか。
どれほど走り回ったのか、髪が乱れに乱れ、汗で額や頬に張りつく様はなかなか鬼気迫るものがあった。
「いったい、どこに行っていたんですか！」
「お前こそ、どこ行ってたんだよ。勝手に離れやがって。大変だったんだぞ」
「なに言ってるんですか！　美味そうな匂いがするとかなんとか言って、急に走り出したのはどなたです。第一、いつまで経っても巡回経路を覚えないくせに、勝手に突っ走らないでください！」
「ついてこないお前が悪い」
「隊長の足についていけるわけないでしょう！」
猛然と抗議する青年は、どうやら子慮が言っていた〝道を覚えてる奴〟なのだろう。気の毒なことだ、と春蘭は同情するような眼差しを部下である青年に向けた。
「隊長は目を離すと、いつも面倒事に首を突っ込むんですから。少しは自重してください」
「だが、そのお陰で人助けできたぞ」
「なんですか。重い荷物を抱えた老人でも見つけて、

家に送り届けたんですか？」
「人攫いから、花中書令の姪御様を助けた」
どうだ凄いだろう、と言わんばかりの態度で子慮は胸を張って見せた。しかし、得意げな上司を見る部下の目は冷ややかだ。
「嘘をつくならば、もっと信憑性のあるものにしてください」
「ばっ、ちげぇよ！　本当だって！」
「百歩譲って人攫いの部分は認めましょう。ですが、花中書令の姪御様が、ふらふら出歩いてるわけないでしょうが」
いや、それが出歩いていたのだ、と春蘭は内心で呟く。だが、その現場に居合わせなかった青年は、信じられないようだった。
「おい、ちびっ子！　お前ならわかるよな？」
急に話を振られ、春蘭はやれやれと肩を竦めた。
青年はここでようやく春蘭の存在に気付いたようで、驚いたような表情を浮かべている。
「子慮の話は本当だぞ」
「……ええと、迷子かな？」
「迷子は子慮だけだ。私は違う」
「そうだよね。ごめんね」
にっこりと笑みを浮かべる顔は、子慮に向けられたものとは違い、慈愛に溢れるものだった。
「で、お家はどこかな？　お兄さんが送って行ってあげるよ」
「……だから、迷子ではないと言っている。ぬしらは本当に人の話を聞かぬな」
「うん、この人と一緒にしないでね？」
「俺様だって、てめぇと一緒にされてたまるか！」
「隊長は迷子のくせに偉そうなんですよ。もう少しおらしく……いえ、これは気持ち悪いのでそのままでいいです」
「んだと、ごら！」
今度は睨み合いを始めた二人に、春蘭は深い深い溜息をついたのだった。

言葉を尽くし、ようやく自分が迷子ではないと理解してもらった春蘭は、なぜか子慮の二の腕に座るような格好で運ばれている最中だった。

杜文重と名乗った青年が、脇道は物騒だから大路まで送ると言って聞かなかったからだ。いざとなれば自分には白桃がいるのだが、文重の目には春蘭はか弱い子供にしか映らないのだろう。十歳くらいにしか見えない今の体はつくづく不便だった。その上、途中から歩き疲れたのではないかと心配し、子慮に抱き上げるようせきたてたのだ。

文重は、虎慈軍隊長である子慮の副官なのだそうだが、彼の辞書には遠慮という言葉はないようだった。

「背が高いというのは、よいことだな」

子慮の肩に掴まりながら、春蘭はきょろきょろと辺りを見回す。今、歩いている道は大路ではないが、それなりに人通りのある脇道であった。

小さな店が軒を連ね、中には道にはみ出すようにして品物を広げている者もいる。少しならば問題はないが、決められた以上にはみ出している場合は規則違反に当たるらしい。そのため、先ほどから文重が周囲に目を光らせている。

一方、子慮はそういったことに興味はないようで、「攫猿でねぇかな、攫猿」と、物騒な台詞を呟いていた。どうやら、先ほどの言葉は本心からのものだったようだ。

しかし、口を閉じていると強面に見える子慮だったが、市民からは意外と人気があるようで、引っ切り無しに声をかけられていた。中には頬を赤く染めた若い娘の姿もあったほどだ。

「ちびっ子は、ぷちっと踏まれそうだもんな。いい音がしそうだ」

「私はぷちっと踏まれるほど小さくはない」

「ちびっ子は豆粒みたいだからなー」



「ぬしは目が悪いのか？　その目はただの飾りか？」

子慮の言葉にいちいち反論していると、前方を歩いていた文重が振り返った。その瞳は、先ほど同様冷ややかだ。

「いい歳して、子供をいじめて遊ばないでください。かわいそうでしょう」

「ちびっ子にちびっ子と言ってなにが悪い」

「子供なんだから、小さくて当たり前でしょう！」

「じゃあ、いいじゃねぇか」

「だめです！　この子は女の子なんですよ？　密かに傷付いているかもしれないじゃないですか！」

必死に言い募る文重だったが、子慮は聞く耳を持たないといった風に知らん振りだ。実際、爪の先ほども傷付いていない春蘭は、面倒なので反論する気はない。子慮の肩に顎を乗せ、〝抱っこ〟というものは楽だな、と思っていた。

白桃の背のように大揺れはしないので、気合いを入れてしがみつかなくても大丈夫だし、なによりも適度な揺れが心地よい。

自分の足で歩いていると、ぷちっと踏まれるようなことはないが、龍神大路の人混みの中で蹴られそうになったことは何度もある。人は足許など見ずに歩くのだろう。

子慮の腕に揺られる今はそんな心配もなく、また、片腕だけではあるがしっかりと支えられているため落下の恐れもない。唯一、小うるさいのが難点ではあるが、それは相手が相手なので、しかたないと目を瞑る。

勝手に流れていく街の風景を眺めながら、春蘭はうつらうつらと船を漕ぎ始めた。眠っている場合ではないのだが、干菓子で膨れた腹と暖かな日差しのせいで徐々に瞼が重くなる。

「むぅ……」

睡魔に抗うように声を出すが、まるで無駄な抵抗とばかりに春蘭を眠りへと誘う。子慮と文重の言い

合いですら、春蘭の意識を繋ぐことはできない。意思に反して瞼が完全に落ちようとした時、突如として響いた声に春蘭は目を開けた。

「姫隊長ーーーっ！　問題発生です！　早く来てください！」

人波の奥から必死に手を振る兵士に、子慮の顔を見れば、名を呼ばれた本人は無邪気な子供のように目を輝かせていた。

「攫猿か！」

「ぬしの頭にはそれしかないのか」

呆れた声を出した春蘭であったが、すぐに地面に下ろされる。眠気と同時に、便利な移動手段がなくなってしまった。

「こんな真昼間に、攫猿が出没するわけないでしょうが！」

嬉々として走って行く子慮を追い掛けるように、文重も走り出そうとして、思い出したように春蘭を振り返った。

「送ってあげられなくてごめんね。一人でも大丈夫かい？」

「うむ。そもそも私は一人でも平気だ」

「ならいいけど……でも、気をつけて帰るんだよ」

そう告げると、文重も子慮を追って走り出した。途中、気掛かりそうな視線を春蘭に向けたが、やがてその姿も人波に隠れ見えなくなってしまった。

「やれやれ。騒がしい奴らだったな」

干菓子の入った包みを抱え、春蘭は鄭家に戻るべく歩き出そうとした——が、周囲に見覚えがないことに気付く。

春蘭が子慮と出会った場所まで連れて行ってもらう途中だったが、そこに至るまでの道順は聞いていなかった。これはもしかして迷子というやつか、と春蘭は嘆息したのだった。

「まあ、占えばよい話なのだが……」

子慮と同じである、という一点だけはどうしても認めたくない春蘭だった。



「おや、珍しい顔だ。今日は雨でも降るのではないですかな?」と、聞こえよがしに嫌みをぶつけてくる同輩たちに辟易しながら、仲望は紫宝宮へ向かうべく、迷路のように入り組んだ回廊を歩いていた。

この時季の華安では、雨が降ることなど滅多にはない。あまりにもわかりやすい嫌味だったが、自分が参内しただけで雨が降るなら、さぞ啓璋と友寧に喜ばれよう。畑に水をまく手間が省ける。

「あー、そりゃいいですね」と気のない言葉を返し、相手が反応する前にさっさと歩き去るといったことを繰り返す。いっそ聞こえない振りでもしようかと思いはじめた頃、ようやく人気のない場所に辿り着いた。

そこは殺風景な中庭だった。中央に植えられた桃の木以外に、なにもない。位置的には、皇帝が執政を務める紫宝宮の左隣、滅多なことでは官吏たちも足を踏み入れることのない大冥宮の最奥に当たる。

この中庭に面した房の管理権は中書省にあり、政務にはあまり必要ないが、将来のために破棄せずに置こう、と判断された書物ばかりが大量に集められている。

いつか使うかもしれない、ということで書物の欠損や虫食いを補修するのが仲望の主な職務だ。いわゆる閑職である。各省には、厄介者だが退官させられない者のために、このような職務が用意されているのだった。

他の官吏たちからは、ただ飯食らいと揶揄されている。だが、仲望にとっては、勝手に休んだところで文句も言われない、仕事の出来不出来も問われな

い、ある意味理想の職場である。

「今日はいないか……？」

感じ慣れた気配を捜す。目当ての人物は仲望よりも遥かに多忙なため、顔を合わせる機会は少ないのだが、昔から休憩の合間によくこの場を利用していたはずだった。

怪我のせいで反応の鈍い左足を庇いつつ、のんびりしていると、突然、鋭い殺気を感じた。だが、あえてなんの反応もせずにいると、回廊の床に一本の匕首が突き刺さった。

「――避ける素振りくらい見せろ」

害する目的ではなく投擲されたそれに、仲望はただ肩を竦めて見せた。

「面倒だ」

「久し振りに顔を合わせたと思えば、またそれか」

不機嫌そうな表情を顔に貼りつけて回廊に姿を現したのは、仲望より二、三歳ほど年上の、端整な容貌の人物だった。

文官として出仕するため袍を重ね着した仲望とは違い、袖のない鎧甲を着用した、明らかに武官といった出で立ちの男は、名を韓楊秀という。仲望の同輩であり、四年前の戦の功労から、禁軍、右飛龍将軍として一軍を預かる人物だ。

双方の父親が親友同士であったことから、仲望の兄である玄楽と共に、幼い頃から悪友として友情を培ってきた。

「それで、珍しく参内した理由は？　まさか、生真面目に書物の修復に来たわけでもないのだろう？　さすがに雨が降るぞ」

「……それは、もういいよ。今日は中書令に呼び出された。来なければ、屋敷に押し掛けてくるそうだ」

滅多なことでは参内しない仲望だったが、さすがに上司からの呼び出しに応じないわけにはいかない。罰せられるならばまだしも、屋敷に押し掛けて来られるのは困る。

「そういえば、今朝方啓璋から報せを貰ったぞ。お前、悪女に騙されているそうだな」

「……は？」

「異性に対し、興味を見せぬお前には珍しい――いや、天変地異にも等しいことだが、悪女はいかん。啓璋と友寧が悲しむぞ」

その悪女とやらにまったく心当たりはないのだが、昨日、屋敷に押し掛けてきた少女にならば心当たりはある。

しかし、春蘭をどれほど眺めても、楊秀の思うような悪女には見えないだろう。

「近々、暇を取って様子を見に行くつもりだが、私は相手がか弱き女人であろうと容赦はせんぞ。鄭家に害を成すようであれば、力ずくでも追い出すつもりだ」

自称神である春蘭を追い出すなど、罰を当てられるのは楊秀の方ではないだろうか。実は神でなかったとしても彼女を追い出すのは殊の外、大変そうな気がする。楊秀が家に来たら散歩に出ることにしよう。騒ぎに巻き込まれないように、と仲望は結論付けた。

「第一、だ。啓璋と友寧がいるにもかかわらず、そんな得体の知れない女を連れ込むなど、二人の教育にも悪い。そもそも、お前がそのようにのほほんとしているから、悪い女に付け込まれるのだ。もっと毅然としろ。毎朝、剣の素振りをすれば煩悩を払えるぞ。そうだな、最低でも千回は行うといい。なかなか爽快だぞ」

会話をしているだけで疲れるが、昔からこうなのだからどうしようもない。

放っておけば、筋肉がないだの、ちゃんと食べているのかだのとうるさいため、仲望は相手の意識を逸らすことにした。

「そういえば、妖退治に禁軍を動かすとか」

仲望は、回廊ですれ違う官吏たちが、口々に噂し合っていたことを思い出した。攫猿の話題自体は啓

璋たちから聞いていたため、首を傾げるようなことにはならなかった。

禁軍は、左右飛龍軍、左右虎伏軍、左右北星軍から成り立つ。一つの軍が三万の兵からなるため、総力十八万の大軍である。動かすといっても全軍を出すわけではないだろうが、一軍でもかなりの規模である。

華安の警備を担っているのは龍乎と呼ばれる衛士たちだが、未だ攫猿を退治するに至っていない。

「愚かな話だ。禁軍から気術兵を一人二人龍乎に貸し出せば、それで充分だというのに」

「陛下は噂を気にされたのか？」

「皇帝陛下の威光が衰えているというあれか？　そんな理由ならばまだいい。陛下が禁軍を動かしたのは、黎貴妃に懇願されたからだ」

忌々しいというように、楊秀は吐き捨てた。黎貴妃とは、皇帝の寵妃の名である。

黎貴妃が表舞台に姿を現したのは、今から一年と少し前のことだ。人攫いにあったところを逃げ、近くの邑で保護された黎貴妃は、その美貌からすぐに役人の目に留まり、皇帝への貢ぎ物として後宮に送られた。

せっかく自由になれたところを、次は永遠に出ることの叶わない箱に閉じ込められたわけだ。それを不幸と取るか、それとも幸福と取るか、知るのは本人ばかりである。

皇帝の寵を受けた黎貴妃は、昨年の終わりに男児を出産した。以来、皇帝からの寵愛もあり、後宮での権力は群を抜いている。

黎貴妃の存在は、皇帝の陰に隠れ目立ったものではないが、寵愛をよいことに好き放題振舞っているとの噂だった。

「攫猿が後宮に侵入するのではないかと思うと、夜も眠れないそうだ。後宮はまさに禁軍が警備を敷いているのだ、妖ごときに敗れるわけもない。だが、陛下はそれを真に受け、禁軍を動かす勅令を発せら

れた」

禁軍は皇帝の矛であり、盾である。その命令に異を唱えることは許されない。禁軍兵に意思はいらない。必要なのは忠誠心と、兵士としての力量だけだ。

「私たち右飛龍軍が任を受けた。作戦としては、気術兵を中心とした小隊を結成し、攫猿に当てるつもりだ。実はその件で、お前に協力してもらおうと思っていたのだ」

ちょうどよかった、と楊秀は頷いた。

その顔に、仲望は不穏なものを感じ、訝しげに楊秀を見やる。

「龍乎から聞くところによると、厄介なのは攫猿は空に逃げるらしい。夜間ということもあり、弓で狙おうにもなかなかに難しいのだ。そこで、だ。禁軍一といわれた弓の腕前は、未だ落ちていないのだろう？　その腕を見込んで頼む。攫猿を撃ち落としてほしい。なに、空に逃げられなくしてくれればいいだけだ。とどめはこちらで刺す。むろん、成功の可否にかかわらず報酬は弾ませてもらうぞ。悪い話ではないだろう？」

乏しい俸給で家計をやりくりしている啓璋たちが聞けば、手を叩いて喜びそうな話だ。しかし、仲望は露骨に顔を顰めた。

「断る」

「諦めろ。今回はどうしてもお前の力が必要なのだ。理由は不明だが、例の猩猩緋も攫猿を追って動いている。どうあっても、奴らに先を越されるわけにはいかない」

猩猩緋――それは血を思わせる、鮮やかな深紅色を指す言葉だ。

だが、華国では違う。

〝――義賊・猩猩緋〟

民は、敬意を込めて彼らをそう呼ぶ。

彼らが歴史に姿を現して三年、その全貌は謎に包

まれている。その呼び名とて、彼ら自身が名乗ったわけではない。彼らが必ず体のどこかに身につけている猩猩緋色の布から、そう呼ばれるようになった。

彼らが標的とするのは、民を虐げる官吏や貴族、商人といった者である。屋敷や店を襲い、略奪した金品は貧困に喘ぐ民に還す。当初、東都から始まったその活動は、華国全土に及んだ。

むろん、朝廷もそれを黙視していたわけではない。華国の十の道、百有余の州、すべてに猩猩緋の捕縛命令が下った。

しかし、未だにその末端さえ捕らえられていないのが実情だった。

「猩猩緋が？」

いきなり登場した義賊の名に、仲望は首を傾げた。そもそも猩猩緋の襲撃は東都を中心とした地方で行われることが圧倒的に多く、華安での話はあまり聞いたことがない。

仲望が疑問に思うのも当然だった。

「理由はわからん。だが、攫猿が現れた場所では必ず猩猩緋の布を巻いた者が目撃される。だからこそ、奴らよりも早く攫猿を葬らなければならん」

「ああ……なるほどね」

楊秀の言わんとしていることに気付き、仲望は納得して頷いた。

華安の都を騒がせている攫猿。

龍乎ですら手間取り、禁軍に討伐命令が下った妖を、義賊である猩猩緋が退治したとなればどうなるか。

皇帝の権威は失墜し、代わりに猩猩緋の人気はさらに上昇することだろう。

「奴らをこれ以上、調子づかせるわけにはいかぬのだ」

「なら、龍乎と協力体制を取ればいいだろ。俺一人よりも、龍乎の弓兵百人の方がよほど役に立つ」

「断られたから、お前を頼っているのだ。あちらはあちらで攫猿を退治するそうだ。〝協力してほしけ

れば、皇帝陛下の勅命でもとってこい〟、だと」

どこにおいても、足の引っ張り合いはあるものだ。名家の子息を中心に構成されている禁軍に対し、龍乎の兵士たちは全員が平民か農民の出である。禁軍は龍乎を小役人と嘲笑い、龍乎は禁軍を皇帝の狗と罵り、互いに反発している。

これは今に始まったことではなく、もう長い間、負の慣習として受け継がれてきたものだ。元々、龍乎は禁軍に属する一軍で、都の警備を一手に任されていた。そのうちに規模も拡大し、百年ほど前に今の形態となった。

そんな前から続いている対立関係なのだ、双方の認識を覆すことは、一本の矢で月を射るよりも難しいに違いない。

「さて、休憩も終わりだ。攫猿の件は、小隊の選抜が整い次第、迎えに行くから逃げるなよ。お前もそろそろ中書令のところに行け。途中まで送るぞ」

「行きたくない……」

嫌々出仕したら、目的を達する前に別件の面倒事を押しつけられてしまった。この上、中書令にはなにをやらされるのか。考えるだけで億劫だ。

はぁ、と溜息をつくが、行かねばもっと面倒なことになることだけはわかっていた。

大冥宮を抜ければ、紫宝宮はすぐそこだ。再び人の気配も感じられるようになり、周囲の柱や天井にも煌びやかな装飾が見られるようになる。

「こちらに来るのは、久し振りか？」

「片手で数えられるくらいかな」

政治の中枢である紫宝宮は、滅多なことでは足を踏み入れないし、入りたいとも思わない。

懐かしくもあまりよい思い出のない場所に、仲望は病気の振りでもすればよかった、と今更ながらに後悔した。

この宮には、華国の歴史が詰まっているといっても過言ではない。

華王朝は、誕生からすでに二百五十年余りが経と

うとしている。この国を治めているのは、皇帝と五大夫と呼ばれる者たちだ。五大夫は、禁軍を退役した武官と、三省に属し、中書令、侍中、尚書令のいずれかを勤めあげた文官から選ばれる。

皇帝の専横を抑止する存在である五大夫には、様々な特権が認められている。

官位によって養える私兵の数は定められているが、五大夫は規則には当てはまらず、定められた領地に配する限り数の制限はないとされる。

また、皇帝が中書省に命じ作成させた勅旨に意見することができ、全員の同意があれば差し止めることも可能だ。その他にも、数限りない特権が彼らには認められていた。

今から三十年前のこと。

現帝沸儀より三代前の孝仁帝が死去し、帝位を世襲したのは僅か五歳の幼帝であった。

初めに権力を握ったのは、幼帝の傍に仕える宦官たちである。

宦官は皇太后と結び、権力を我が物にしようと目論んだ。実際、それは成功し、一年という短い間ではあったが、権力を思うがまま行使することができた。

しかし、彼らは五大夫を取り込むことを怠った。宦官の専横に不快を示した五大夫たちにより、幼帝は皇宮より奪取される。その上で、首謀者一味は捕らえられ一人残らず斬首された。皇太后は離宮に幽閉され、その一年後、自らの立場を悲観し毒を呷ったとされる。

その後、権力を握ったのは五大夫の一人、黄守真という人物だった。黄守真は幼帝の身辺を息の掛かった武官で固めた。

数年の間、政治の中心に居座る。その間、権力の濫用も朝廷の外に及ぶことはなかった。しかし、黄守真の失脚を目論んだ者がいた。

名は蘇宇陽。

五大夫の一人、元中書令の蘇宇陽は、皇帝ではな

く一人の官の下に権力が集中することを危ぶんだ。また、武官ばかりを優遇し、文官を蔑ろにされ不信を募らせていた。

後に華北の乱と呼ばれる事件が起こったのは、黄守真が権力を手にしてから五年後のことであった。

蘇宇陽は、義弟であり皇帝に仕える宦官であった蘇虎盛と謀り、隙をついて皇帝の身柄を黄守真の手の届かぬ場所へと移すことに成功した。

さらに皇帝から勅旨を得ると、権力を私物化したとしてその罪を責めたのである。黄守真から五大夫の地位を剝奪した上で一族を三親等まで処刑し、残った者は都を追われた。

たった五年で、黄守真は権力の座を追われることになる。

黄守真らの粛清により、蘇宇陽が次に権力を握るかと思われた。

しかし、黄守真の処刑より五日後。蘇宇陽は宮中で倒れ、そのまま二度と目を開けることはなかった。

あまりにも突然に訪れたその死に、黄守真の呪いだという噂が都に流れたという。

もしも蘇宇陽が死なず、彼が幼帝の後見についていたならば、後の世はこれほど乱れなかったかもしれない。蘇宇陽が亡くなった直後、醜い覇権争いが長期にわたり繰り広げられることとなる。

五歳で帝位に就いた幼帝は、なにもわからぬままその争いに巻き込まれた。

彼は時々の権力者にその身を左右されながら、二十歳という若さでこの世を去ることになる。諡を憲帝といい、臣下私欲に翻弄された人生だったが、その後、皇族らが繰り広げた、血で血を洗う闘争を見ることはなく、それだけは幸いであったといえよう。

憲帝には子がなく、太子として定められていたのは、憲帝の弟、幽帝である。この皇帝はその諡の示す通り、暗君としか言いようのない人物であり、美女を侍らせ享楽に耽り政を官任せにした。

しかし、重度の肺病を患い、帝位を継いだ二年後には床より起き上がることすら困難となる。数年後、誰に惜しまれることなく他界。幽帝にも子はなく、次の皇帝位には、憲帝、幽帝兄弟の叔父に当たる李沸儀が担ぎ出された。現在、帝位についている人物である。

今年齢四十五を数えるが、その業績は〝凄惨〟の一言に尽きる。

三十八歳で帝位に就くなり沸儀が行ったのは、帝位継承権を有する皇族の粛清――公子らが事前に決起したため〝華玉の乱〟と呼ばれる――であった。それは赤子に至るまで容赦なく行われた。自らの子以外を一掃し、帝位を脅かす存在を排除したのである。

次に手をつけたのは、皇帝に次ぐ権力を有する五大夫の弱体化である。

五大夫にとって不運だったのは、沸儀が暗君ではなかったということだ。

有能な暴君ほど、始末に負えないものはない。もっとも、沸儀は帝位に就くまでの間、その残虐さも有能さも隠していた。

沸儀が帝位に就いた際は、五大夫たちもこれまでと同じく沸儀を操り人形として利用するつもりであった。帝位に就くなりその思惑を砕くような施策を打ち出したのは、五大夫にとって慮外のこととしか言いようがなかった。

しかし一方で、今までの殺伐とした朝廷にも、これで一条の光が見えたと手を打ち喜んだ者がいたのも確かであった。

五大夫にすり寄る官吏たちの中から、有能と思われる者たちを取り込むことによって徐々に勢力を奪った沸儀は、自身の足場をより強固なものとするべく禁軍の増強を行った。自身の意思で自由に動かせる大軍を都で養うことにより、皇帝の権力を絶大なものにして、徐々にその残虐性をさらけ出していった。

郎党の取り締まりを行い、反逆の芽を摘み、地方の道や州に重税を課した。これにより、五大夫は今までのように兵を養うことができず、その大半を解散せざるを得なかった。

資金がなければ、造反したところで長続きはしない——反乱の防止策という意味もあったのだろう。

一方、官吏たちも安穏としてはいられなくなった。皇帝の求める仕事が成せない者や、意に染まない者には宮中であっても容赦なく鞭が振るわれた。そのいい例が、戸部尚書、司馬平忠だ。

尚書省の下に位置する六部の一つである戸部は、土地や戸籍の管理を始めとし、官吏の俸給など、財務関連の業務を一手に担う。官吏の腐敗がもっとも進んでいたのが、その戸部であった。

沸儀は司馬平忠に、職権を利用し不当な利益を得ていた官吏の捜査を命じた。しかし、官吏独自の柵により、捜査は遅々として進まなかった。それを不満に思った沸儀の命により、司馬平忠は宮中において、まるで見せしめの如く鞭打ちの刑に処された。

司馬平忠が息耐えた後も、決められた回数が打ち終わるまで、その遺体には鞭が振り下ろされたのだった。

これにより朝廷の腐敗は一掃された。しかし、華美を好む沸儀の浪費は激しく、国庫は瞬く間に枯渇した。そして、それを補うべく、税の値上げが行われた。

当然、世は荒廃した。

地方で税を納められず逃亡した農民が山賊と化し、邑や旅人を襲うようになった。

山賊討伐の嘆願書は、朝廷に幾度となく提出されている。しかし、誰一人としてその書状を皇帝に渡す者はいなかった。今では、機嫌を損なう負の情報は、隠匿するという暗黙の了解が朝廷内には漂っている。皇帝が機嫌を損ねる度に誰かの首が飛ぶからだ。

紫宝宮は、その華やかな名とは裏腹に、陰惨な過去と人々の怨嗟によって彩られているのだった。

「では、またあとでな」

「おーう」

気だるく言葉を返し、仲望は楊秀の傍を離れた。しばらく歩くと、刺すような視線を方々から感じるようになる。

四年前の戦で大功を立てながらも禁軍を退いた仲望だが、未だ官吏たちの記憶からは消えてはいない。皇帝陛下の覚えがめでたい男だ、と。

書物の補修係から高みなんて目指すわけないだろ、と仲望は心中で毒づく。第一、今の宮中で出世してもよいことはなにもない。皇帝に上手く取り入ることができればいいが、その恩寵に与れるのはごく一部の者たちだけ。それも、いつ皇帝の不評を買い、排除されるかわからない不安と隣り合わせだ。そのどこに魅力を感じろというのか。

やはりこんなところに来るんじゃなかった、と仲望がうんざりしていると、回廊の前方より見慣れた人物が歩いてくるのが見えた。相手も足を止めた仲望に気付き、実にわざとらしく驚いたように目を瞠った。

「なんだ、宮中でぬしに会うとは。今日は雨でも降るのか？」

他の官吏たちの嫌味とは違い、こちらは愛嬌のある冗談だった。

花興奏。

仲望の上司であり、中書令という中書省をまとめる要職に就く人物だ。そして、仲望を呼び出した張本人でもある。

中書省は、皇帝が出す詔勅の起草を行う役割を担っており、宮中での発言力は強い。華国初期は宦官がその任を担っていたが、専横が目立ったために省が設置された。

「ならば、早々に帰られた方がよろしいでしょう」

「そうできるものならばな」

歳は五十七になったばかりだが、以前顔を合わせた時よりも疲労の色が濃い。老いてもなお矍鑠としているが、ここ数年でぐっと痩せ細ったように思える。

上等な袍も、中書令の証である冠も、背後に付き従う侍従ですら、興奏の表情に落ちる暗い影を隠すことはできないようだった。

「せっかくだ、少し話をせぬか？」

周りの者たちに聞かせるかのように告げられた言葉に、仲望は自身が嵌められたことを悟った。呼び出したのならば、私室で待っていれば事足りる。それを、わざわざ人目のあるところで、さも偶然を装って声をかけてきたのだ、裏があるとしか思えなかった。

「申しわけありません。これから用事がありますので」

こんな茶番劇に付き合ってなどいられない、と仲望はさっさとこの場をあとにしようとした。しかし、腕をがっちりと摑まれてしまえば、相手は上役だ。無下に振り払うことはできない。

「少しくらいよかろう？」

「いいえ、分不相応ですから」

「ぬしがそれほど謙虚な性格だとは思わなかったな。よいから、付き合え」

「えー……」と、仲望は不満げな声をあげるが、楊秀とは桁違いの殺気を感じ、興奏の背後に視線を向けた。そこには、中書令の侍従が鬼のような形相でこちらを睨みつけていた。

断ったら殺す。そんな気配がひしひしと伝わってくる。

「じゃあ、ちょっとだけ……」

渋々折れた仲望は、やはり来るんじゃなかった、ともう何度目になるかわからない後悔をするのだった。

「して、そろそろわしの右腕として働く決意は固めたか？」

これが呼び出した本題かと、仲望は疲れが増すのを感じた。

案内されたのは、紫宝宮の中にある中書令専用の私室だった。適度な広さを持つそこは、来客用に使っているようで、値の張りそうな調度品が惜しげもなく置かれていた。

椅子に座れば、すぐに香りのよい茶が運ばれてくる。仲望はなんの遠慮もなくそれを飲み干し、興奏が口にした言葉に溜息をついてみせた。

「ご冗談を」

「ぬしはまだ若い。このまま閑職で終わるつもりか？」

「今の役職で充分満足ですよ」

「無欲は美徳だが、時として野心を持つことも大事だぞ」

「野心は身を滅ぼすものだと思いますが」

「度を越したものはな。ほどほどなら問題はない」

興奏が仲望のなにをそんなに買ってくれているのかわからないが、どれほど言葉を尽くされようとも、仲望は興奏の言葉に頷く気にはなれなかった。今の朝廷で野心を持つことは、無謀な賭けでしかない。なによりも、面倒臭すぎて考えることすら億劫であった。

「やれやれ。強情なのも問題だ。わしの右腕として仕込み、いずれ殿下に推挙してやろうと目論んでいたのだがな」

「また面倒なことを」

「うるさい。側近の選定は、もうすでに始まっている。できるだけ有能で、忠義に厚い者を選ばねばならぬのだ」

皇帝の長子、李博焚は父親の血を引いているのかと疑われるほど、温厚篤実な人物だという噂だ。

歳は仲望の一つ下であり、昨年から北の国境にある砦に赴き、兵の指導に当たっていた。しかし、今

年に入って体調を崩した太子は、大事を取り華安に戻ったと聞いていた。

「ぬしの性格はわかっている。だが、一度でいい。真剣に考えてはくれぬか」

「はぁ……」

禁軍を退官したあと手を差し伸べてくれた興奏に対し、恩を返したいという気持ちはある。だが、できる限り政の中枢には近付きたくない、というのが嘘偽りない仲望の本音だった。

それに、野心を持つ者たちとの腹の探り合いは、禁軍に所属していた時に嫌というほど味わった。脳味噌まで筋肉でできているのでは、と疑いたくなる者が多い武官の世界ですらそうなのだ、腹に一物を抱える者が跋扈する文官の世界など、想像するだけで疲れる。

「中書令は、俺を誤解してますよ」

「なぜそう思う？」

「今の自分が本来の姿であり、昔のあれは偽物です。同じものを求められてもむりですよ」

「それでも構わぬぞ」

これは一筋縄ではいかないな、と仲望は嘆息した。断る方法を考えておいた方がよいのかもしれない。そうでなければ、いつの間にか断れないところに追い詰められてしまいそうだ。

会話が途絶えたあと、ふいになにかを思い出したように興奏が口を開いた。

「部下からの報告があった。東方の邑に蜚が出たという。それも草原に、だ」

蜚とは、海が近い東方の山に住み、首が白く牛に似ている生き物だ。目は一つで、蛇の尾を持っている。

これが水の中を進めばその水は干上がり、草原を通れば草は枯れ果て、世の中に疫病が蔓延するといわれている。

太平の世では山堺に潜み、滅多に姿を見せることのない妖だ。

「蜚が出たと陛下に訴える官吏もいなければ、疫病対策を講じる官吏もいない。今はまだよい。だが、いずれ疫病が蔓延すれば人は弱いものから順に死に、翌年は過酷な税の徴収でまた人が死ぬ。救いのない世の中だ」

人払いがされているとはいえ、紫宝宮の真っ只中で口にする言葉ではない。それをわかっているのか、興奏は自嘲するように笑った。

「わしもこうして批判を口にするだけで、陛下に進言することすらできぬ。頭を押さえつけられ、唯々諾々と命令に従っている者たちと同じだ」

多くの同輩を粛清で失った興奏は、生き残っていることそのものに慙愧の念を感じているのだろう。しかし、中書令である興奏は、心ある官吏たちの支えなのだ。彼の存在が、皇帝の袖の下で甘い蜜を吸う官吏たちを抑制している。

万が一、興奏になにかあれば、抑えを失った朝廷は今よりも荒れることだろう。それを知っているからこそ、彼に近しい者たちは興奏に表立った行動を避けるようにと訴えているのだ。

年老いた興奏の肩には、想像もつかないほどの重圧が掛かっていることだろう。それを見て見ぬ振りをする己はよほどの薄情者だ。

わかってはいるのだ。ありとあらゆるものから逃げ、できるだけ遠くに身を置く行為がどれほど卑怯なことか。だが、それでも興奏の申し出に頷くことだけはできなかった。

しばらくして、興奏は疲れたように嘆息した。

「すまぬな。老人もたまには弱音を吐きたくなる。忘れてくれ」

「はい」

あまり長居をしてはいらぬ誤解を招きかねないため、仲望は「そろそろ屋敷に戻ります」と告げ、立ち上がった。

「ここではゆっくりもしていられぬな。今度、屋敷に顔を出せ」

その内に、と曖昧な返事を残し、仲望は房屋をあとにする。

回廊に出るなり、先ほどよりも増えた視線と、これ見よがしにこそこそと話し出す官吏たちに辟易し、さっさと屋敷に戻るべく仲望には珍しくきびきびとした足取りで進むのだった。

花家から帰宅した春蘭は困っていた。

土産だと言って渡した干菓子を、啓璋と友寧が受け取ってくれないのだ。

断固拒否の態度を取っているのは啓璋だけだが、「啓璋が食べないなら……」と、友寧も干菓子に手をつけなかった。

啓璋と友寧の力関係は、啓璋の方が上のように思われる。友寧は性格がそうさせるのか、誰に対しても遠慮深い面がある。しかし、一度こうと決めれば梃子でも動かない辺りは、啓璋よりも頑固なのかもしれない。

卓の上に置かれた干菓子を見詰め、ううむ、と春蘭は唸る。なぜ、土産すらも拒否されるのかがわからない。どうして、啓璋と友寧はこんなにも頑なに春蘭を拒むのか。

占いの件が、それほどまで頭にきているのだろうか。それとも、春蘭の正体をあれこれと勘繰っているのか。

しかし、こちらにも退っ引きならない事情があるのだ、どれほど拒否されようが屋敷に居座るしかない。

「……人とは難しいものだな」

守り神であった春蘭にとって、人はただ守るべき存在であった。

母が子を守るように、春蘭も民を慈しんだ。

豊作だと喜ぶ人々の姿は、春蘭をも喜ばせた。だから、洪水や、日照り、疫病といった天災を出来得る限り防いだ。己の力が届く限り、春蘭は民の願い

に応え続けた。

——なぜ守るのか。

それに理由は必要ではなかった。

先代の守り神がそうであったように、春蘭もまた力が続く限り邑を守りやがて無へ還っていくものだとばかり思っていた。

「……それが今、なんの因果で干菓子を前に悩まねばならぬのだ」

啓璋たちがいらないと言うのだ、自分で食べてしまえばいい。頭ではわかっているが、なぜか手が出なかった。

ひんやりした卓にぺたりと頬をつけ、うんうん唸っていると、不意に頭上から仲望の声が聞こえた。

「腹痛？」

「……別に、腹が痛いのではない」

「そっか」

あいかわらずのんびりとした口調で告げ、仲望は春蘭の向かいの椅子に腰を下ろした。そして、卓上の包みに目を留める。

問うような眼差しを向けられ、春蘭はしかたなく口を開いた。

「干菓子だ。土産に持って来たのだが、啓璋と友寧はなぜか受け取ってくれぬ」

「甘い物が嫌いだったのかな？」

仲望はごそごそと包みを漁り、取り出した干菓子を躊躇いもなく口にした。

「うん、美味い」

あっという間に一つ目を食べ、次に手を伸ばす仲望を、春蘭はなんとも言えぬ気持ちで見詰めた。それに気付いた仲望が、不思議そうに首を傾げる。

「土産なのだろ？」

「……うむ」

「あー、美味い。茶が欲しい」

湧き上がる感情の意味がわからず、春蘭は再び卓

に顔を伏せた。やはり人とは難しいものだ、と心の中で呟いたのだった。



とっぷりと日も暮れた頃、鄭家に来客があった。

春蘭が鄭家に居候してから、三日後のことである。客は仲望の友人で、韓楊秀と名乗った。一目で武官だとわかる立ち姿に、友寧にこっそりと問えば、禁軍に所属し右飛龍将軍という要職にある人物だと答えが返ってきた。

「それで、悪女はどこだ？」

本当に偉い将軍なのだろうか、と春蘭は客間できょろきょろと辺りを見回す楊秀に呆れた。仲望の友人だということだけはよくわかる。

「楊秀様、悪女ってなんですか……？」

友寧が恐る恐るといった様子で楊秀に聞き返す。先ほどまで、これでお前も終わりだ、というような顔を春蘭に向けていた啓璋ですら、困惑の色を隠せないでいた。

「啓璋からの報せには、屋敷に女が居着いたとあったからな。そういう強引な女は、悪女だと相場が決まっている。で、どこだ？」

「ここ」

そう言って、仲望は椅子に座ってくつろぐ春蘭を指差した。

「……悪女はどこだ」

「だから、この子」

「仲望……お前は、いつからそのような趣味になったのだ！　見損なったぞ！」

いきなり叫んだかと思うと、楊秀は勢いよく仲望の肩を両手で摑んだ。そして、そのまま前後に激しく揺さぶる。

「大人の女人に興味を持たぬのは、元々そういう趣

味だったからか！」

「よ、楊秀様！　旦那様が死んでしまいます！」

「旦那様を放してくださいー！」

啓璋と友寧は、必死の形相で楊秀にしがみついた。それにより、少し自制心を取り戻した様子の楊秀は、ぐったりとした仲望から手を離した。

「仲望。悪いことは言わぬ。この少女は親元に返せ。どうしてもというならば、あと二、三年は待て」

「勘違いしないでください、楊秀様！　俺たちはこんな餓鬼を奥方だなんて認めません！」

「だがな啓璋。この屋敷に嫁に来てくれる女人など希少だぞ。ここで逃したら、仲望は一生縁なしかもしれん」

「だから、そういうんじゃないんです！」

顔を真っ赤にして反論する啓璋を、楊秀は腑に落ちないといった顔付きで見下ろした。啓璋がどのような報せを楊秀に送ったのかは不明だが、それが多大な誤解の原因のようだ。よろよろと瀕死の様で椅子に座った仲望に、春蘭は話し掛けた。

「悪いが、私はぬしの嫁にはなれぬぞ？」

「充分わかってるよ」

「ならばよい」と頷いた春蘭は、楊秀の誤解を解くことに必死な啓璋と友寧を横目に、未だに慣れぬ自身の格好に視線を向けた。

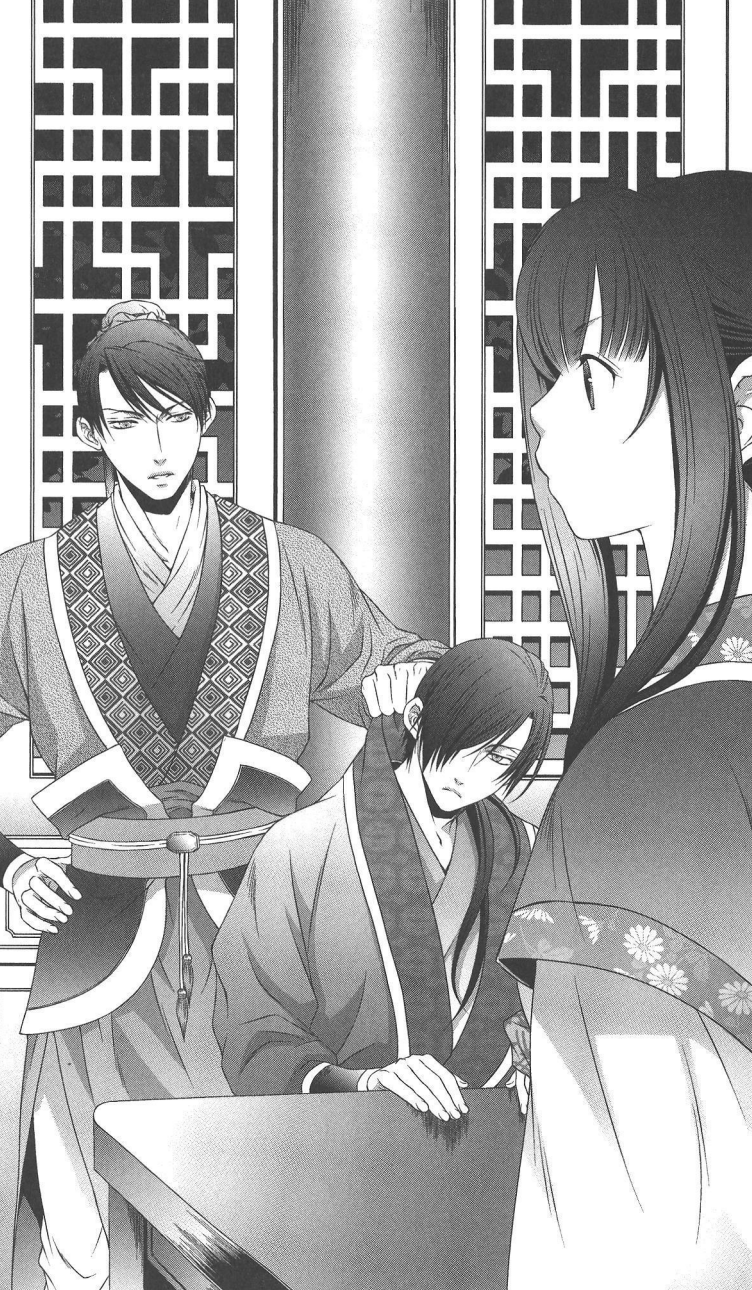
現在、春蘭が着ているものは、襦裙と呼ばれる女性用の服装である。裾の短い桃色の上衣に、それよりは色が濃く膝まで隠れる腰裙を巻き、その下には、上衣と同じ色の下衣を穿いていた。

昨日の昼間、近くまで足を運んだこともあって、花家を訪ねた春蘭は、なにが楽しいのか、翠蓮と玉翠の二人に様々な服を着せられるという目にあった。そして、その中でも春蘭の体にぴったりと合った服を五着ほど、着せ替え遊びのお礼として貰うことになったのだ。

「私のお古だから気にしないでいいわよ」というのが玉翠の主張であり、替えの服を持っていなかった

春蘭は、ありがたく頂戴することにした。
しかし短服に比べ、ひらり、ひらりと揺れる袖に違和感があり、動き辛いことはないが前の方が楽だった、というのが春蘭の感想である。
そして、けっして安物ではない服を抱えて帰ってきた春蘭に対し、啓璋と友寧の視線は、またしても好ましいものではなかった。
「――つまり、この子供がいきなり押し掛けてきたというのだな？」
「そうです。早く、追い出してください……」
啓璋は説明に疲れた様子で、ぐったりと友寧に寄り掛かっていた。一方、それを聞き終えた楊秀は、真面目な顔付きで春蘭に向き直った。
「春蘭といったか。親御殿が心配しているはずだ。わがままを言わずに帰れ。どうしてもというならば、せめてあと二、三年後に来るとよい」
「私の親はすでに死んでおる。ここを追われたら、露天を彷徨うしかない」
それを聞いて、がくりと楊秀は膝を折った。そして、啓璋と友寧に向かって「置いてやれ！」と、反旗を翻す。
「いや、そういうことならば我が屋敷で預かるという手もある。鄭家の奥方として相応しい教育を施し、二、三年後に婚礼を挙げれば――」
「すまぬが、私はここから離れるわけにはいかぬのだ」
「そ、そこまで仲望のことを！」
感極まった様子の楊秀だったが、完全なる勘違いである。しかし、こちら側の事情を説明する隙が見つからない春蘭は、黙って成り行きを見守るしか方法はない。
「お前たち。不服があるとは思うが、ここまで仲望を想う女人は二度と現れはしないだろう。なに、共に暮らすうちに、欠点の一つや二つ気にならなくなる。親御殿がいないことにかんしては、いずれ相応しい養父を紹介しよう。それで万々歳だ！」

これで決まりだと言わんばかりであった。
それでもなお、啓璋は楊秀の誤解を解こうと奮闘したが、思い込みの激しい相手には無駄な足掻きに終わる。
ついには、拗ねたように膝を抱え、客間に面する回廊の隅で蹲ってしまった。友寧はそんな友人を、必死に慰めている。
「ところで仲望。そろそろ刻限だ。行くぞ」
「えー……」
「反論は認めぬ。お前は、たまには体を動かした方がよいのだ」
楊秀は、卓にへばりつく仲望の上衣の襟を摑み、むりやり引き剝がす。それを眺め、春蘭は首を傾げた。
「なんだ、こんな遅くに出掛けるのか？」
仲望の代わりに楊秀が「大人の野暮用だ」と真顔で答える。
その意味ありげな言い方に、回廊からこちらの様子を窺っていた少年たちが顔を赤らめた。
「ふむ。仲望はこちらが心配するほど女っ気がないからな。がんばってくるがよい」
「しゅ、春蘭！」
咎めるように叫んだ友寧の耳や首は、顔同様に真っ赤に染まっていた。隣では、啓璋も似たような顔をしている。
突進するように向かってきた二人は、春蘭を房の外に連れ出し咎めるような視線を向けた。
「おかしなことではないだろう。鄭家の後継問題にかかわる大事だぞ」
「そ、それはそうかもしれないけど、女の子なんだからもう少し慎みを持とうよ……！」
「応援しただけだ」
「それが駄目なの！」
友寧は顔を真っ赤にしただけでなく、目を潤ませながら必死に反発する。
また、啓璋はこういったことに慣れていない様子



で、友寧の言葉に首を上下させることで同意を示していた。
「とにかく、駄目なものは駄目なんだからね！」
「鄭家の将来を案じただけなのだが」
「心配するなら心の中で！　言葉に出さないで！」
「ふむ。努力しよう」
叫びすぎたせいで荒い息をする友寧の肩を、こちらまでやってきた楊秀がぽんと叩く。びくっ、と肩を震わせた友寧は、なぜか飛び退くように楊秀から離れた。
「驚かせてすまんな。出掛けるので、仲望の支度を手伝ってやってくれ」
「あ、すみません！　只今、準備します！」
「うむ。できるだけ見栄えのする袍を選んでやれ。何事もまずは外見が重要だからな」
「わかってる、わかってるから！」
半泣き状態の友寧は、仲望と啓璋と共に別室へ向かった。残された春蘭は、自分にあてがわれた房に戻ることにした。客間を出るところで楊秀を振り返り、にっこりと微笑む。
「最近は色々と物騒だと聞く。充分に気をつけるがよい」
房に戻り、春蘭は室内に灯りを点した。
鄭家では蠟燭も貴重品で、比較的安価で売られている古い油を灯りの素として使用していた。これは匂いがきついため、火を点す度に春蘭は顔を顰めずにはいられない。それでも、ないよりは遥かにましだ。
「友寧と啓璋は、あれで騙されていたようだが……」
楊秀が〝そろそろ刻限だ〟と告げた時に滞った緊張感のようなもの。それは、とてもこれから妓女を相手にするとは思えない張り詰めた気配だった。十中八九、別の用事があるのだろう。
そして、色事以外で子供に聞かせられないことと言えば——

「ふむ。今日は月夜の散歩と洒落込むか」
玉を結んだ紐を腰に巻き、春蘭は「白桃」と呟いたのだった。

正門並びに東龍門、西虎門は閉刻を報せる鐘の音をもって閉められる決まりとなっていた。
そして、一日の終わりを告げる終刻の鐘以降の外出は禁止とされ、見つかった者は厳罰に処される。例外は警備する側の人間か、朝廷の使者のみで、それも火急の報せである紫文印の携帯が義務付けられていた――
以上が、花家の姉妹から聞いた情報である。つまり、夜半の外出はよほどの理由がない限り禁じられている。
仲望と楊秀が俥に乗って鄭家を出たのは、終刻の鐘が鳴る前のことだ。
それを屋根の上から見届けた春蘭は、距離を開けて二人を尾行することにした。近付き過ぎて見つからないよう白桃の背に跨り、二人を見失わないぎりぎりの距離を取る。
匂いに敏感な白桃の鼻をもってすれば仲望たちを捜し出すことは容易だったが、あまりに敏感過ぎて、彼らが下りた後の空の俥を追ってしまう恐れがあった。また、人が集まる場所に紛れ込まれてしまうと、匂いは途切れてしまう。
「白桃。絶対に気付かれるのではないぞ」
「バウ」
春蘭に応えるように白桃は音も立てずに、屋根から屋根へと飛び移る。
空に輝くのは、半分に欠けた月だ。
闇に沈む都を、静謐な月の光が克明に浮かび上がらせている。
周囲がよく見える分、下手をすれば巡回中の警備兵に見つかり大騒ぎになってしまう可能性がある。特に今は攫猿の事件で、夜間の警戒はより厳重な状

況だ。

白桃は人の気配を感じる度に四肢を止め、辺りを窺いながら先へ進むといったことを繰り返していた。途中、幾度か俥を見失いそうになりつつ、それでも二人が俥を下りるのを見届けることができた。

「物々しい雰囲気だな」

春蘭が見詰める先には、篝火に照らされた兵士たちの姿があった。大路の広場に集められた兵士の数は、百を下らないだろう。騎馬の手綱を握り、直立不動の姿勢で微動だにしない姿は、まるで土で作られた精巧な像のようだ。

兵士たちの中から、指揮官と思しき者が仲望たちへと近付いていった。なにかを話していると、続いて武具を持った他の兵士たちがやってきた。

仲望と楊秀は袍を一枚脱ぐと、手渡された武具を身につけ始める。仲望はあからさまに億劫そうだ。

「ふむ。これが〝大人の野暮用〟か」

確かに、啓璋たちには知られたくはないだろう。禁軍に所属していた時なら当然のことだが、仲望は怪我を負って軍を退いた身だという。啓璋たちは絶対に反対するに決まっている。

だからこそ、楊秀は余計なことを言わず、断り切れなかった仲望も、少年たちになにも説明しなかったのだろう。もっとも、仲望は説明が面倒臭かっただけという可能性も高いが。

楊秀は禁軍の将。

ならば、これが件の攫猿を退治するために集められた部隊か。仲望が連れて来られたのは、彼がかつて弓の名手だったことに関係しているのだろう。攫猿が厄介なのは、その腕力もさることながら、強靭な両脚による跳躍である。

屋敷の上を自由自在に飛び回られては、なかなか仕留めることはできない。必要とされるのは、腕に自信のある弓兵だ。しかし、それだけのために軍を退いた仲望をわざわざ引っ張って来るだろうか。

「――ふむ」

屋根の上で春蘭が悩んでいると、楊秀指揮の下、部隊は四つに分けられ、兵たちはそれぞれの馬に跨った。

春蘭が遠くから見守る中、仲望は兵士の手を借りながら馬に乗った。楊秀が部隊に向け何事か命令を下す。仲望と楊秀を含めた兵士たちは、一糸乱れぬ動きでそれぞれの方角に馬を走らせた。

「さて、私はどうするかな？」

禁軍による大捕り物を観戦してもいいが、気配に鋭い者が白桃の存在に気付かないとも限らない。面倒事を避けるためには、このまま屋敷に戻った方が賢明だろう。

なぜ、攫猿がこのような大都に姿を現したのかは気になるが、春蘭には関係のないことである。今、春蘭が優先するべきは、己の真名を取り戻すこと。それ以外に意識を向けている余裕はない。今回はたまたま、家主の動向を確認するために後をつけたのだ。

「……白桃。屋敷に戻るぞ」

了承したとばかりに白桃がのどを鳴らした時だった。春蘭の背筋を、ぞわりとした不気味な感覚が伝う。

それは、人ではない、異形のものの気配。

「白桃！」

叫ぶと同時に、春蘭は白桃の首に腕を回した。素早い跳躍。白桃の背で激しい動きに耐えていた春蘭は、月光に照らし出されたそれを捉えた。

白桃と同じく屋根の上に座るそれは、毛むくじゃらの塊に見えた。

しかし、明らかに異常な大きさだった。

背丈は成人男性の二倍はあるだろう。胴回りにしても、両手を回しても足りない。真っ赤に裂けた口からは、発達した鋭い牙が覗いていた。

記憶にある姿と寸分も違わぬそれに、春蘭は眉を顰めた。

「……攫猿！」

なぜ、よりによって仲望たちが移動したあとで現れるのか。

攫猿は辺りを見回し、ひくひくと鼻を動かす。そして、両脚の筋肉を使い高く跳躍したかと思うと、春蘭の頭上を軽々と飛び越え、轟音を立てながら背後に着地する。同時に両腕を振り上げ、爪で白桃ごと春蘭を切り裂こうとした。

「くっ！」

春蘭が命じるより先に、白桃は攫猿の一撃をぎりぎりの間合いで避け、右へ跳んだ。振り落とされないようにしがみつきながら、春蘭は冷静に考えを巡らせた。

攫猿は、春蘭と白桃を敵と見做したようだ。そして殺すために向かってくる。白桃は神獣だが、春蘭を背負ったままではまともに戦うことすらできないだろう。

攫猿とは、ここまで手強い相手だったのか。

守り神であった時は、大抵の妖は小物に等しい存在だった。少し意識をそちらに向けるだけで、姿を消したものだ。

春蘭は唇を噛み締めた。

本当に、自分はただの人になってしまったのだ。

攫猿の腕の一振りで、春蘭は呆気なく命を落としてしまうだろう。

心臓が痛いくらいに警鐘を鳴らす。頭痛にも似た感覚に、春蘭は眉を寄せた。

「は、くとう、走れ……！」

勝てないのならば、逃げるしかない。だが、鄭家に戻るわけにはいかなかった。このままでは攫猿を連れて戻ることになる。仲望と楊秀らが向かった方角を白桃に指示した。

今は春蘭を追っている攫猿も、兵士たちの姿を見れば戸惑うだろう。そこで攫猿が逃げるもよし、兵士たちに向かうもよし。元々、攫猿対策のために集められた部隊なのだ、ちょうどいいだろう。

そして、春蘭は混乱に乗じて逃げる。白桃の姿を

見られずに済めばいいが、この状況で贅沢は言っていられない。

仲望たちが出発してから、まださほど時は経っていない。上手くすればそうかからずに見つけることができるはず、と春蘭は白桃の背にしがみつきながら考えた。

しかし、攫猿の動きは春蘭の予想を上回った。徐々に詰められる距離。首を捻れば、攫猿の爪と牙がすぐ間近まで迫りつつあった。思わず、体が恐怖に強張りそうになる。

「くっ、白桃。地面に……！」

降りろ、と命令するより早く春蘭の小さな体を衝撃が襲った。白桃ごと薙ぎ払われたのだと気付いた時には、春蘭は空中を舞っていた。

月と、それに照らし出された攫猿が視界に映る。ゆっくりと降下する景色。

鋭い牙を見せながら咆哮する攫猿の姿が、屋根の向こうに没する。このまま地面に叩きつけられることを覚悟して、春蘭は目を閉じた。

背に鈍い衝撃が走る。

しかし、それは想像したような激痛ではなく、むしろなにかに受け止められた感じだった。春蘭が目を開けると、すぐ傍に見慣れぬ青年の顔があった。

「――よし！　間に合った！」

癖のある髪を首の後ろで適当に結った青年は、動きやすそうな短服に、胸当て、籠手という簡素な武具を身にまとっていた。禁軍の兵士には見えず、かといって龍乎のお仕着せとも違う。

ぜえぜえ、と荒い息を吐く青年は、ぽかんとする春蘭にどこか軽薄な笑みを向けた。

「こんな夜遅くに外出するから、怖い目に遭うんだぜ？」

「早く下ろせ。攫猿が来るぞ！」

「おっと、そうだった。危ねぇから離れてな」

春蘭を放り投げるようにして下ろした青年は、片手に持っていた槍を頭上でくるりと旋回させる。ま

さか、一人で立ち向かうつもりなのか、と春蘭が相手の正気を疑った時、屋根から黒い影が飛び降りてきた。

こちらをぎろりと睨みつけた攫猿は、空を切り裂くような咆哮をあげる。びりびりと振動する空気に、春蘭は堪らずに両耳を塞いだ。

しかし、青年はそれに堪える様子はなく、飄々とした態度を崩さない。ぐるる、とのどを鳴らした攫猿は鋭い牙を剝き出しにし、青年に猛然と襲い掛かった。

「お、っと！」

素早い跳躍で距離を取った青年は、上体を低く落としながら槍の先を攫猿に向けた。「体ごと薙ぎ払われるぞ！」と春蘭が叫んだ次の瞬間、青年の上半身が青白く光り始めた。それは太陽のような真っ直ぐな光ではなく、じわりと滲み出るような微かな光だった。

よく目を凝らせば、その光は青年の丹田付近から胴体に流れているようだった。それが、上半身を伝い両腕へと集束される。

「あれは、なんだ……？」

緩やかに明滅するそれに、春蘭は訝しげに目を細めた。

「来いよ、畜生」

言葉はわからずとも、青年が己を挑発していると悟ったのだろう。一拍の間を置き、攫猿はその重量感ある肉体で突進を開始した。

肉薄する攫猿に、青年はにやりと意地の悪い笑みを浮かべた。

攫猿の腕が青年に届く瞬間、まるで待っていたとばかりに、槍が唸りをあげて繰り出される。脚を狙った一撃は、しかし穂先が触れるか触れないかというところで空を切った。

驚異の身体能力で頭上に逃れた攫猿を、青年は舌打ちしながら追う。今度は、青年の体から発せられる光が、下半身——両足へと水が流れるように移動

した。

「逃がすか！」

たった一度の跳躍で攫猿との距離を縮めた青年は、空中で槍を振るう。その無駄のない動きは、見事としか言いようがなかった。しかし、なぜか青年が狙うのは攫猿の腕や脚ばかりで、致命傷となるべき部分をあえて避けているように見える。もしかして、攫猿を生け捕りにしようとしているのだろうか。

「正気の沙汰ではないな……」

春蘭はぽつりと呟いた。

それでも、たった一人で攫猿と互角の戦いを演じるとは相当なものである。いったい何者なのだろうか、と春蘭が疑問を抱くと同時に、鋭い笛の音が夜空に響き渡った。

どうやら、攫猿の咆哮に気付いた兵が駆けつけて来たようだ。笛の音は仲間を呼ぶ合図だろう。春蘭は慌てて小路に身を隠す。

大路を睨んだままじりじりと後ずされば、どん、となにかにぶつかった。

「なんだっ――と、白桃か」

アオン、と控え目に咆える白桃に、春蘭はほっと息を吐いた。神獣は滅多なことでは死にはしないし、たとえ傷を負ったところで一度玉に戻れば治療は可能だ。

ただその分、治療するための時間と、隷属した相手の気を削ぐことになるが、先代の守り神の命を脅かすほどではない。

「よかった。無事だったようだな」

目立った外傷もなく、春蘭は肩から力を抜いた。そうこうしている間に、大路にはぞくぞくと兵士たちが集まり始めている。

「まずいな。見咎められる前に退散するか」

伏せた白桃の背に跨り、そのまま路地を進むように命じる。

しばらく走っていると、背後からこちらを追撃するような気配を感じた。はっとして振り返れば、先

ほどの青年が、走りながらこちらに向かって手を振っている。
「やあ、お嬢ちゃん」
「……なんだ、攫猿は諦めたのか？」
生身の人間が神獣と肩を並べて走行する不思議な光景に首を傾げつつ、春蘭は青年を繁々と見詰めた。年齢は仲望よりも若いだろう。二十歳前後といったところか。
目鼻立ちのはっきりとした青年は、愛嬌のある笑みを浮かべてはいるが、その瞳は笑っているようには見えない。そのせいもあり、どこか酷薄そうな印象を受けた。
先ほどはわからなかったが、後ろ髪を結ぶ布の色が月光の下でもわかるほど禍々しい赤い色をしている。珍しい色だ。
「余計な奴らが来ちゃったからな。ところで、それ便利そう。いいな」
「白桃を〝それ〟呼ばわりするな」
「ごめんごめん。でも、楽そう。こっちは自分で走ってる分、体力を使うんだよな」
気軽に振舞うが、青年の目の奥には明らかな警戒の色が見て取れた。春蘭が青年を警戒する以上に、彼はこちらを怪しんでいる。だからこそ、わざわざ追ってきたのだろう。
白桃が〝どうする？〟と訊ねるように、春蘭をちらりと振り返った。春蘭が命じれば、白桃は躊躇うことなく青年に躍り掛かるだろう。だが、攫猿との大立ち回りから考えるに、青年はかなりの手練。白桃が勝てるかどうか。
一瞬の逡巡の末、春蘭は小さく首を振った。まずは、相手がこちらに害をなす者かどうか、見極める方が先だ。
「助けてもらった礼は言うが、白桃はやらぬぞ」
「わかってるさ。俺だって、そんな大きな虎をくれるって言われても困る。餌にされちまいそうだ」
仲望とは違った意味で、よくわからない相手だ。

そもそも、なぜ一人で攫猿を追っていたのか。そして、先ほどの技はなにか。止めどなく湧いてくる疑問を、春蘭はぐっと呑み込んだ。

それをこの場で、得体の知れない相手に訊ねるのはあまりにも不用心だ。

「そういえば、お嬢ちゃんの名前はなんていうんだ？」

「私は春蘭。こっちは白桃だ」

「ふぅん。あ、俺は郭洪釆。よろしくな」

「……よろしくする機会があるとは思えぬが」

おそらく、洪釆とはここで別れたが最後、二度と顔を合わせることはないだろう。攫猿に懲りた春蘭は、夜間の外出は控えるつもりだった。これでは玉翠に偉そうなことは言えないな、と苦笑する。

「ま、縁があったら会うだろ」

「ふむ。それもそうだな」

「――ところで、春蘭はなぜ攫猿に追われていたんだ？」

わずかに、洪釆の声が低くなった。これは答え次第では、簡単には帰してもらえそうにないようだ。だが、元より攫猿を追っていたらしい洪釆と違い、春蘭が追われたのはただの偶然。しいて攫猿との縁をあげるならば、世話になっている屋敷の主人がかかわっているくらいだろうか。

「たまたまだ」

「たまたま、虎に乗って散歩してたら攫猿と鉢合わせしたって？」

案の定、洪釆は疑いの眼差しを春蘭に向けた。だが、事実なのだからしようがない。

「散歩していたわけではない。知り合いが〝大人の野暮用〟で外出するというから、その真偽を確かめたかっただけだ」

「……お嬢ちゃん。いや、春蘭。大人がそう言った時は、後をつけるなんて野暮なことはしない方がいいぜ」

「うむ。確かに大人の野暮用だったため、そのまま

帰るところだったのだ。攫猿と会ったのは、運が悪かった」

洪采の勘違いをこれ幸いと、春蘭は同意するように頷いた。だが、やはりそれだけでは解放してくれないらしい。並走しながらも、洪采の尋問はなかなか終わらない。ここまで白桃についてくるなど、恐るべき脚力である。

「それは春蘭のものか？」

「大恩のある方から譲り受けたものだ。私のものではあるが、厳密に言えばちと違うな」

「うーむ。聞けば聞くほど、お嬢ちゃんがわかんなくなるんだが……まあ、女は多少秘密があった方が魅力的だけどさ」

「そうなのか」

「……深くかかわったら面倒な気がしてきた」

「奇遇だな。私もそう思っていたところだ」

にっこりと微笑めば、洪采も多少引き攣ったものではあるが笑みを返してきた。

「さて、攫猿も撒けたことだ。私たちは屋根に戻る。また会うかはわからぬが達者でな」

洪采の返答を待たずに、春蘭を乗せた白桃は屋根へと飛び上がる。さすがに洪采が追って来る気配はないようだ。

「――戻るぞ」

うぉん、と白桃は吼え、鄭家がある方角へ駆け出した。その背に揺られながら、春蘭は自分たちを襲ってきた攫猿について考える。

山堺に住む攫猿が、女人を攫う以外の目的で都にいるのがどうしても解せない。

「……私には関係のないこと、なのだがな」

まるで自分に言い聞かせるように呟いた春蘭は、白桃の背に顔を押しつけた。自身に課せられたのは、〝真名〟を取り戻すこと。そして、守り神として邑に戻る――それ以外のものに気を取られる余裕などない。その繰り返しが脳裏を過る。

それなのにこの胸に溜まるもやもやは、いったい

なんなのだろうか。

「……やはり、人とは不便なものだな」

妖一つ追い払うことができない。

呟き、春蘭は自嘲するように笑った。



――猩猩緋。

それは血のように鮮やかな深紅を表す言葉。

各地で貴族や金持ちを襲い、貧乏人に施す酔狂な集団が巻くのは、揃いの猩猩緋色の布だった。彼らが自分たちを〝猩猩〟と、異形のものになぞらえるのはなぜなのか。

いくら推測しても意味のないことだが、その謎こそが知りたいと、人々は寄ると触ると噂した。元来、人々は噂好きであり、その口を閉じさせることは困難を極める。

いくら宮中の官吏たちが頭を悩ませようと、こればかりは取り締まることは不可能だろう。

「また、猩猩緋がご活躍らしいぞ」

「聞いたよ。東都で悪さをしていた高官を一掃したそうじゃないか」

一人が口にすれば、また一人がそれに答える。噂話は止まるところを知らない。

露店の軒先で、足を止めた者たちが口々に得たばかりの情報を交換し合う。時折、周囲に目を配るのは巡回中の役人を気にしてのことだろう。

「悪巧みに与していた官吏たちは、みな邑から追い出されたという話だ」

「そんなことして、皇帝様が黙っているかね？　ここぞとばかりに、またご自慢の禁軍を出すんじゃないか？」

「いいや、取り巻きの奴らが耳には入れんのさ。なんたって、部下の失態で自分たちの首が簡単に飛ぶんだからな。そりゃ、隠したくもなるさ」

男たちの中で、もっとも年嵩の男が首に手を当て

て見せた。それに同意するように、誰もが深く頷く。
「猩猩緋が出て解放される邑が、最近増えたらしいな」
「その分、違う邑に重税が課せられるのさ。朝廷の奴らは、そういうことばかり素早いからな」
「このままじゃ、華国には皇帝陛下と官吏様以外いなくなっちまうんじゃねぇか？」
「あははは、そりゃいい。俺たちも猩猩緋の仲間に入れてもらおうや」
人を食ったような笑い声が響き渡る。それらの声の間をすり抜けるようにして、一つの影が足音も立てずに移動する。
やり取りされる会話の数々を、一言も漏らさずに耳に入れながら、やがて影は薄暗い路地裏へと消えた。
「青に交わる朱」
突き当たりの壁に向かい、男は聞きとり難いほどの小声で呟いた。しばらくして、壁の中から声が返る。
「――その色は？」
「緋であり、我が血の色なり」
がたん、と壁のずれる音がしたかと思うと、微かな隙間が現れた。男は周囲を確認したあと、素早く身を通した。湿気を含んだ黴臭い空気に、思わず顔を顰める。
「遅かったですね。待ちくたびれましたよ」
細い通路に立つのは一人の人物。手にした燭台の灯りが照らす顔は、鬼を象った舞楽面で隠されている。その素顔や年齢を知る者は誰もいない。声も中性的で、男とも女とも取れるため性別不明だった。
「検問が厳しい。やはり、こちらの動きに気付いてるようだな。他の奴らも行動を制限されるとぼやいてたぜ」
「面倒ですね」
鬼面の人物は、男を案内するように奥へと歩き出す。通路はやがて螺旋階段となり上に続いていた。

そのまま階段を上ると、やがて開けた場所へと出る。
窓はなく、そのせいで入口で感じた黴の臭いが一層強く辺りに漂っていた。ここは猩猩緋が隠れ家として使用している場所である。部屋の隅には幾つかの大きな布が畳まれており、簡易の宿泊所だということが知れた。
鬼面の人物は燭台を壁の窪みに置き、唯一の調度品である椅子に座った。男は壁にもたれかかりながら口を開く。
「兎天殿、攫猿の行方は？」
「途中で、追手が撒かれました」
兎天と呼ばれた鬼面は、残念そうに首を振った。
男――郭洪釆は溜息をつき、自分が得た情報を告げる。
「こちらも凶報がある。禁軍の動きが速い。やっぱり、こっちを意識してるみたいだな」
「今回はこちらも急いでいましたからね。隠密の行動が徹底できなくてもしかたありません」
「それと今一つ。禁軍の右飛龍将軍は、昔の同僚まで引っ張り出したぞ」
「……もしかして、鄭仲望ですか？」
洪釆は頷いた。四年前までは、禁軍において将来を有望視されていた者の一人だ。
「弓の名手だったらしいな。どうあっても、先を越されたくないらしい」
「それは、こちらも同様です」
「奴らの目を掻い潜って攫猿の捕獲か。まったく、紅主もむりな注文をなさる」
紅主とは、猩猩緋を束ねる総大将の呼び名だ。彼が猩猩緋の基盤を作り、ここまで拡大した。紅主の命令は絶対。死ねと命じられたら、誰もが躊躇いもせず命を捧げる。それほどの統率力を持つ人物である。
「あの方の命令ですよ」
咎めるような口調に、洪釆は肩を竦めた。華安を騒がせている攫猿と、猩猩緋がかかわっていると知

る者は一握りの者たちだけだ。洪采自身、なぜ攫猿を捕らえるのか、詳しい理由までは知らされていない。

「やはり、殺しては駄目か？」

「紅主の言葉は絶対です」

「と言われてもね。実際、手合わせしてみたが、あれは殺すならばともかく、生きたまま捕らえるのは相当むずかしいぜ」

「あなたは気術士でしょう。そのために、別の仕事をしていたところを、わざわざ華安に呼んだのですから」

簡単に言う、と洪采は苦笑した。

確かに猩猩緋の中でも、自分は一、二を争う実力の持ち主だ。これまでに大抵の使命は失敗することなくこなしてきた。しかし、攫猿をたった一人で、しかも生きたまま捕らえるとなると話は別だ。さらに今回は邪魔者もいる。

「ならばせめて、禁軍と龍乎の奴らをどうにかしてくれ。昨夜もいいところで邪魔しやがって。いくら攫猿を捕らえたところで、あいつらに見つかったら置いて逃げるしかないぞ」

「……わかりました。両方はむりでも、どちらかは手を打ちましょう」

「そうしてくれると助かる」

特に精鋭揃いの禁軍は、逃げるだけでも骨が折れる。一対一ならばまだしも、複数を相手に無傷で逃げ切れる自信もなかった。

「他になにか情報はありますか？」

「んー……そういや、攫猿を追ってる時に妙なお嬢ちゃんに会ったな」

わずかに首を傾げた兎天に対し、洪采は奇妙な表情を浮かべた。

「十歳、いや実際の年齢はもうちょっと上だろうな。将来は美人になること間違いなしだが……さて、どう説明すればいいか」

「そもそも、攫猿を追ったのは夜ですよね？　なぜ

年端も行かぬ少女と会うんですか」
「会ったんだからしかたないだろ。普通の虎より一回りほど大きい虎に乗って、攫猿に追われてたところを助けた」
「虎ですか……？」
　兎天が困惑するとは珍しいことだった。いつも淡々とした口調で紅主の命令を告げる姿は、滅多なことでは動じはしない。
「本人曰く貰い物らしいが……そんな簡単に貰えるものじゃないだろ。それに、白桃と呼ばれていた虎は、あの子によく懐いていた。まるで主従関係みたいにな」
「……そんな虎がいるとは思えませんね」
「だが、実際、この目で見ちまったんだからしかたねぇ。あとは、お嬢ちゃん自身もおかしな人物だった。子供らしくない……って、まあ虎に乗ってる時点でただの子供じゃないが、成人した人間を相手にしてるみたいだったな。いやあ、思い出せば思い出すほど異常なお嬢ちゃんだった」
　しみじみとした口調で告げれば、話を聞いていた兎天の声音が低いものに変わった。心なしか兎天の全身から殺気が滲んでいるように感じられる。
「まさか、顔を見られてなんの対処もせずに見逃したというんですか？」
「ああ。さすがに禁軍に追われながら、巨大な虎と殺し合う余裕はない。あっちにも、警戒されてたみたいだしな。油断すれば、ぱくりとやられちまうとこだったんだよ」
「そのような得体の知れない相手に会って、笑っていられるのはあなたくらいのものでしょうね」
「そうかい？　世の中、不思議なことだらけだと思うけどな」
　悪びれた風もなく告げれば、緊張していた空気がわずかに緩んだ。
「まったく。そこからあなたの素性が割れたら、どうするつもりですか？　気術士たるあなたは猩猩緋

の大事な戦力なのですから、なにかあるようでは困ります」
「子供の言うことを誰が信じる？」
「それでも、警戒すべきです」
重ねて告げられれば、洪采に反論することはできない。紅主ほどではないが、組織の二番手である兎天には逆らい辛いものがあった。
「……わかったよ。見つけ次第、なんとかする」
「もう少し、自分の置かれている立場を自覚してください」
「はいはい」
自覚は充分あるつもりだ。だからこそ、どんな危険な任務にも異を唱えることなく従い、また、確実に成功させてきた。
今回も、攫猿を生け捕りにしろというならばしてみせる。顔を見られてしまったことが問題ならば、あの少女を消し去るまでだ。
「なあ、梁華は元気か？」
「……ええ」
「二年も会ってない。たまには顔を見に行かせてくれたっていいだろ」
「そうですね。紅主にお願いしておきましょう」
頼んだ、と告げ洪采は大きな欠伸をした。都を走り回った挙句ろくに寝ていないのだ、疲れ果てていた。
眠気を自覚した途端、体がぐっと重くなったように感じた。やはり虎と同じ速度での走行は無謀だったらしい。
「少し寝る」
「どうぞ。攫猿は人を警戒してか、夜半にしか行動しませんからね。今のうちに充分な睡眠をとっておいてください」
適当に厚手の布を手に取り全身を覆うと、洪采はごろりと横になった。床の冷たさに身震いしそうになるが、猩猩緋に入る前の生活を思えば屋根があるだけ上等だ。

瞼を閉じれば、睡魔はすぐに訪れる。いつでもどこでも眠れるのは、この生活に入って身につけた一種の特技だ。休める時に休む。そうしなければ、猩猩緋の辛い任務をこなすことなどできなかった。いくら実力があったところで、ここまではこられなかったはずだ。

洪采は意識の端で、兎天の気配が消えたことに気付いた。おそらく、奴には奴の任務があるのだろう。紅主が猩猩緋を興した時から、兎天はその傍に影の如くつき従っていたと聞く。

神出鬼没であり、誰よりも情報に早い。兎天が猩猩緋にいる限り、情報戦で朝廷に遅れを取ることはないと信じられていた。

――今回の任務が無事に終わったら、梁華に会いに行こう。

洪采は薄れる意識の中で決意した。

高価なものでなくていい。ちょっとした装飾品を贈って、長く会いに行けなかったことを詫びよう。きっと、彼女は怒りながらも笑って許してくれるはず。

――梁華。

言葉にならぬ呟きに唇を動かし、洪采は眠りに身を委ねたのだった。

困ったことになった、と春蘭はじくじくと痛む両膝を眺めた。

攫猿に追われた日から一日が経った。

そろそろ本格的に食い扶持を探しに行かなければ、啓璋に文句を言われてしまうだろう。なによりも、世話になる対価はきちんと払うと宣言してしまった手前、やはりむりでしたとは言い難い。

楊秀は勝手に誤解してくれたが、啓璋と友寧は別だった。仲望の〝春蘭は客である〟という言葉を守り、最低限の言葉はきちんと交わすし、春蘭の食事も彼らと同じものが準備されている。しかし、当

初から変わらず、徹底的に春蘭の存在を拒否する姿勢は、むしろ感嘆に値するほどだ。

よほど嫌われているのだろう、と春蘭は勝手に納得していた。

朝餉を終えた春蘭は街に繰り出し、自分でも日銭を稼げる職はないかと探しはじめる。しかし、占師であること以外にさして特技を持たない春蘭に、十くらいという外見から仕事を任せてもよいという奇特な者は見つからなかった。

鄭家の畑仕事を手伝う以外はないだろうか、と道端で思い悩んでいると、いきなり背中を押された。そして春蘭は、地面に顔面と膝を強打する悲劇に見舞われたのだった。

突き飛ばした若い男は、「餓鬼がぶらぶら歩いてんじゃねぇ！」と怒鳴りつけるとさっさと歩き去ってしまう。春蘭は茫然としていたせいもあり、文句の一つも言えずに、その背を見送るしかなかった。

よろよろと立ち上がれば、玉翠（ぎょくすい）たちに貰った襦裙（じゅくん）は土に塗れ、痛みを訴える膝には血が滲んでいた。また突き飛ばされては堪らないと、必死に人気のない路地に移動したところで、春蘭は歩けなくなってしまったのだった。

「困ったのう……」

血は止まったが痛みは引いてくれない。むしろ、一刻一刻と痛さは増すばかりだ。白桃を呼ぶことができればいいのだが、さすがに日中の往来を大虎が闊歩（かっぽ）していたら騒ぎになってしまう。

怪我をした時、人はどうするのだろうか。

人であった時の記憶はおぼろげだ。守り神であった際、怪我を負った人々は、傷口をなにやら細長い布で縛っていた気がする。

しかし、それはどこに行けば手に入るのかわからない。また、春蘭はそれを買う金もなければ、華国の銭自体、目にしたことがなかった。

国が変われば使用する銭も変わってくる。大抵は、その国の銭だとわかるような文様が表面にあしらわ

れているのだ。

じっとしていればある程度は痛みも引くだろうと、春蘭は路地の隅に蹲った。長い間、痛みとは無縁の時を送っていたため、どう対処していいかわからない。

擦り傷に効く薬を患部に塗布する、という知識はあるが、そもそも動けないのではどうしようもない。人に頼んで啓璋たちを呼んでもらうにも、道を行き交う人々は忙しそうで、とてもそんなことを頼める雰囲気ではなかった。

かといって、それ以外の唯一の知り合いである姉妹の家は、鄭家を挟んだ逆側だ。つまり、鄭家に戻るよりも遠いのである。

「額もひりひりする。掌も痛い……今日は屋敷で大人しくしているべきであったか」

一日の吉凶を占ってみたところ、今日は新しい出会いがあるという卦が出ていた。しかし、それ以外の卦はあまりよいものではなかったため、初めは外出を止めようかと考えていたのだ。

だが、食い扶持を稼がねばならないということ、新しい出会いが鄭玄楽を見つけるきっかけとなるかもしれないことを考え、不利を承知で外出に踏み切ったのだった。

――その結果が怪我だ。

やれやれ、と春蘭は溜息をついた。攫猿に追われて以来、どうもよいことがない。鄭家に滞在して数日が経つが、鄭玄楽に関する情報は一向に集まらず、また本人が姿を現す気配もない。

ならばと、幾度占ってみても、鄭家に留まることが最善だという結果が変わることはない。時だけが過ぎていく中、春蘭は徐々に焦りを感じ始めていた。

「……しかたない。行くか」

こんなところでいつまでも座っている暇はない。春蘭は痛みを堪えて立ち上がろうとした。

骨が折れているわけではないのだから、痛みを我慢すれば歩けるはずだと自分に言い聞かせる。震え

る足に顔を顰めつつ、春蘭は傷のことをあまり考えないように歩き出した。

しかし、しばらく進んだところで、足許が徐々に覚束なくなる。痛みを訴えるばかりで、なかなか思うように動いてくれない足に困惑していると、頭上から声が聞こえた。

「――どうしたの？」

顔を上げれば、一人の青年が心配するように春蘭を見下ろしていた。

「怪我をしたのかい？」

「……転んだのだ」

ちょっとごめんね、と青年は言い、春蘭の下衣を捲くった。

露になった膝は、先ほどよりも傷口が腫れているように思えた。流れ出た血が、春蘭の膝から下を真っ赤に染めている。

「うわっ、これは痛そうだ」

「痛いぞ」

「ちょっと我慢してね」

「なにを――」

いきなり春蘭を横抱きにした青年は、迷いのない足取りで雑踏の中を進む。

途中、意味ありげな視線を向ける者もいたが、春蘭が怪我人だと知ると興味を失って視線を逸らす者が大半だった。

青年の腕に抱かれながら、春蘭は内心で困惑する。先日、花家の姉妹が襲われたように、この青年が人攫いである可能性も捨て切れないが、野卑な雰囲気は一切感じられない。

そもそも青年の袍を見れば、一目で上等な布が使われていることが知れた。おそらく、裕福な家の者なのだろう。

――では、彼は何者なのか？

年齢は仲望と同じか、少し若いくらいだろう。容貌に目立った特徴はなく、誰が聞いても「穏やかな雰囲気の青年」と表現しそうである。

「もう少しだから、がんばってね」
「うむ……」
せめてどこへ連れて行くのか説明してほしいところだが、痛みで口を開くのが億劫になっていた春蘭は黙って頷くに止めた。
連れて来られたのは、高級茶葉を扱っている茶房の奥にある部屋だった。どうやら、青年はそこで暮らしているらしい。
簡素ながらも品のよい室内は、住む者の人柄を表すかのように落ち着いた雰囲気を漂わせていた。
卓の傍らにある椅子に春蘭を座らせると、青年は「ちょっと待っててね」と言い、房を出て行ってしまう。
しばらくすると、水の入った桶と木で作られた小箱を持って戻ってきた。春蘭の足許に跪いた青年は、まず水を含ませた布で傷口を丁寧に洗い流す。
「沁みるかい？」
「痛い……が、よくわからん」
「麻痺しちゃってるのかな」
「じんじんするぞ」
「そりゃ、これだけ派手に傷を作ればね」
苦笑しながらも、青年は手を休めない。血が止まったことを確認すると、薄手の布に薬を擦りつけ患部を覆うように被せた。そして、細く切られた布を巻いて剝がれないように固定する。
「手は大丈夫？」
「うむ。こちらは擦り傷だ」
「じゃあ、水で洗うだけにしようか」
膝ほどではないがひりひりと痛みを訴える掌を、水が張られた桶に入れる。すると、予想していたよりも激しい痛みが体を突き抜けた。思わず手を引っ込めそうになり、春蘭はそれをぐっと堪える。
傷口を丁寧に洗って、桶から手を出せばそれを待っていた青年が布で水を拭き取ってくれた。
「額の傷も拭くよ？」
「うむ」

「ちょっと、たんこぶになってるかな……」
「ぐっ、お、押すな！　痛い！」
切れ切れに訴えれば、青年は慌てたように患部から布を持つ手を放した。
「ごめんね。強く押しすぎちゃったみたいだ」
「痛かった……」
涙目になりながら額を押さえていると、青年はなにかを思い出したように、房の隅にある棚から小さな袋を取り出した。
「はい、あーんして」
口を開ければ、小さな塊がひょいと放り込まれた。固いそれをころころと転がせば、ほんのりとした甘さが口内に広がる。初めて口にする食べ物だ。
「飴だよ。こないだ知り合いに貰ったんだけど、私は甘いものが苦手でね。よかったらあげるよ」
「いや……手当をしてもらった上、ものまで貰うのは気が引けるのだが」
「子供は遠慮しなくていいんだよ」
そう言われてしまえば、強く断るのも気が引けた。
「ありがとう」と礼を言い、飴の入った小袋を受け取る。
「私は李春蘭。ぬしは、名をなんというのだ？」
「呂翰栄だよ」
「この店の者なのか？」
「知り合いの家でね。今は故あってお世話になっているんだ」
なにか事情があるのだろう、と春蘭はその先を聞かずに止めた。
「先ほどは本当に助かった。改めて礼を言う」
「そんなに畏まらなくてもいいのに」
だが、翰栄が春蘭を見つけてくれなければ、今もどこかの路地で膝を抱え蹲っていたのだ。それを思えば、礼を言うのは当然である。
手当の終わった両足を眺めた春蘭は、試しにそっと片足を床に下ろしてみた。痛みはあるが歩けないほどではない。

「うむ。これで帰れる」
「よかったら送って行こうか？」
翰栄の申し出に、春蘭は首を横に振った。手当してもらった上、送ってもらうわけにはいかない。
「平気だ」
「でも、また途中で歩けなくなるかもしれないよ？」
「休みながら行くし、家もそう遠いわけではない。なんの礼もできぬ……と、そうだ。ぬしは、なにか占ってほしいことはないか？」
「占い？」
礼をする方法があることに気付いた春蘭は、嬉々として頷いた。恩を一方的に受けたままというのは、春蘭にとって居心地が悪いことだった。
「一日の吉凶から、恋の行方、将来まで大抵のことは占えるぞ」
「そうだなぁ。じゃあ、将来のことでも占ってもらおうかな」
まるで、子供の遊びに付き合うような軽い返答に春蘭はむっとしながらも、相手は恩人なのだからと反論を呑み込んだ。せめてもう少し背があれば、面倒な扱いを受けずに済むのだが。
「では、桶に新しい水を汲んできてはくれぬか」
「ちょっと待っててね」
しばらくして戻ってきた翰栄から桶を受け取り、それを卓の上に置いた。椅子の上に立ち上がった春蘭は、懐から取り出した盤を水に浮かべる。
「これはもしかして、水神盤かい？」
「うむ」
水神盤は、物事の吉凶を占う道具である。
水に強い木を材料とし、本体の中央に〝玉〟と呼ばれる石を嵌め込む。ものによっては装飾が施された水神盤もあるが、春蘭のものは表面に彫られた文様こそ緻密だが、それ以外の部分は簡素な作りとなっていた。
「実物を目にするのは初めてだよ」

「それほど珍しいものでもないと思うが。これほどの都だ、店を出している占師くらいいるのではないか？」

人として生きていた頃にも、このような大きな都を見たことはなかった。いったいどれほどの人が暮らしているかは不明だが、占師の需要くらいはあるだろう。

「占師はいるよ。ただ、その大半は占筮で、水神盤を使う占師は聞いたことがないね」

聞き覚えのない言葉に、春蘭は首を傾げた。

「知らぬな」

「水神盤を持っているのに、占筮は知らないのかい？　竹を割って作られた細い棒を何本も使って行う占い方法だよ。自然の災害を占うのに優れていることから、有能な占師は国のお抱えとなるくらいなんだ」

「個人の吉凶も占えるのか？」

「災害や天候不順に商売を左右されそうな人たちには、かなり重宝されているよ。ただ、水神盤のように個々の未来を詳細に占うことは難しいだろうね」

「ならば、なぜこれを使わない？」

水神盤は、それを水面に浮かべることによって、表に彫られた複雑な溝を水が浸食し、浮かび上がった文様、八つの角がそれぞれ指し示す方角によって吉凶を占うことができる。

しかし同時に、複雑さ故に習得は難しいとされていた。春蘭自身、占師である母親に物心ついた時から手解きを受け、なんとかものにすることができたくらいだ。

故に、占師はどの邑でも重宝された。確かな占いにより、邑を守ることもあったほどだ。

春蘭の主張に、翰栄は苦笑しながら答える。

「後継者が育たなかったせいで、徐々に廃れてしまったんだと書物で読んだよ。今から百年ほど前には、すでに知識は失われてしまったと書かれていたんだが……実際は、編者の知らぬところで細々と続いて

いたのかな？」

「そうだったのか」

翰栄は興味深げに水神盤を見詰める。常に共にあったものだけに、今はその遣い手がいないというのはいささか衝撃的なものであった。

「では、そろそろ占うぞ」

春蘭が手を翳せば、水神盤が小刻みに回転を始める。やがて、それがぴたりと静止した。

「ふむ……面妖な文様だな」

溝を伝い、浮き出た文様に春蘭は首を傾げた。なぜか、いまいちすっきりとしない感がある。とんとん、と玉の部分を指で押せば、水神盤が水中に没した。

やはり、と春蘭は頷く。どうやら〝呂翰栄〟という名は偽名らしい。偽の名では、水神盤は正しい結果を導きだしてくれない。だが、ここで「ぬしの名は偽名だな？」と口にするほど、春蘭は物知らずではなかった。

名を隠すからには、なんらかの事情があるのだろう、と結論付けた春蘭は、水神盤を取り出し水気を切ったあと、もう一度水に浮かべた。

今度は〝呂翰栄〟ではなく、〝目の前の青年〟として占う。名がない分、占いの結果は多少、曖昧になるが、それでも占えないわけではない。

しかし、今度もまた浮き出た文様に春蘭は首を傾げた。

「珍しい結果だな。ぬしの将来は、まだ定まっていないようだ」

「……どういうことだい？」

「複数の者がぬしの未来にかかわっているようだ。その者たちがどのような道を選び取るかで、ぬしの未来もまた変わる」

占師には掟がある。

占いの結果がどのようなものであろうとも、それを伝えなければならない。たとえ、相手の望んだ結果でなくても、だ。



だから、春蘭は言葉を飾らずに告げる。
「ぬしにできるのは……ただ座して待つことのみだ。それ以外に、できることはなにもない」
「つまり、私がどう足掻こうと、未来は複数の者たちの選択によって決まるということかい？」
「そうなるな。未来が定まらぬ以上、それが吉か凶か、判断することはできぬ……すまぬな。ずいぶん曖昧な結果になってしまった」
「いや、充分だよ。ありがとう」
「そうか。しかし、珍しい卦だ。ここまで他者の未来と深くかかわっているものは初めてだ」
本当の名を教えてくれれば、もう少し詳しく占うことも可能なのだが、さすがにそこまで聞く気にはなれない。
相手に占ってほしいと言われたわけでなく、自分から申し出たことだけに込み入った話をするつもりはなかった。
「あ、よいことを思いついた。春蘭、私の奥方になってくれないかい？」
ちょっと近所まで付き合ってくれないかい、とでもいうように告げられた言葉に、春蘭は思わず自分の耳を疑ってしまった。
どこをどうすれば、そんな発想に辿り着くのだろうか。
「済まぬが、私はぬしに嫁ぐつもりはないぞ」
「もしかして、許嫁（いいなずけ）がいるのかい？」
「そういった存在はないが……」
「なら問題はないね」
「いや、大有りだと思うぞ。そもそも、どこからそんな結論に至ったのだ？」
複雑な事情を抱えながらも、お人好しな青年だと思っていたのだが、どうやらそれだけでは終わらないらしい。にこにこと満面の笑みを浮かべながら、翰栄は口を開いた。
「占師としての君を傍に置きたい、って思ったんだよ」

「それならば、私の客になればよいだけではないか？」
「だめだよ。そんな薄っぺらな関係じゃ、逃げられてしまうかもしれないじゃないか。だから、婚姻して妻という枷を嵌めてしまおうと思って。子供が生まれれば、裏切りなんてできなくなるしね」
　雰囲気は穏やかだが、語られた内容はなかなか物騒である。実は、自分はとても困った状況にあるのだろうか、と春蘭は珍しく判断に迷った。
「もしかしなくとも、私はこのまま監禁されてしまうのだろうか？」
「え、そんな酷いことしないよ。春蘭が嫌ならば無理強いするつもりはないし」
「では、断る。私は誰にも嫁ぐ気はない」
　きっぱりと告げるが、翰栄はそれで気分を害した様子でもなかった。あいかわらず、にこにことした笑みを崩さない。
「それは残念だね。じゃあ、気が向いたらいつでもおいで。大歓迎だよ」
「……気が向くようであればな」
　二度と会わないだろうとは思うが、いくら有能な占師であっても、未来の細部まで見通すことはできない。
　縁が続くようであれば、この不思議な青年ともまた顔を合わせるだろう、と春蘭は結論付けた。
「さて、私はそろそろ帰るとしよう。世話になったな」
「本当に送って行かなくても平気かい？」
「大丈夫だ」
　なおも心配してくる翰栄を、春蘭は先ほどと同様にきっぱりとした口調で断った。
「では、また縁があれば会おう」
　店頭まで見送ってくれた翰栄に言葉をかけ、春蘭は歩き出した。本当は一歩踏み出すごとに鈍い痛みを感じるが、こればかりは我慢するしかないと自分に言い聞かせる。

たまに休憩を挟みながら黙々と歩いていると、春蘭は不意に奇妙な視線を感じた。一度立ち止まって周囲を見回すが、これといって気になる人物はいない。

気のせいかと首を傾げまた歩き出せば、やはり視線を感じる。

知らぬ振りで歩き続けた春蘭は、手頃な路地を見つけ、そこに素早く身を潜めた。少しして、こちらへ向かって駆けてくる足音が響く。

路地に入って来る瞬間を狙って、春蘭もその人物の前に飛び出した。

「何者だ！」

「えっ、ちょ、危な！」

春蘭を避けるまではよかったが、その人物は勢いを殺し切れずに塀へと顔をぶつけた。派手な音を立てて地面に沈み、額を押さえながら春蘭を恨みがましい目で睨み上げる。

「……命の恩人に向かって、これはないだろ」

「人の後をつけるような不届き者に、手加減する必要などなかろう？」

「そうだけどー」

文句を零しながら立ち上がった洪采は、服についた土を払いながら春蘭を見下ろした。

「いつ声をかけようか迷っていただけなのに、人を不審者みたいな言い方しないでほしいなぁ」

「声をかけられぬほど内気には見えぬが」

「あー、それはごもっとも。ところで、あの真っ白な虎は？」

「白桃ならば、今はいないぞ」

玉に入っている状態であるが、それを馬鹿正直に告げるわけにはいかない。

「それは好都合」と笑って、洪采は春蘭の脇の下に両手を差し込むと、そのままひょいと持ち上げた。空中でぶらぶらと足が揺れる。

「とりあえず、みーつけた」

「……なぜ、持ち上げる」

「逃げられないように？」
知らぬ振りをして、途中で撒けばよかったと後悔しても遅かった。

卓に並べられた料理と、目の前の青年を見比べながら春蘭は困惑していた。
洪采に抱き上げられたまま連れて来られたのは、大路に面した庶民向けの料理店だった。お昼時はとうに過ぎているにもかかわらず店内は混雑している。無造作に並べられた卓に慣れた様子で座った洪采は、春蘭に聞きもせず勝手に注文を始めた。
戸惑う春蘭を余所に並べられた料理は、一人前には多すぎる量だった。問うように視線を向ければ、満面の笑みが返された。
「口止め料ってことで。好きなだけ食っていいぞ」
「……意味がわからん」
「こないだのこと、黙っててほしいんだよ。他に知られるとさ、春蘭をそいつごと口封ししなきゃならないし。面倒なんだよな」
「ふむ。毒入りか？」
「まさか！　味は保証するぞ」
そう言いながら、洪采は並べられた料理に手をつけ始める。どうやら、今この場で春蘭を殺すつもりはないようだが、〝口封じ〟などと、物騒な言葉を口にする相手なので、用心するに越したことはないだろう。
それに、この男は自分を警戒していたのではなかったのか。街中でたまたま見掛けたからといって、こんな親しげに接してくるだろうか。なにやら裏がありそうだな、と春蘭は相手を窺った。
「なぜ、わざわざ口止めをしに来た。ぬしの腕ならば、私を殺す方が楽ではないか？」
周囲は喧騒に包まれているため、どんな会話をしていたとしても盗み聞きされる心配はない。もっとも、連れ立って食事に来た兄妹にしか見えない二人

組に、あえて注意を払う者などいるとは思えないが。
「え、殺していいのか？」
「いや、それは困る。だが、そこまでして他に漏らされたくないのならば、先ほどぬしが言ったように口を封じた方が楽だと思ったのだ」
　小麦粉の生地に野菜と肉を甘辛く炒めたものを挟むと、洪采はそれに大口を開けて齧りついた。そして、それを咀嚼しながら口を開く。
「できるだけ殺しはしたくないんだよ。犠牲は最小限に、っていうのが俺の方針なの」
「よい心掛けだな」
「納得したら、食べな。その肉饅頭は絶品だぞ」
「では、口止め料として頂くが、そんな口約束でよいのか？」
　春蘭は勧められるまま、大きな肉饅頭に齧りついた。生地がもっちりと厚めなので、なかなか餡に辿り着かない。一生懸命にあごを動かしていると、汁物に手を伸ばした洪采が答えた。
「ほんとは、口止めなんてしなくてもお嬢ちゃんは喋んないと思うんだけど……まあ、これは念のためかな？」
「む。まだ餡に辿り着かぬぞ」
「……割って食べればいいだろ」
「おお、そうか。で、どうして私が誰にも話さぬと思ったのだ？」
　熱々の皮に苦戦しつつ、肉饅頭を二つに割った春蘭は片方に息を吹き掛けながら訊ねた。
「そっちにも事情がありそうだから、というのが一つ。二つ目は、内緒で外出した様子だったから、だな。家の者に知られたくないのだろう、と推測したんだよ」
「のう洪采。これ、半分食べてくれ。一つで腹がくちくなりそうだ」
「……話、ちゃんと聞いてるか？」
「聞いておるぞ。実はけっこう腹が減っておってな。まあ、こちらにも事情がある。あの晩のことを誰に

も話せないのはぬしの推察通りだ」
　しばらく空腹を満たしたあと、春蘭はふとあることを思い出した。
「ところで、私もぬしには訊きたいことがあったのだ。あの時、あれを相手にするぬしの体が光っていた。どういう術なのだ？」
「ん？　気術士を知らねぇの？」
「きじゅつし？」
「ここじゃ餓鬼でも知ってるが……余所から来たのか？」
「うむ。華安には最近やってきたばかりだ」
　もはや何度目になるかわからない言い訳を口にして、春蘭は頷いて見せた。
「田舎だったら知らなくても当然か。いいぜ、教えてやるよ。ただし、これを食い終わったらな」
　確かに目の前に湯気を立てている料理が並んでいれば、春蘭の意識もそれにいきがちである。並べられた料理を食べ尽くしたあと、食後の茶を飲みつつ洪采が口を開いた。
「大地を流れる〝気〟はわかるよな？」
「うむ」
　春蘭が水神盤で占う際、用いるのが〝気〟だ。地脈から漏れる気を操れるかどうかで、占師としての適性が試される。幸い、春蘭には〝気〟を操る才があったため、占師であった母親から手解きを受けることができた。
　さらに、神がまとうのも、同じ〝気〟である。こちらは、神自身が巨大な気の塊であるといっても過言ではない。
「同じ大地からの産物である〝玉〟を受け皿として〝気〟を溜めることができる――これはわかるか？」
「大丈夫だ」
　水神盤の表に嵌めこまれている〝玉〟がそれだ。春蘭が玉に〝気〟を込めることで、水に浮かぶ水神盤が、占いの度に様々な文様を浮かび上がらせるのである。

「じゃあ、その〝玉〟を使用して作られた武具はどうだ？」
「初耳だ」
「あー、じゃそっから説明するか。今から、ええと何十年前だったかな。個々の戦闘能力を上げる研究をしていた奴らが、〝気〟に目を付けたんだよ。んで、試行錯誤の結果、玉を熔かしたものを鉄に混ぜて武具を作ったら、それ自体に〝気〟を溜められることを発見した。しかも、〝気〟をまとっていることで、武具自体の重量が軽減され硬度も威力も増すという、いいこと尽くめ」
「ふむ」
確かに、それは重宝されそうだな、と春蘭も頷いた。
「ただ玉の産出が少ないことから、量産できないのが問題だった。それに、鉄と玉の相性がよくないのか、長持ちし難いという難点もあった。ものにもよるけど、大体五年かそこらで壊れてしまうものが大半だな。そこで、別の奴が考えた。じゃあ、直接玉を人体に埋め込んでしまえばよいのではないか、とな」
玉を人体に埋め込む。あまりにも信じ難い発想に、春蘭は絶句した。それに、洪釆も苦笑する。
「まあ、すべての施術が成功するわけじゃなくて、適性ってのがあるんだけどな」
「つまり、失敗することもあるということか」
春蘭の言葉に、洪釆は同意するように頷いた。
「むしろ成功の確率の方が低いくらいだぜ。武人を多く輩出している名家の男子は大抵、この施術を受けさせられるそうだ。あの皇帝陛下も、施術を受け帝位に就く前は、禁軍にいたらしいって話だ」
「ほう。皇帝は元武官だったのか」
「ああ。しかも、使用したのは〝龍玉〟と呼ばれる玉の中でも希少なもので、通常よりも倍以上の〝気〟を溜めることができるそうだ。おかげで、負けなしだったみたいだな」

「ふむ……だからか」
　納得するように頷いた春蘭に、洪釆は訝しげに眉を顰めた。
「いや、皇帝の所業について色々と耳にしてきたからな。なぜ、暗殺されずにいるのか、と疑問に思っていたのだ。自身が圧倒的な強さを保持しているというならば納得できる。警戒すべきなのは毒殺くらいだろう」
「実はそれも効かない。〝気〟は大抵のものならば解毒してしまうのさ」
　万能だな、と春蘭は頷いた。では、皇帝の寿命が尽きるのを待つか、数で囲み体力の消耗を狙うかしない限り、現状を打破する方法はなさそうだ。もっとも後者は限りなく難しいが。
「つまり、その施術をされた者が〝気術士〟と呼ばれるのだな」
「そういうことだ。軍に入ると〝気術兵〟と呼ばれ、平民の出でも、将軍まで出世できる可能性があるそうだ」
「なるほど」
　では、あの若さで大将位にある楊秀も、気術兵なのだろうか。あとで訊いてみようか、と考えていると洪釆がこちらをじっと見詰めていることに気付いた。
「どうかしたか？」
「いや、質問はもう終わりかと思ってな」
「うむ。謎が解けた」
「そりゃよかった。んじゃ、そろそろお開きにするか。あ、店員さん、さっき頼んでたやつ持ってきてくれるか？」
　洪釆が手を振って店員を呼ぶと、奥の方から二つの包みを抱えた女性がやってきた。それを受け取った洪釆が、片方を春蘭に押しつける。
「さっきの肉饅頭」
「……口止め料にしては多くないか？」
「お嬢ちゃんはちっこいから、全然食べてなかった

だろ。これは気に入ったようだったから、土産に持って帰んな」
「そういうことならば、ありがたく頂くことにしよう。すまぬな」
「なんだったら、家まで送って行ってやろうか。その足、怪我してんだろ？」
痛みを堪えながら歩いていたことに気付かれていたようだ。
「いや、一人でも平気だ。それに、ぬしに住む場所を知られるのはよい気がしない」
「信用ねぇなぁ」
それも当然か、と苦笑した洪采は春蘭の頭を軽く撫でた。
「じゃあな、お嬢ちゃん」
「ああ。また、縁があったらな」
「……そうだな。縁があれば会えるだろ」
一瞬、なにかを堪えるように顔を強張らせた洪采は、手を振りながら人混みに消えて行った。それを見送った春蘭も、あいかわらず痛みを訴える両膝に辟易しながら歩き出す。
尾行の有無を確認しながら鄭家へと辿り着き、ほっと安堵の溜息をついた春蘭は、帰宅を悟られぬようにこっそり裏庭へと移動した。きっちり手入れがされている畑と違い、荒れ地のまま手付かずとなっている場所で、春蘭は白桃を呼び出す。
「――これなのだが、どうだ？」
肉饅頭の入った包みを差し出すと、鼻先で匂いを嗅いでいた白桃が首を横に振った。
「そうか……だめか」
「バウ」
「遅効性の毒であろうな」
「ウウウッ」
春蘭が情報を漏らすとすれば、家族である可能性が高い。ならば、その者たち諸共口を封じてしまおうというところか。
〝――できるだけ殺しはしたくないんだよ。犠牲は

最小限に、っていうのが俺の方針なの〟

洪采の言葉を思い出した春蘭は、やれやれと肩を竦める。

「確かに、殺さないとは言っていないな」

洪采は〝できるだけ〟と言っていた。だからこそ、出された料理も洪采が手をつけてから口にしていたのだ。

春蘭が警戒していると悟られぬよう、唯一、肉饅頭の皮だけ先に食べたが、それはどうせ毒を仕込むならば中の餡だろうと推測したからだ。

もっとも、店頭で倒れられては困るのか、出された料理に毒は入っていなかったが。

「まったく。あんな顔をするくらいならば、そもそも助けなければよかったではないか」

縁があったら、と去り際に告げた時、洪采は苦痛を堪えるような表情を浮かべた。

どうせ口封じのために殺さなければならないのならば、攫猿に襲われた時、見殺しにすればよかったのに。

「……しかたない。これはこっそり捨てさせてもらおう。白桃、地面を掘ってくれ」

毒入りの肉饅頭をそこいらに捨てるわけにもいかず、春蘭は白桃に掘らせた穴に埋めることにした。ここは畑からだいぶ離れているため、腐った肉饅頭から毒が染み出したとしても被害が及ぶことはないだろう。

「まったく。私はただ真名を取り返したいだけなのに、なぜ命を狙われねばならぬのだ。のう、白桃？」

慰めるように、白桃は春蘭の手を舐めた。ひりひりと痛む掌をぎゅっと握り締め、春蘭は深い溜息をつくのだった。



洪采に毒殺されかけた日から二日が経った。

本来ならば外出しているはずが、春蘭は屋敷に軟禁中である。絶対に外に出てはいけない、と啓璋に厳命されているのだ。

原因は春蘭が負った両膝の怪我である。

手当を受けたのだから、もう平気だろうと思っていたのが間違いだった。服を汚して帰ってきた春蘭が気になったのか、啓璋は、転んで怪我でもしたのかと訊いてきた。

それに頷いた春蘭は、手当はしてもらったから平気だという意味を込めて膝を見せたところ、足を動かしたことによって再び出血した患部が、それは酷い有様を呈していたのだ。

また、親切な人物に手当してもらったのだと言うと、あまりの不用心さから、啓璋から説教を受けるはめになった。

善人だと外見で判断してはいけない、見知らぬ人について行ってはいけないと、耳が痛くなるほど繰り返されたのだった。

自分は嫌われていたはずでは、と思わず春蘭は首を捻ったほどだ。

そして、その結果が屋敷での軟禁である。

怪我が治るまで外出を禁じられてしまった春蘭は、屋敷を追い出されてはしかたないので、渋々とそれに従った。

もっとも、膝の痛みは二日経っても引かなかったので、いつものように外出することはできなかったのだが。

「……暇だの。仲望、なにか面白い話はないか？」

鄭家の茶室。

珍しく書物を紐解く仲望の背に寄り掛かりながら、春蘭は幾度目かわからない言葉を口にした。仲望は左足を伸ばし、右足は胡坐を掻くというだらしのない格好をしている。

主にもかかわらず、啓璋から春蘭のお目付役に任命されてしまった仲望は、面倒臭そうな気配を漂わせながら答えた。

「これでも読むか？」

「字が読めぬ」

春蘭に占師としての適性があるとわかってからは、母親の指導の下で、ただひたすら水神盤と対峙していた。文字の勉強もそうだが、家の手伝いすらした覚えがない。

「啓璋と友寧は、文字以外にも色々と学んでいるようだな」

家人としての仕事を果たしながら、少年たちは勉学にも励んでいるようだった。屋敷にある書物を片手に、仲望に教えを受けている姿が幾度か見受けられた。

「まあ、俺のわかる範囲で、だけど」

「……あやつらが成人したら、ここから巣立たせるのか？」

背中合わせのため、仲望の表情を窺うことはできない。あいかわらず気だるげな声ではあるが、それでも無視されることはなかった。

「本人たち次第かな」

「しかし、あの二人のことだ、ぬしを一人きりにはせぬだろうよ」

「一人にしたら、飢え死にするとか思われてそうだなぁ……」

そういえば、どの房もがらんとしていて調度品と呼べるものは少なかった。屋敷の規模から見てもそれなりに裕福な家だと思ったのだが、いつから食べ物にも困る有様になったのだろうか。

春蘭の守護する邑でも、裕福な家と、そうでない

家があった。当然のように邑を治める長は裕福な側の人間で、彼の屋敷は広く、庭一つとっても贅が尽くされていた。室内を覗いたことはないが、きっと高価な調度品も多数置かれていたことだろう。

長の屋敷と比べる方が間違っているかもしれないが、その側近たちの家と比べてもここよりまだ裕福だったように思える。少なくとも、家僕がまだ若い少年たち二人だけということはなかった。

ぺらり、ぺらりと紙を捲る音だけが房内に響く。途切れてしまった会話を再開することもせず、春蘭は仲望の背に寄り掛かりながら、ぼんやりと外を眺めていた。

「……のう、仲望。都での暮らしが苦しいのならば、余所に移ったらどうだ？」

「余所？」

「うむ。私が守護する邑はよいところだぞ。人柄もみな穏やかだ。少々、洪水が起こりやすい土地ではあるが、それは私が守っているから安心だ。どんな長雨が続いても、今まで一度たりとも河を決壊させたことはないからな。むろん、そのためには真名を取り戻す必要はあるが――」

書物を捲る音が止まった。どうしたのかと不思議に思えば、急にくるりと視界が回って天井を映した。寄り掛かっていたものがなくなったわけだが、背に感じるはずの痛みはない。

ぽかんとしていると、視界に仲望の顔が映った。

「――そりゃ、気楽そうだ」

気だるげではあったが、唇の端に微かな笑みが浮かんでいた。のんびり屋の仲望には、魅力的なお誘いだったのだろう。

ただし、春蘭の邑には勤勉な邑人が多いから、自堕落な仲望は肩身の狭い思いをするかもしれない。まあ、本人はそんなことを気にする性格ではなさそうだが。

「ぬしらのことは、嫌いではないからな。華安での暮らしが厳しいならば、いっそのこと一緒に引っ越

してしまえばよいと思っただけだ。啓璋や友寧のことだ、きっと嫌な顔一つせずぬしを養ってくれると思うぞ」

「夢の暮らしだな」

「文字がわかるならば、子供たちにそれを教えるという手もある。なんだ、考えれば色々とあるではないか」

仲望の膝を枕に寝そべっていれば、優しげな手付きで擦りむいた額を撫でられた。なぜか、それがとてもくすぐったい。

「そういえば、怪我の具合はどうなんだ？」

「なにもしなければ平気だが、歩くとさすがに痛むな。腹が減るのも辛いが、〝怪我〟もなかなか大変だ。なにより、空腹は食事をすれば収まるが、怪我による痛みはそう簡単に治まってはくれぬ。それに、啓璋が塗る薬は沁みる」

「確かに。二人が怪我をする度に、泣きごとを言ってたな」

「そんな頻繁に怪我をするものなのか？」

「楊秀に剣の稽古をつけてもらっているから、擦り傷は日常茶飯事でね」

珍しく、仲望が笑い声を零す。

「なるほどのう。ぬしも、昔はそうやって稽古に励んだのか？」

「……俺が武術をやるように見えるかい？」

「禁軍に所属していたと聞いたぞ」

啓璋たちだな、と仲望は嘆息した。知られたくなかったのだろうか。春蘭の問うような視線に仲望はしかたないといった様子で口を開いた。

「まあ、鄭家は武官の名家だったからね」

「では、玄楽も禁軍にいたのか？」

「うん、まあね」

わずかにだが、言葉が固い気がする。おそらく、兄と似ていると言った時と同じく、自分でも気付かないうちに反応しているのかもしれない。

そもそも、玄楽と仲望の兄弟仲はどのようなもの

だったのだろうか。さほど良好であったとは思えないが、不仲であったわけでもないようだ。春蘭としては、玄楽に加担されると面倒なため、できれば後者であった方がなにかと都合がよいのも事実だった。

「私は、ぬしが禁軍で働いている姿が想像できぬ」

「よく言われるよ」

「そうではない。上手く言うことはできぬが、ぬしに武器は似合わぬ気がするのだ」

「……それも、初めて言われたよ」

少しだけ驚いたような声音に、春蘭は「そうか」と返した。

春蘭は、今の〝鄭仲望〟しか知らない。過去、彼がどのような人物だったのか、実際に見たわけではなかった。きっと、そのせいもあるのだろう。人を傷付けることのできる武器を、彼が率先して手にしていたとは思えないのだ。

そんなことをつらつらと考えながら、仲望の膝を枕にして、春蘭がうとうとし始めた時だった。戸口の方から、がたん、となにかが壁にぶつかったような音が響く。

顔を向ければ、そこには楊秀と彼を案内してきた啓璋の姿があった。楊秀は至極真面目な表情で、啓璋は顔を真っ赤に染めている。

「……すまん。邪魔をしたな」

「うむ。昼寝の邪魔ではあったな」

欠伸をして体を起こした春蘭は、差し伸べられた啓璋の手を摑むと痛みを堪えつつ立ち上がった。そんな春蘭に、啓璋がこそっと耳打ちする。

「二人で話があるみたいだから、お前はこっちに来い」

「わかった」

「歩けるか？　背負ってやってもいいぞ？」

「……いや、遠慮しておこう」

「んだよ、人が親切で言ってやってるのに」

怪我を負ってから、春蘭のことを蛇蝎（だかつ）のように嫌っていた啓璋が、なぜか妙に甲斐甲斐しく世話をし

てくれるようになった。もっとも、ぐちぐちと文句を言いながらではあるが、それでもあれこれと春蘭の身を気遣ってくれる。

　怪我をした動物に、無意識に優しく接するような感じじゃないかな、というのが春蘭の話を聞いた仲望の見解だった。

　動物に喩えられたことに多少の不満を感じつつ、春蘭は過保護になってしまった少年に困惑を隠せずにいた。

「あとで薬を塗り直すぞ」

「それくらい自分でもできるが……」

「やってやるって言ってんだ。素直に頷いとけ」

　啓璋に手を引かれて回廊を歩いていると、前方から盆に茶器を載せて運んでくる友寧の姿があった。こちらに気付くと、足を止めて感情の籠もらない視線を向けてくる。

　そういえば、啓璋が甲斐甲斐しく世話を焼くようになってから、なぜか今度は友寧が春蘭を避けるようになった。

　仲望や啓璋がいる前では今までのように振舞うのだが、時折、刺すような視線を向けられることがある。引っ込み思案な性格だと思っていただけに、その豹変には首を傾げざるを得なかった。

「あ、友寧。さっき、楊秀様から土産を頂いたんだ。話が長引くから、先に食ってろってさ。ちょうどいいから、それを昼食にしようぜ」

「うん、わかったよ」

　にっこりと微笑むが、やはりけっして春蘭の方を見ようとはしなかった。

　厨房に向かえば、啓璋が言うように卓の上に大きな包みが置かれてあった。啓璋がそれを開けてみると、中から出てきたのは――。

「肉饅頭か……」

　まさかの偶然に、春蘭は思わず卓に手をついてがくりと肩を落とした。だからどうというわけではないが、どうしても先日のことを思い出さずにはいら

れない。
「どうしたんだ？　肉饅頭が嫌いなのか？」
「いや、そういうわけではない」
形といい、大きさといい、あの肉饅頭にそっくりだ。春蘭は複雑な気持ちで楊秀の土産を見詰めた。
「冷めてるから、蒸かし直すか」
「手伝うぞ」
「駄目だ。お前は座ってろ」
竈に火を入れる啓璋を眺めながら、こちらは怪我が治るまでこの調子か、と春蘭は嘆息したのだった。

「女っ気が皆無だったお前が、あそこまで気を許すのは珍しいな。いい傾向だ」
友寧が運んできた白湯で口を潤しながら、楊秀は満足げに告げた。それに、仲望はやや不機嫌な声音で応じる。
「また攫猿の話か？」
「ああ。四日前を最後に、ぴたりと姿を消していた攫猿が、昨夜、ようやく現れた」
目的のためには手段を選ばない楊秀によって、仲望はむりやり夜中連れ出されるといった日々が続いた。昨夜は、少しくらい休ませろ、という仲望の主張が通り、屋敷で安眠を貪っていたのだ。
「そりゃ、間が悪かったな」
「まったくだ。しかも、姿を現したのは、よりによって花中書令のお屋敷だ」
さすがの仲望も、これには驚いた表情を浮かべた。また高官の屋敷だろうとは思っていたが、まさか上司のところに現れるとは思ってもみなかった。
「幸いにも警備が厳重だったため、攫猿の侵入は防げたそうだ。重傷者はいるものの、死者もなかったらしい」
「そうか。中書令は？」
「無事だ。昨夜は屋敷にいなかったらしい。報告を受けて、慌てて戻ったそうだ」

「攫猿は、なぜ中書令の屋敷を？」
「さて……これまでのことから考えれば、若い娘を狙ったのではないか？　中書令の屋敷には姪御殿がいたはずだ」
「ああ、彼女たちか」
　花家の姉妹とは仲望も面識があった。言葉を交わしたのは数えるほどだが、両親を亡くしたところを伯父である興奏が引き取ったと聞いている。
「共通点は、高官の血筋というだけで他にはなにもない」
「姉妹は無事だったのか？」
「ああ。元々、攫猿の出没を警戒して奥の房室に閨を移していたらしい。二人とも、兵に守られ無事だ。だが、また狙われないとも限らない」
　興奏は亡き弟夫婦の忘れ形見である姉妹を、殊の外可愛がっているだけに、今頃、必死になって私兵で屋敷を固めていることだろう。
「そこで、お前には、今夜から花家の警備に回って貰いたい」
「ちょっと待て。そんな場所にまで、俺は引っ張り出されるのか？」
「しかたがないだろう。私は警備に回れぬのだ」
　忌々しげな表情を浮かべた楊秀は、拳を床に叩きつけた。鈍い音が室内に響き、沈黙が落ちる。仲望はなにも言わず、楊秀が口を開くのを待った。
「……禁軍への勅命が取り下げられた」
「どういうことだ？」
「陛下のご命令だ。街は龍乎に任せ、禁軍は紫宝宮及びその周辺を厳重に警戒せよとのことだ。陛下は後宮の美女たちが守れれば、それでいいと思われたらしい」
　吐き捨てるような口調だった。せめて一度でも攫猿と交戦したならばまだしも、四日前には包囲する前に逃げられてしまった。これでは禁軍が動いた意味がない。
　皇帝の狗、と龍乎の兵士たちはここぞとばかりに

揶揄することだろうし、万が一、猩猩緋が先に攫猿を退治するようなことになれば、それこそ目も当てられない事態に発展するだろう。

「後宮の警備を増強するにしても、禁軍全体を動かす必要はない。一部だけでも攫猿の方に回してもらえるよう、陛下には再考を願い出た。おそらく、宦官共が陛下の耳にあることないこと吹き込んだのだろう。陛下は、禁軍に所属なさっていた時は、宦官を毛嫌いしていたと聞くが……人は変わるものだな」

溜息をついた楊秀は、空になった茶器を眺めながら迷うような眼差しを仲望に向けた。

「花家のこともあったが、もう一つ別に相談したいことがある」

「なんだい？」

「中書令子飼いの情報屋がいただろう」

「確か趙、だったかな」

いつも背中を丸めて歩く小柄な男を思い出し、仲望は頷いた。

「中書令はその男を通じて、私に極秘の情報を持ってきた」

「極秘？」

ああ、と楊秀は頷く。

「極秘」とされる情報が、よいものであった例はない。だからこそ、楊秀も話すのを躊躇っているのだろう。結果的に、仲望を巻き込んでしまうことになるから――。

「……陛下が、太子を廃そうと画策している。昨年、黎貴妃が産んだ祥安様を跡継ぎとしたいそうだ」

「ふうん。もうそんな話が流れているのか」

現在、後宮には千を超える美女が集められている。その中でも最も皇帝の寵愛が深いのが黎貴妃という女性だ。

黎貴妃は後宮に入るなり、皇帝の寵愛を独占した。そしてすぐに第一子を身籠もり、昨年男児を出産。皇后の次に位置する四夫人の一つ、貴妃の座に就い

た。後宮での黎貴妃の権威は、太子の生母である皇后を凌ぎつつあると噂されている。

しかし、その権威は皇帝の寵愛があってのもの。このままでは皇帝亡きあと、黎貴妃とその子は間違いなく排除されるだろう。それを防ぐためには、なんとしてでも皇帝が健在のうちに、祥安を太子の座に据えなければならない。

宮廷の噂雀たちは、誰もがいずれ太子の廃嫡騒動が起こるだろうと予測していた。太子と黎貴妃の子を天秤にかけ、すでに動き出す者もいるほどだ。

太子が国境の警備を任されたのも、これ以上、太子が民衆の支持を集めないようにするためだと噂されていた。

「今のところ、太子側に廃嫡されるに足る理由はない。国境の警備を一年と経たずに戻ってきたことは病のためと言われているが、それも回復に向かっているという。そうなると、もっとも警戒すべきは――」

「暗殺、か」

「ああ。廃嫡劇を画策するよりも、殺してしまった方が手っ取り早いと陛下はお考えになるだろうな」

血の繋がった自身の子を殺すことに、皇帝は躊躇しないだろう。すでに、その両手は皇族たちの血で染められている。憐憫の情は期待できない。皇帝・沸儀は、わずかな甘さが命取りとなる世界で勝ち残った人物なのだ。

「楊秀はどうするつもりなんだ？」

楊秀は仲望と違い、韓一族を率いる本家の嫡男だ。己の判断一つに一族の命運が掛かっている。だからこそ、考えあぐね、ここへ相談しに来たのだろう。

「個人的な感情を優先するのであれば、迷いなく太子側につく。だが……陛下が健在の今、太子側につくのは不利だ。それに、祥安様はまだお生まれになったばかり。周囲から奸臣を排除し、しっかりとした教育を受ければ父上のようにはならない可能性もある」

「だが、そうなれば太子は……」
「皇后諸共、亡き者とされるだろうな。たとえ命を優先して太子の位を返上したところで、現在の政権に不満を抱く不穏分子たちが放っておくはずがない」
「手詰まり、か」
「だろうな。太子側は廃嫡の理由を与えないように、また、暗殺を警戒して雲隠れしているという噂だ。もしかしたら、華安にはいないのかもしれん」
「見舞いにはいかなかったのか？」
「迂闊なことはできんからな。なによりも、私と太子はただの顔見知りという程度の間柄だ。父親同士が旧知だったというにすぎん。だから、居場所すら知らぬのだ」
地方の、皇帝に反感を抱く官吏たちを口説き落とすことができれば、太子は大きな力を持つことになる。むろん、それでも皇帝の優位に変わりはないが、武力による闘争に発展した場合、地方を押さえる意味は大きい。
「……中立の立場は取れないのか？」
どちらにもつかない、と明言することも一つの手である。傍観者という位置は、一門の武力を温存することに繋がる。だが、それには将来の損害を覚悟しなければならない。
勝者が優遇するのは、共に戦い抜いた者たちである。傷付くのを恐れ傍観していた者は、冷遇されるだろう。また、そうしなければ勝者側の者たちから反発が起こる。
しかし、それでも仲望は中立の立場を提案した。
「韓一族が立ち位置をはっきりとさせれば、それに続く者たちが現れる。それは、どちらに与するにしても争いを激化させるだけだ。ならば、それを大義名分に掲げ、中立の立場を定めるのも手だと思うが」
「それは……おそらく、むりだろうな」
首を横に振った楊秀は、見ているこちらの気が滅

入るような重い溜息をついた。
「私もそうだが、うちの一族は、根っからの武人が多い。中立などという姑息な手段を取るくらいなら、一族諸共滅んだ方がましだという者が大半だ。私も、様々な柵に悩むくらいならば、早々に旗色をはっきりとさせた方がいいと思っている」
冷静に考えるならば、太子側の勝ち目は薄い。だが、劣勢だからこそ味方することで恩を売れるという利点もある。太子が皇帝になった暁には、韓家は優遇されるだろう。しかし、それも太子側に勝機があればの話だ。
一族の存続を考えれば、皇帝側につく方が賢明だろう。廃嫡された太子を、あの冷徹な皇帝が生かしておくとは思えず、即座に処分される可能性が高い。そうなれば、祥安の次期皇帝の座は揺るぎないものとなる。
「太子を担ぎ上げる中書令には、なにかと世話になっている。できれば、太子についてその恩を返したいところだが……難しいな」
「盛申様はなんと？」
「父上には、自分は引退したようなものだから、代わりにお前が決めろと言われた」
楊秀同様、禁軍で将軍位を務めていた韓盛申は、当主の座に就いてはいるものの、自由気ままな生活を送っていると聞く。家督を楊秀に譲る日も、そう遠くはないだろう。
「あれでよく、韓家の当主を続けてこられたものだ」
「人望が成せる業だろ」
盛申が禁軍大将の位にあった時、その周囲は彼を慕う者たちで溢れていた。
当時、同じく大将として禁軍に所属していた沸儀が、絶対的な力で部下を従わせていたのに対し、盛申は人徳によって部下を従えたと聞く。あまりにも対照的な二人だったが、仲はさほど悪くなかったというから不思議な話だ。

「盛申様は、今の陛下をどう思われているのだろうな」

「なにも考えていないのかもしれんぞ。陛下が帝位に就いた時も、気軽に酒を飲める相手が減ったと嘆いていたくらいだ」

諦めたように嘆息した楊秀は、空になった茶器を掌で弄びながら告げた。

「迷いはある。だが、もしも双方の対立が激化すれば、韓家は祥安様側につくことになるだろう。勝手を言うならば、太子には帝位を諦め他国に亡命してもらいたいところだ」

「確かに勝手だ」

「わかってる。だが、それが被害を最小限に抑える最善の策だ。太子側も、担ぎ上げる対象がいなくなってしまえばどうしようもない」

「太子は引くかな？」

「引かぬだろうな」

太子・博焚は義侠の人である。

父親の暴虐振りを諫め、蟄居を命ぜられたことも少なくない。太子という地位にありながら驕ることもなく、その名声は広く知れ渡っていた。

太子側としては、廃嫡騒動にかこつけて皇帝を廃位し、離宮に軟禁、もしくは病死に見せかけて殺害するが最善の策だろう。

皇帝の寵愛が黎貴妃とその子にある限り、太子は常に死と隣り合わせに生きなければならない。太子が立つ足場は驚くほどに危うい。

「あの人は、見た目によらず激情家だ。自分だけが助かろうなどと、間違っても思わぬだろうよ」

「そうだね」

「太子側がどう仕掛けてくるにせよ、お前は今まで以上に、中書令からしつこく勧誘されるだろうな」

「確かに……」

おそらく、顔を合わせる度にその話になるだろう。しばらくは、呼び出しがあっても理由をつけて参内を控えるしかない。もっとも、屋敷に訪ねて来られ

ればそれまでなのだが。
「こちらも、その情報屋を通じて太子側についてほしいと頼まれた口だ」
「中書令は太子に心酔しているからなぁ。やっぱり、花家の警備は断る。ものすごく面倒臭そうだ」
「お前、猩猩緋に先を越されてもいいというのか！」
「それは、楊秀の都合じゃないか」
うんざりとした口調で告げれば、薄情者めが、という恨みがましい視線が突き刺さる。
「花家の警備には、小数ではあるが、他からも応援が回されるそうだ。なんといっても、お前は禁軍の出だからな。舐められないようにしてこい」
「急に腹痛が……」
「無駄だ。いざとなったら、腕ずくでも連れて行くからな。今日は、お前を花家に送り届けてから勤務に就くとしよう」
横暴すぎる、と仲望は溜息をついたのだった。

木刀の打ち鳴らされる音が中庭に響いていた。
楊秀が啓璋と友寧に剣の稽古をつけているのである。片手で木刀を握る楊秀は、少年たちを同時に相手しているにもかかわらず、その場から一歩も動いていない。
啓璋と友寧は、素早い動きで相手を翻弄し隙をつく作戦をとっているようだが、先ほどからいまいち成果は上がらないようだ。
「足の位置を動かせぬのならば、一人が囮となって、背後から仕掛ければよいのではないか？」
「啓璋と友寧は、そういう卑怯な戦法は嫌いだから。真っ向勝負で楊秀から一本取りたいそうだ」
春蘭は中庭に面した回廊に座った仲望の隣で、啓璋と友寧の稽古風景を眺めていた。左右に素早い動きを繰り広げる少年たちは、春蘭から見ても充分に〝速い〟のだが、楊秀はいともあっさりとそれを躱

してしまう。

「戦では、そんな生温いことを言ってはいられないのではないか？」

「今はあくまでも稽古で、重要なのは一本を取ることだ。卑怯な手段で勝っても、実力の向上にはならないだろ」

「そういうものか」

今すぐにではなく、いずれ一本を取るためには真っ向から挑むしかない。啓璋たちは何度木刀を弾かれても、戦意を喪失させることなく楊秀に向かっていく。

やがて、体力が尽きたのか、途中で脱落した友寧がふらふらとした覚束ない足取りでこちらに向かってきた。

「そういえば、友寧。今夜、花家に顔を出すことになったから。たぶん、泊まりになる」

「わかりました」

稽古風景を眺めていた春蘭だったが、仲望の口から出た〝花家〟という言葉に思わず肩を揺らした。仲望の言う〝花家〟と、春蘭の思い描いた〝花家〟は同一なのだろうか。

妙な胸騒ぎを感じた春蘭は、躊躇いがちに口を開いた。

「のう、仲望。花家とは、どこの花家だ？」

「どこのと言われても……花家は花家だけど」

質問の意図を摑み兼ねたのか、仲望は逆に問うように春蘭を見た。

「うむ。では、その花家には、翠蓮、玉翠という名の姉妹はいるか？」

「いるよ」

やはり、と春蘭は心中で呟いた。

「のう、仲望。それはやはり〝大人の野暮用〟というものか？」

仲望の表情は動かない。のんびりとした雰囲気を漂わせているにもかかわらず、ここまで内面を読み取り難い者もいないだろう、と春蘭は内心で舌打ち

した。
「……ただ顔を出すだけだ」
「夜にか？」
「中書令は忙しい方だから。それに酒を酌み交わすのは夜と決まっている」
それに対し、春蘭はあえて追及することなく、「そうか」と頷いた。
「春蘭は、二人を知っているのか？」
「とある縁から友達になった。以前、干菓子を貰ってきたことがあっただろう？　あれは、翠蓮たちに貰ったものだ。それにこの服をくれたのもあやつらだ」
「友人ができてよかったな……と言うべきか？」
「遊びに来いと言われているが、この足だ。姉妹に――特に玉翠に会った時は、約束を忘れたわけではないと伝えておいてくれぬか？」
「妹御か」
了承した、と仲望は頷いた。
しばらくして、力尽きた啓璋が地面に突っ伏した。土に塗れるのもかまわず、四肢を投げ出して荒い息をついている。
「どれ、水でも持ってきてあげようか」
よっこらしょ、と仲望は重い腰を上げるように立ち上がった。そして、ふらふらとした足取りで回廊の奥へと姿を消す。
それをぼんやりと眺めていると、春蘭のすぐ隣に楊秀がどかりと腰を下ろした。啓璋はあいかわらず地面に寝転がったままで、友寧は回廊の隅で顔を伏せ気味にして柱にもたれかかっている。
「最近、仲望とはどうだ？」
「……質問の意図がまったくわからぬのだが」
「先ほどはずいぶんと親しげに見えたが。そなたの年齢があと少し上ならば、さっさと鄭家に輿入れさせるのだがな」
嫁になる気はないのだが、いくら言葉を重ねたところで楊秀が納得してくれるはずもない。彼の中で

は、春蘭はすでに鄭家の嫁として認識されているのだろう。

「あの仲望が他人を傍に置くのは珍しい。嫁にはぜひ頑張って、仲望の心を昔のように奮い立たせてもらいたいものだ」

「むりを言うな」

歩くのも億劫だと言いそうな仲望なのだ、楊秀の願望は永遠に叶うことはないだろう。

「いや、あいつは今でこそああだが、昔はあれでなかなか勤勉な奴だったんだぞ」

「想像がつかぬな」

「そうか？　まあ、私はあいつの過去を知っているからな。兄に負けじと、勉学も、武術も日々努力を重ねていたものだ」

「……鄭玄楽のことか」

じわり、じわり、と心の奥から憎しみが湧く。守り神から〝真名〟を奪った愚かな男。玄楽のことを聞くだけで、その名を口にするだけで、御し切れない憎悪が体から溢れ出しそうだった。

「なんだ、玄楽のことを聞いたのか？」

「……ぬしは、あやつの居場所を知っておるか？」

「居場所って、玄楽は死んだが。仲望から聞いていないのか？」

「知らぬか」

呟き、春蘭は小さく溜息を漏らした。

鄭玄楽は生きている。だが、居場所に繋がる手掛かりは一向に得られない。

自身の占いに信を置いている春蘭ではあったが、わずかな進展すら見えない現状に苛立ちを感じていた。

「玄楽はなにをしても優秀な男だったからな。仲望はその弟というだけで、できのよい兄と比べられて生きてきたのだ。まあ、兄は兄で、他者とは異なる外見のせいで苦労をしたのだがな」

「そうか」

確かに、鄭玄楽の外見は華国（かこく）では滅多に見ないも

のだ。それだけに、平等で正当な評価は得られ難かったに違いない。もっとも、だからどうしたという気の方が強いが。

「四年前だ。四年前に、すべてががらりと変わってしまった」

「戦のあった年だな」

「そこで、なにかがあった。玄楽は死に、仲望は変わった。未だにその理由は話してもらえない。だから、だ」

楊秀は春蘭の両肩に手を置いた。そして、気迫の籠もった眼差しを春蘭に向ける。

「仲望の心の傷を癒してくれ。それに、あれも守るべき者ができれば、性根を入れ替えるかもしれない。いや、必ず奮起するはずだ。頼んだぞ、仲望の嫁！」

痛いくらいに肩を叩かれ、春蘭は這ってでも逃げ出したい衝動に駆られた。肩から怪我をしている膝へと振動が伝わるせいで、先ほどより痛みが増した気がする。

「や、止め、止めぬか！」

結局、仲望が戻る前に、事態に気付いた啓璋によって春蘭は助け出されたのだった。怪我人になんてことをするのだと、楊秀に文句を浴びせる啓璋の声を聞きながら、春蘭は先ほどから俯いたままの友寧へ視線を向けた。

眠っているわけではなさそうだが、ここ数日ほど様子のおかしい少年に、春蘭は首を傾げたのだった。

そして、夜半。

人々が寝静まった頃、春蘭は中庭に面した回廊に一人佇んでいた。

夕立があったせいか、雨の匂いが辺り一帯に漂っている。頭上を仰げば、分厚い雲が空を覆っていた。以前のように月明かりはない。

攫猿が屋敷を襲撃するには、もってこいの夜だ。

「この胸騒ぎも、気のせいだとよいが」

占師という職業柄、重要視されるのが〝勘〟である。なんの根拠がなくても、直感には従うべきだと春蘭は母親から教わっていた。

胸騒ぎは収まらない。

むしろ、闇に閉ざされる空を眺めれば眺めるほど、不安感は徐々に強まってくる。

「……ところで、ぬしは私になにか用か？」

視線を回廊の奥に向ければ、暗闇の中から寝間着姿の友寧が姿を現した。平生の少年からは想像もつかないほど、冷えた眼差しを春蘭に向ける。

「――出てって。この屋敷から、出てってっ」

啓璋とは違う、悲鳴のような叫びに、春蘭は眉を寄せた。ここ数日ほど友寧の様子がおかしかったのは、春蘭が原因だったのだろうか。しかし、春蘭が怪我を負った日までは、友寧に変わったところはなかった。

「友寧？」

「お願いだから、出てって。その服をくれた人たちのところにお世話になればいい。お願い、お願いだから、もう僕の世界を壊さないで……！」

蹲って泣き出した友寧の肩に、春蘭はそっと触れた。びくっ、とか細い体が揺れるが、振り払われることはなかった。

「私が出て行けばよいのか？」

「う、ううっ」

「それで、ぬしの世界は守られるのか？」

だが、涙に濡れた顔を上げた友寧は、違うというように首を左右に振った。

「ごめ、なさい……っ」

「友寧？」

「違う。君は、悪く、ない」

悪くないんだ、と震える声で友寧が呟いた時、回廊の奥から微かな物音が響いた。それは徐々にこちらへと近付き、暗闇から灯りを点した燭台を手に、焦った様子の啓璋が姿を現した。

「友寧！　お前、どうしてこんなとこに！」

涙を零しながら放心する友寧に駆け寄った啓璋は、困惑げに春蘭を見詰めた。
「友寧。ゆっくりでよい。悩みがあるならば話してみよ」
啓璋と共に背中をさすれば、しゃくり上げる声が徐々に小さくなっていった。やがて、友寧は燭台の火を見詰めながらゆっくりと口を開いた。
「……玄楽様が亡くなって、旦那様が禁軍を辞められた時、それまで働いていた人たちは、僕と啓璋を残してみんな出て行ったんだ。屋敷の物を勝手に持ち出して……止めてって言ったって、みんな聞いてくれなかった。ずっと一緒に暮らしてきたのに。止めようとした僕らは殴られて、なにもできなかった。それなのに、旦那様は僕らに〝ごめん〟って謝るんだ。悪いのは旦那様じゃないのに」
友寧の顔が悔しげに歪んだ。見れば、啓璋も当時のことを思い出したのか、苦しげな表情で眉を寄せていた。
もしかしたら、玄楽の遺品が一つも残っていないことと、関係があるのかもしれない。おそらく、それすらも使用人たちに持って行かれてしまったのだろう。
「貧しいけど、僕はこの生活が好きだ。だから変化なんていらないと思ってた」
友寧は恐れたのだ。
春蘭のいる日常が当たり前になったあと、また昔のように裏切られ、それによって仲望と啓璋が傷付くことを。
むろん、それは春蘭が鄭家を去った使用人たちのような行動に出るという前提での話だが、友寧の心には猜疑心が深く根付いていた。
啓璋が、春蘭に対して拒否する態度を貫き続けていた頃は、まだ安心できたのだろう。しかし、春蘭の怪我を境に、啓璋はその存在を受け入れはじめた。だから、ここ数日の間、彼は自分を避けていたのか、と春蘭は納得した。

「私がこの家に仇をなすと思ったのか？」
「ううん。そうじゃなくて……ごめんね、春蘭。さっきの言葉は、ただの八つ当たりだったんだ」
「八つ当たり？」
「僕も、それに啓璋も、君がそんなことをするとは思ってないよ。ね？」
同意を求めるように友寧が啓璋を見れば、渋々といった様子ではあるが、啓璋の首が縦に振られた。
「よく考えたら、こんな餓鬼になにもできるわけねーしな。まあ、初日のあれはまだ腹が立つけど」
「そうだね。あれは僕も嫌だったな」
わずかにだが友寧は口の端に笑みを浮かべた。そういえば、彼らはいったいなにに腹を立てたのだろうか。
「どこが間違いだったのだ？」
「少し考えりゃわかんだろ」
「わからぬから訊いておる」
啓璋は呆れたような顔を、友寧は困ったような顔をそれぞれ春蘭に向けた。先に口を開いたのは啓璋である。
「俺は、俺たちの善意を利用されたみたいで嫌だったんだよ。見返りが欲しくて善行したわけじゃない」
「僕も同じかな。困っていたお爺さんを助けられたことはよかったと思っているけど、でも、そんな方法で食糧を得たいとは思わないよ」
なるほど、と春蘭は頷いた。春蘭にしてみれば、少年たちの善行を利用したつもりはないが、結果としてそういう形になってしまった。それを、啓璋たちは潔しとはしなかったのだ。
「よくわかった。私が取った方法は、好ましいものではなかったのだな。不快にさせてすまなかった」
すんなりと出た謝罪の言葉に、啓璋と友寧は目元を和らげた。「わかればいいんだよ」と、啓璋がぶっきらぼうに言い、友寧も「もう二度とあんなことはしないでね」と言った。

「うむ。食い扶持は、真っ当な方法で稼ぐことにしよう」
「なんか、それはそれで心配だな……」
「ね……」
　和解したところで、再び友寧の表情が曇り出した。春蘭と啓璋が見詰める中、友寧は不安を滲ませた声音で告げる。
「……旦那様は、楊秀様に頼まれて、攫猿を退治に行ったんだ」
　ほろり、ほろりと、また友寧の頬を大粒の涙が伝う。はっとしたように、啓璋が友寧の肩を摑んだ。
「なんだよ、それ。どういうことだよ！」
「お二人の話をたまたま聞いたんだ。それで、旦那様の弓の腕を貸してほしいって。でも、旦那様は四年前に負った怪我で、左足が上手く動かないんだ！　それなのに、化け物の相手なんてできっこない！」
　友寧の悲痛な叫びに、啓璋も顔を歪めた。二人の体が小刻みに震える。大切な人の命が失われるかもしれない可能性に脅えているのだ。
「あ、あんなに、強かった玄楽様だって、あっさり死んじゃったんだ。だから、もしも旦那様が死んだりしたら、って思って。春蘭が来る前は、平和で、不安に思うことはなかったんだって思ったら、君がすべての元凶に思えて……！」
　ごめんなさい、と友寧は絞り出すように告げた。
　春蘭が鄭家へとやってきた時期と、攫猿の件で仲望がかりだされたのが、たまたま合致しただけなのだと、友寧もわかっているのだろう。
　だが、弱い心は憎しみを向ける相手を欲した。それが、春蘭であったというだけだ。
「なるほど。だから〝八つ当たり〟か」
　肩を竦めた春蘭に、友寧は申しわけなさそうに頷いた。
「でも……旦那様が大怪我をしたら、それで死んじゃったらどうしよう。ねえ、啓璋！」
「落ち着けって！　楊秀様がついてるなら、きっと

大丈夫だって」

「違うよ。僕、気になってまた立ち聞きしたんだ。そしたら、楊秀様は別件の警備があるから、一緒にはいられないって」

絶句する啓璋の表情も、徐々に青褪めたものになる。彼らが信頼を寄せる楊秀は、仲望の傍にいない。むろん、友寧たちも仲望が一人で攫猿に向かうなどとは考えていないだろう。

しかし、仲望は他者と違い、身体的に不利な状態にある。禁軍を退くことになった原因を、詳しく聞いていなかった春蘭も、なぜそんな状態の人間を連れ出したのだろうと、疑問を感じた。

「仲望様……っ」

悲痛な友寧の声。

ああ、自分はこの声を知っている。

戦へと向かった大切な人の無事を祈る者の声だ。

人攫いに奪われた子の無事を願う親の声だ。

死に瀕した者の命を助けてほしいと、神に縋る声だ。

〝神様、神様、神様――〟、と。

「わかった」

春蘭の唐突な声に、友寧と啓璋は涙に濡れた顔を上げた。

「ぬしらにも、仲望にも恩がある。その声、私が聞き届けよう」

「春蘭？」

春蘭は、袖で友寧と啓璋の顔をごしごしと拭いてやった。ぽかんとする二人に、春蘭は微笑む。

「仲望を守り、無事に連れ帰ればよいのだろう？」

そうすれば、この二人は泣かない。

聞いているだけで胸が苦しくなるような声をあげたりしない。ならば、春蘭が取る道は一つだ。

「こい、白桃」

呼び声に姿を現した白桃は、春蘭に甘えるように

すり寄った。少年たちは、それを茫然と見詰める。
ひらりと白桃の背に跨り、春蘭はこちらに向かって手を伸ばす友寧と啓璋に向かって告げた。
「心配はするな。必ず仲望を連れ帰る」
白桃のしなやかな体が暗闇に躍る。
その背にしがみつきながら、春蘭はふと思い出したように「洪采がいたら面倒だな……」と呟いた。



篝火に照らし出された屋敷は、物々しい雰囲気に包まれていた。

広い屋敷の周囲には、至る所に警備兵が見える。昨夜の攫猿による襲撃後、急遽、増強された者たちだ。

しかし、兵の数はあれど、統率の取れていない警備体制に、どうしても寄せ集めの印象が拭えない。いざとなった時、槍を持って果敢に立ち向かう者は数えるほどだろう。その多少の勇気を持った者も、形勢によっては槍を投げ出し、我先にと逃げ出すに違いない。誰だって自分の命が一番だ。

全員が禁軍、もしくは龍乎の兵士ならば、そのような醜態を心配する必要はないのだが、と仲望は嘆息した。恐慌状態に陥った時に、自分のこの足でどこまで踏ん張れるか。やはり、理由をつけて断ればよかったかもしれない。

「ぬしが溜息とは珍しいな」

仲望の隣には、なぜか興奏の姿がある。危険だから屋内にいてほしいと哀願されていたが、本人は自らも槍を取って戦う気満々だった。もっともそれは、寄せ集めの警備兵たちの危うさを理解した上での行動だろう。

命令系統がなっていない部隊でも、指揮官がしっかりしていれば存外に戦えるものだ。禁軍を退役して長く、現在は一文官にすぎない仲望では、警備兵をまとめることは難しかった。もっとも、そんな疲れることは頼まれてもごめんだったが。

「……心当たりがないとでも？」

「あるな」

「何度言われようとお断りです」
きっぱりとした拒絶に、興奏は気分を害した様子もなく肩を竦めて見せただけだった。
「悪い話ではないだろう。翠蓮でも玉翠でも、好きな方を嫁にくれてやるというに」
「そして、あなたの右腕――いや、太子の側近になれ、ですか。俺は政の中枢に入るつもりはないですよ」
「頑なだの」
顔を突き合わせるなり例の話を持ち出され、さらには自身の姪を嫁にくれてやるという話にまで発展した。楊秀からの情報がなければ、かなり不思議に思っただろう。
興奏のことは尊敬しているが、義父と呼ぶとなると話は別である。こんなことになるとは思わず、先日、紫宝宮で興奏と二人きりになったのは失敗だった。仲望が太子側についたと勘違いする者が出てもおかしくはない。
また、なんとしてでも太子側の人間を増やしたい興奏のことだ、すでにわざと噂を広めて仲望を引けぬところまで追い詰めている可能性もある。自分一人が仲間に加わったところで、大勢に影響はないと思うが興奏の考えは違うらしい。
「――いっそ、今の職を辞せば諦めてくれますか？」
太子の側近である、さすがに無官の者を配置するわけにはゆくまい。
官位がなければ、宮中に出入りすることは不可能なのだ。自分も楽になる。そう思って提案すると、興奏はにやりと笑って見せた。
「それは好都合」
「はあ？」
「太子の身辺は本当に危ない。自由な立場でお守りする力を持った者が必要だ」
「……いやいや、むりですって」
自分の身を守ることすら不安だというのに、なぜ、

命を狙われている相手の護衛をしなければならないのか。むりだ。二つの遺体が転がるだけだ。むろん、自分と太子の。

「気術兵としての、ぬしの力が失われたわけではない。それで充分だ」

「ほんと、無茶を言いますよね……」

「頼む。ぬしの力が必要なのだ」

その言葉に、仲望は困ったような笑みを浮かべた。

「四年前も、同じことを言われました」

「……あれは」

「嫌ですよ。俺は、戦はもう懲り懲りなんだ」

「仲望」

咎めるような興奏の声に、仲望が肩を竦めて見せた。その時、できれば聞きたくなかった声が、仲望の耳朶を打つ。

「鄭仲望！　なぜ貴様がここにいる！」

視線を向けた先には、嬉々とした眼差しでこちらを見る姫子慮と、その隣で申しわけなさそうな顔をしている杜文重の姿があった。

「げ。こいつがいるなんて聞いてない……」

「楊秀には言っておいたのだが？　私兵だけでは心許ないため、援軍を頼んだのだ」

龍乎の、それも虎慈軍がいるとわかっていれば、たとえどれほど脅迫されようとも断っていたはずだ。それを知っている楊秀は、わざと〝他〟とぼかし、虎慈軍の名を仲望に伝えなかったのだろう。

「ここで会ったが百年目。潔く、俺と勝負しろ！」

「えー、面倒」

「黙れ！　そうやって、いつものらりくらりと逃げやがって。今日という今日は逃がさねぇぞ！」

声を張り上げる子慮に、中庭で警備を行っていた者たちが、何事かと窺うような視線を向けてくる。これから攫猿が現れるかもしれないという状況で、なぜ勝負しなければならないのか。

そもそも、片足が不自由な仲望と、現役の兵士である子慮では、戦うまでもなく勝敗は明らかだった。

しかし、それで納得してくれる相手ならば、苦労はしないわけで。

昔から勝手に好敵手と見做され、顔を合わせる度に勝負を挑まれ続けてきた仲望だった。

「勝負をするのは構わぬが、できれば時と場所を考えてほしいな」

反射的に反応しかけた子慮だったが、仲望の隣にいる人物が何者か悟ったのだろう。顔を真っ赤に染め、急にそわそわとし出した。

「あ、あの、これは……」

「若者は血気盛んでよいな。仲望も少しは見習った方がよいぞ」

「遠慮します」

仲望は深い溜息をついた。そんな仲望には構わず、興奏は緊張のために固まってしまった子慮に言葉をかける。

「ぬしは虎慈軍の隊長だったね。姪たちから聞いている。先日は本当に助かった。あの娘たちになにかあれば、わしは亡き弟に冥府で顔向けができぬところであった」

「い、いえ！　自分は当然のことをしたまでです！」

「先日も、そう言って礼を受け取らなかったそうではないか。もしも困ったことがあれば、なんでも相談してくれ。微力ながら力添えするぞ」

「あ、ありがとうございます！」

子慮の意識が興奏に向いている隙に、仲望は気配を殺しながらその場を離れようとした。だが、文重にがっしりと腕を摑まれてしまう。

「お久し振りですねー」

「……放してくれないか？」

「むりです。あなたがいなくなると、隊長が持ち場を離れるんですよ！」

意地でも放すものか、と縋りつかれ仲望はうんざりとした。子慮の我がままに振り回される文重には同情するが、だからといって人身御供になるつもり

はない。
「別に、うろうろしてもいいんじゃないか？」
「駄目です。部下に示しがつきません！」
「……勘弁してくれ」
「別に勝負しろと言ってるわけじゃないんです。攫猿が現れるまで、隊長の相手をしてくれたら充分ですから」
「いや、あいつと話すのは精神的に疲れ……」
言い終わるより先に、仲望の体は文重によってその場に引き倒されていた。ぽかんとして見上げれば、文重が顔を真っ赤にして怒鳴る。
「なにいきなり攻撃してるんですか！」
「あん？　だから勝負しようって言っただろ」
悪びれた風もなくあっけらかんと告げる子慮に、文重はわなわなと全身を震わせた。
「あんた、龍乎の隊長でしょうが！　無抵抗の一般人に斬りつけていいと思ってるんですか！」
「そいつは一般人じゃねぇ！　俺様の好敵手だ！」
「好敵手だからって、怪我をさせたら犯罪ですからね！　犯罪ですよ！」
「ちょっと斬りかかっただけだろ」
「〝ちょっと〟でもだめです！」
地面に寝転がったまま、二人のやり取りを眺めていた仲望は本気で家に帰りたくなった。
このまま退散しようか、と様子を窺っていると、再び興奏が子慮に近付いて行くのが見えた。興奏に遠慮して、文重が二人の傍から離れる。土を払いながら立ち上がった仲望は、そっと文重に近付いて、背後から片手で口を覆った。
「静かに。今、花中書令は太子のことで苦境に立たされている。味方が一人でも欲しい状況だ。面倒事に巻き込まれたくなければ、子慮から目を離さない方がいい。あいつは単純だから、なんでもほいほい頷くぞ」
「んむ。んむんむむっ」
「あ、ごめん。鼻まで押さえてた」

ぱっと手を放すと、顔を真っ赤にした文重が必死に息を吸っていた。しばらくぜいぜいと肩で息をつき、涙目を擦りながら仲望を振り返る。

「ご、ご忠告、ありがとうございますっ」

「恩義を感じるなら、あの猪突猛進野郎をどうにかしてくれ」

興奏が離れるに伴い、再び目的を思い出した子慮は好敵手の姿を捜し始める。あ、まずいと思った時には、猛然と走り寄る子慮に腕を摑まれていた。

「今度こそ逃がさねぇからな！」

「お前は、ここになにをしに来たんだ？　警備だろ？　こんなところで油を売ってると、部下に示しがつかないぞ」

できるだけ真面目な顔付きでそう告げれば、憑き物が落ちたような顔をした子慮が慌てて頷いた。

「俺様としたことが大事なことを忘れてたぜ！」

「ああ、大事なことだ。早く持ち場に戻った方がいい。頑張れよ」

「おう！　お前もな！」

ぽん、と背中を押してやれば、子慮は一目散に自分の持ち場へと走って行った。あっという間に小さくなった背中を眺め、仲望は感嘆するように呟いた。

「あいつも、あいかわらずだな」

「返す言葉もございません……」

がっくりと項垂れた文重だったが、気を取り直したように上司を追うべく走って行ってしまった。

あいかわらず子慮は面倒な相手ではあるが、今は太子への忠誠をと仲望に求めてくる興奏の方が厄介だ。これで諦めてくれればいいが、あの様子では、そうもいかなそうだった。どれほど言葉を重ねられても、自分の意思が変わることはないというのに。

「それに、どうせ俺は兄の代わりだろ」

仲望の自嘲的な声を聞く者は、誰もいなかった。

――ここはどこだ。

花家の敷地内で、春蘭は途方に暮れていた。

警備兵の目を盗んで屋敷に忍び込んだまではよかったのだが、回廊を歩いているうちにすっかり迷ってしまったのだった。歩けど歩けど外に出られる様子はない。どれだけ広いんだ、と春蘭は小声で悪態をついた。

最初は仲望を捜していたのだが見つからず、翠蓮と玉翠に目標を変えたら、また巨大な壁にぶち当たってしまった。

二人の匂いを白桃に辿らせようとするが、ここは翠蓮たちが暮らしている場所。そこかしこに匂いが残っていて、居場所を特定できない。しかたなく、白桃は玉に戻していた。

「……無駄に広すぎるだろう。これならば、屋根の上でじっとしていた方がよかったな」

暗闇にまぎれ屋敷内をうろつき始めてから、どれだけ時が経っただろうか。

いっそのこと、不審者と思われてもいいから家人に声をかけるべきか。翠蓮と玉翠に会わせてもらえれば身元の保証をしてもらえるだろうし、家僕たちの中には春蘭のことを覚えている者がいるかもしれない。

なぜこんな夜更けに、屋敷に忍び込んだのか問われることになるだろうが、それは二人が攫猿に狙われたと聞いて、いてもたってもいられなくなったのだと主張すればいい。

不本意だがこの形であれば、多少は大目に見てもらえるだろう。子供が夜、出歩くことについては怒られるかもしれないが。

「よし、そうしよう」

うむ、と頷いた春蘭は家人を捜すように歩き出した。燭台一つない回廊は、暗闇に目が慣れても歩き辛いことこの上ない。

手探りで進んでいると、遠くの方で人々の叫び声が聞こえた。怒号と、なにかが壊れる音。それが、徐々に春蘭のいる方へと近付いてくる。

「攫猿か――？」
嫌な汗が掌に滲んだ時、不意に回廊の後方から話し声が聞こえた。
「……確認するだけ……姉様は……から」
「大人しくして……伯父様……っておっしゃられた……で……」
聞き覚えのある声音に、春蘭は思わず目を見開いた。そして、声のした方に猛然と走り出す。
回廊の角を曲がれば、奥に燭台の灯りが見えた。
「翠蓮、玉翠！」
名を呼べば、春蘭に気付いた姉妹が驚いたように目を瞠った。
二人は寝衣ではなく、日中と変わらぬ襦裙を身にまとっていた。万が一のことを考え、逃げ易い衣裳のままでいたのだろう。
玉翠は驚いているだけだったが、さすがに翠蓮は春蘭がここにいる異様さに気付いたのだろう。疑うような眼差しを向ける。
「えっ、えっ、どうして春蘭がいるの？」
「そんなことはどうでもよい」
春蘭が近付こうとすると、玉翠の前に翠蓮が立った。
「お待ちください。春蘭がどうしてここに？　入口はすべて警備の兵で固められているはずです」
「さすがに、私がここにいるのは怪しいか」
「はい」
きっぱりと頷く翠蓮に、春蘭は苦笑した。当然の疑問ではあるが、今は悠長に押し問答をしている暇はない。
「すまん。話はあとだ。さっさと房に戻るぞ。それに、そちらこそ警護はいなかったのか？」
咎めるように見上げれば、玉翠が拗ねたように唇を突き出した。
「だって、様子を見てくると傍を離れたっきり戻ってこないから……」
「房から動くなと言われなかったのか？」

「それは、言われたけど……でも、伯父様のことが心配で。だって、ご自分で指揮を取るだなんて言うから！」

「それは、指揮を取れるだけの自信があったからだろう。伯父上殿を信じろ」

これ以上は言ってもしかたのないことだった。春蘭は、未だに警戒の色を宿す翠蓮と、不貞腐れ気味の玉翠をいかにして部屋に連れ帰るか頭を悩ませた。いっそのこと、白桃を出して、強引に二人を運ぶべきか。

「なんでもよいから、今は人のいる場所に――」

言い終えるより前に、春蘭は全身の毛が逆立つような感覚を覚えた。

――この感じは覚えがある。

「白桃！」

玉から真白い虎が顕現する。玉翠と翠蓮が息を呑む気配がした。

それと同時に、天井から黒い塊が落ちてくる。

見上げなければならないほどの巨軀に、それぞれが丸太のように太い四肢。全身を覆う黒い体毛は、一本一本がまるで針金のようだ。燭台の灯りに照らされた様は、まさに〝化け物〟と呼ぶに相応しい姿だった。

攫猿は周囲を確認するように見回し、春蘭たちに目を留めた。鋭い牙を見せつけるように口を開け、ひときわ大きな咆哮をあげる。

姉妹の手を強く握り締めた春蘭は、攫猿を睨みつけた。

「足止めをしろ、白桃！」

幼い声が飛ばす指示に高々と跳躍した白桃は、天井をひと蹴りし、攫猿の背に飛びつく。そして、鋭い牙をその肩に深々と突き刺した。

「ガアアアァァァ！」

攫猿が痛みに叫ぶ。

大虎を振り落とそうと必死に体をひねるが、白桃は牙だけでなく前脚の爪も肉を抉るように突き刺し

ている。攫猿は何度も体を揺すった。
「逃げるぞ！」
春蘭は恐怖に硬直する二人の手を引き、走った。
白桃が足止めする間に、警備兵と合流せねばならない。痛みを訴える両足など、気にしている余裕はなかった。
「翠蓮、中庭はどっちだ！」
「こ、こちらです！」
最初に屋敷を屋根の上から見た時、中庭に兵士たちが集められていた。あちらに向かえば、なんとか姉妹を守ることができる。
春蘭は走りながら考える。
白桃は大抵の妖と対等に戦える神獣だが、相手が攫猿ではさすがに足止めするのが精一杯だ。
少なくとも、洪采との戦闘を見る限りでは、白桃は攫猿に劣る。そのうち、怪我を負って玉に戻ってくるとわかっていた。それまでに兵と合流しなければならない。
「あっ！」
「翠蓮！」
「姉様！」
翠蓮と繋いでいた手が離れた。慌てて足を止めれば、翠蓮は回廊に蹲っている。
「大丈夫か？」
「え、ええ。でも、足が……」
「捻ったか？」
涙目で頷く翠蓮に、春蘭は聞こえないように舌打ちした。
「……玉翠。ぬしは先に行け」
「嫌よ、姉様を置いていけないわ！」
「違う。助けを呼んで来てほしいのだ。ぬしが一番早く動ける」
涙を零しながら唇を噛み締めた玉翠に、春蘭は笑みを向けた。
「心配するな。翠蓮は私が守る」
「わかった。すぐ戻るから！」

意を決したように頷いた玉翠は、猛然とした勢いで回廊を走り去る。その背を複雑な気持ちで見送った春蘭は、翠蓮に向き直った。

「すまん。玉翠の安全を優先した」

「いいえ……むしろ、お礼を言わねばなりませんわ。あの子は、私がいくら逃げろと言ったところで承知しなかったでしょう」

「だろうな」

「春蘭も私には構わずに逃げてください。少しならば、刻も稼げましょう」

気丈に微笑む翠蓮に対し、春蘭は今一度「すまない」と告げた。

「私は死ぬことはできぬ。守らねばならぬ者たちがいるのだ。だから、いざという時はぬしを見捨てる」

きっぱりと言い切れば、翠蓮は驚いたように目を瞠った。自分から提案したものの、春蘭の口から「見捨てる」とはっきりした言葉を聞くとは思わなかったのだろう。

「――だが、今はその時ではない」

「え？」

「立て、翠蓮。行くぞ」

手を引けば、翠蓮の双眸から涙が溢れた。いくら気丈な娘とはいえ、まだ十五。やはり見捨てられるのは辛かったのだろう。

「……先ほどは疑ってごめんなさい」

「よい。私に寄り掛かれ。少しでも距離を稼ぐぞ」

「はいっ」

回廊を曲がるが、まだ庭へと出られそうにはない。翠蓮は春蘭に寄り掛かりながら、苦しげに肩を上下させていた。また、春蘭自身も両膝に負った怪我のせいで、気を抜くと床に座り込んでしまいそうだった。

「……翠蓮、隠れられるような房はないか？」

「この、近くでですか？」

春蘭の足は限界だった。特に翠蓮を支えたままでは、いつ力尽きるとも限らない。ならば、歩けるう

ちに身を隠すのが得策だった。
「……確か、家人たちの部屋があります」
「よし、そこへ向かおう」
回廊が途切れたところにある房室に入った春蘭は、室内を見回した。寝台が左右に二つずつあり、正面の壁に衣裳をしまう大きな箪笥が置かれていた。
「翠蓮、急いで襦裙を脱げ」
「え、どうして……？」
「説明している暇はない。全部と言いたいところだが、私が持てなくなるからな」
困惑する翠蓮は、それでも春蘭の指示に従い襦裙の上衣と、腰裙を脱ぐ。内衣一枚になった翠蓮を一瞥した春蘭は、念のために髪を包む布と簪も取り払った。
「……追剝のようだな」と、苦笑しつつ翠蓮を寝台に押し込めると上から家人の袍を大量に被せた。
「攫猿は獣の性を持つ妖。おそらく、ぬしたちの匂いを辿ってくるはずだ。これで、ぬしの匂いはわからぬ。動かずにいれば気付かれることはないだろう」
「えっ、でも春蘭、あなたは……？」
「私一人ならばどうとでもなる。ぬしは誰かが来るまで、じっとしておるのだぞ」
それだけを告げると、春蘭は翠蓮が身にまとっていたものを大急ぎで両手で抱え、房室から飛び出した。制止する翠蓮の声が聞こえたが、かまってはいられない。
翠蓮を寝台に押し込めていた時、白桃の玉が光ったのだ。そして、中に戻る感覚。大きな傷を負ってしまったのだろう。
警備兵がかけつけたという気配がしない以上、まだ自由に姉妹を追っていると考えるべきだろう。今は一刻の猶予もならない。
「……私は愚かだな」
春蘭は、死ぬことを許されない。
邑に戻るため、なにを犠牲にしても生き延びて真

名を取り戻さなければならないのだ。そして、それが最優先すべき事柄であると、心の底から痛いほど理解していた。

だが、〝春蘭〟は翠蓮を見捨てることができなかった。

〝助けて〟と、翠蓮の目は物語っていた。

願われたら、乞われたら、春蘭はそれがたとえ守護すべき民以外であっても、見捨てることはできなかった。

守り神としての性か、と春蘭は苦笑する。人に戻った今でも、その精神は心に深く根付いているようだ。

「それに、だ。死ななければよいの、だ！」

春蘭は手に持っていた物を、一つずつ回廊に投げ捨てはじめた。

翠蓮が隠れている房室からは、まださほど離れていない。確実に攫猿に春蘭の後を追わせるためには、匂いの目印となるものを点々と落として行った方がいい。

まずは重い腰裙を、次に上衣を、腰紐を、と一定の間隔を開けて投げ捨て、最後は細かな銀細工が施された簪だけを持って必死に走った。

そして、回廊の先、ようやく中庭と思しき光景が見える場所にまで辿り着いた。あと少しで外だ、と思った瞬間、背後から凄まじい圧迫を感じた。

「――見つかった、か」

春蘭は振り返らず一心に足を動かす。攫猿の位置を確認したところで意味はないのだ。ならば、ひたすら走り続けた方がいい。

だが、あとわずかというところで、春蘭の足がもつれた。

勢いを殺し切れず、飛ぶようにして床に激突する。その瞬間、握っていた簪が春蘭の手を離れ、回廊の床を回転しながら滑っていく。

駄目か、と感じた時だった。

背後から迫っていた圧迫感が、春蘭の頭上を飛び

越えた。

「――は？」

攫猿は春蘭に見向きもせず、床を滑る簪を追い掛ける。壁にぶつかって停止したそれを拾い上げ、食い入るように見詰め始めた。

なぜかはわからない。

だが、攫猿は簪を目指して追ってきていたのだ。逃げるなら、今しかない。

掌を握り締めた春蘭は、うつ伏せの体勢でじりじりと攫猿の脇を通りすぎた。外まで、あとわずか。

ゆっくり、ゆっくり。

気付かれないように慎重に。

攫猿から視線を離さず、春蘭は徐々に距離を開けていく。

あと少し、もう少し。

気付くな気付くな、と心の中で念じながら春蘭は小さく丸まった。そして、腕と足に力を込める。そのまま立ち上がろうとした時。

攫猿の首だけがこちらを向いた。

「くそっ！」

舌打ちを堪え、春蘭はすぐに立ち上がった。だが全速力で走った反動か、両足に力が入らずその場で崩れ落ちてしまう。

低い唸り声をあげた攫猿が、春蘭に向かって飛び掛かろうとした時だった。

春蘭の耳元を、びゅんと空を切る鋭い音が走る。

次の瞬間、攫猿の右目に一本の矢が突き刺さっていた。攫猿が太い腕で目元を覆う。

春蘭はその隙を逃がさなかった。

力の入らない両足を叱咤し、気力を振り絞って回廊を駆ける。

だが細い矢尻では、攫猿に致命傷を与えることはできない。春蘭が振り向けば、右目に刺さった矢を引き抜いた攫猿が、猛然と襲い掛かってくるところだった。

――あと少し。

飛び出すように回廊を出た春蘭の体は、横から伸びた手によって手繰り寄せられた。見上げる先には、普段のぼんやりとした様からは想像できない、引き締まった表情の仲望の顔があった。仲望の腕で安堵の溜息をつく。

はっと視線を戻すと、攫猿に向けて大刀を構えた子慮の背が見えた。

「俺様がぶった斬ってやるよ、化け物め！」

渾身の力で突き出された大刀の切っ先は、攫猿の左腕を切断した。大量の血が噴き出し、攫猿の絶叫が夜空を震わせる。

「ふはははは！　恐れ入ったかっ！」

やがて、攫猿の声を聞きつけた警備兵が、一人また一人と集まってくる。退路を断たれた攫猿は、ぐるりと周囲を見回した。

そして、ある一点で目を留めた。

視線の先には、青褪めた少女の姿。

「逃げろ、玉翠！」

春蘭が叫ぶと同時に、攫猿も動いた。兵を薙ぎ倒し、玉翠に向かって真っ直ぐ突き進む。

中庭に面した回廊に立っていた玉翠は、恐怖のあまり足が震えて動けない様子だった。少女を守ろうと駆け寄る兵士より先に、攫猿の手が玉翠の体を攫った。

「きゃあああ！」

玉翠の悲鳴が中庭に木霊する。必死に逃げようともがくが、細い首を手で摑まれているため離れることは叶わない。

攫猿は周囲に対して、玉翠を見せつけるように掲げた。まるで、手を出せば玉翠を殺すと脅しているようだ。いや、実際そのつもりなのだろう。

攫猿の知能は、人が思っている以上に高い。言葉を話すことはできないが、人語を解することは可能だった。だからこそ、今まで捕まることなく逃げ切れていたのだ。

攫猿が威嚇する度、兵士たちは後ずさる。大刀を

構えた子慮も、攻めあぐねている様子だった。
——玉翠は花興奏の姪。
その事実が、場にいる者たちの動きを鈍らせていた。
包囲網に綻びが生じる。攫猿は玉翠を懐に抱え込むと、一瞬で瓦の上に飛び乗った。
中には弓に矢を番える兵もいるが、玉翠に当たることを恐れ射ることはできない。誰もが手を出せずにいる中、攫猿は真っ赤な口内を見せ、嘲るように嗤うと暗闇の中に姿を没した。
「あああああっ、お嬢様が！」
顔を真っ青にした子慮が、慌てて仲望に詰め寄った。
「てめぇ、なんで攫猿を射ねぇんだよ！　禁軍一の弓の遣い手じゃなかったのか！　攫われちまったじゃねぇか！」
「むり言うな」
「ああ、もう、なんでてめぇは、こんな時でも面倒臭そうな顔してんだ！」
子慮の一方的な言い掛かりに、仲望は顔を顰める。その傍らでは、文重が「なにやってんですか！」と声を荒らげていた。
「白桃、あれを止めろ」
玉から白桃を呼び出すと、白い大虎が二人に圧し掛かった。大怪我を負った白桃だったが、玉の内で動ける程度には回復したようだ。
「わっ」
「なんっ」
「バウ」
白桃は猫のように、仲望と子慮の顔中を舐め回す。
突然、現れた大虎に兵士たちは混乱するが、害意がないと知ると遠巻きに見守るに止まった。そんな中、春蘭は片足を引き摺るようにして近付く。
「頭を冷やせ、馬鹿者。なんなら、白桃に命じて池に放り込んでやってもよいのだぞ」
冷ややかな眼差しで見つめれば、子慮は押し黙っ

た。だが、この場に春蘭がいる不思議にようやく気付いたのか、訝しげに首を捻った。
「なんでちびっ子がいるんだ？」
「隊長！　もっと驚いてくださいよ！　春蘭、君もここは危険なんだよ。子供がいていい場所じゃないんだよ！」
　焦る文重に、春蘭は溜息を一つ零し、それを無視する形で白桃の背を労わるように撫でた。
　彼らは自分のことを子供だと思っている。それは、どれほど言葉を尽くしたところで、覆すことは難しい。ならば、まともに取り合っても無駄だ。
「白桃。回復し切らぬところをすまぬが、攫猿を追ってくれるか？」
「バウゥ」
　平気だ、というように白桃は春蘭の頬を舐めた。白桃の了承を得た春蘭は、再び子慮と仲望に顔を向ける。文重はそこで初めて白桃に気付いたようで、顔を真っ青にして硬直していた。
「攫猿はあの傷だ、わずかの間にそう遠くへは逃げられまい。血の匂いは強烈だ。白桃ならば見つけ出すことができる」
「バウ！」
「――というわけだ。攫猿から玉翠を取り戻すのは、そなたらの仕事だぞ。わかったら、さっさと馬の準備にかかれ」
　春蘭の声を合図に、成り行きを見守っていた兵士たちが慌ただしく動き始めた。普段ならば、子供にしか見えない春蘭の命令など誰も聞かなかっただろう。
　しかし、兵士たちの頭は混乱の極みにあった。そこに威厳のある声で――たとえそれが少女のものだったとしても――命じられれば、訓練された兵士の性。とっさに従ってしまうのである。
　そして、それは茫然と眺めていた子慮も同じだった。今はなにを優先するべきかわかったのだろう。不本意そうではあるが、文重や警備の兵士たちに指

示を飛ばしはじめた。

　こうしている間も玉翠の命は危険にさらされている。攫猿は、妖の中でも頭がよい。むしろ、知能は人のそれに近い。おそらく、華安から出るまで、まだ逃げ切れたという確信を持てないはずだ。人質としての価値があるのは、その間だけだ。

　人質が必要なくなったと判断した場合、攫猿は躊躇いなく玉翠を殺すだろう。怪我の具合から見て、一度も休まずに移動し続けるのは難しいはず。いくら頑丈な体をもつ攫猿でも、大量の血を失ったら死んでしまう。追いつくとすれば、その時しかない。追跡の準備を整える者たちを見詰めながら、春蘭はじりじりとした焦りを感じていた。

　受けた傷を少しでも回復させるために、白桃を玉に戻したところで、仲望が傍らに立った。

「大丈夫か？」

「……平気そうに見えたら、ぬしの目は節穴だな」

　全身の至るところが痛みを訴えているため、どこに怪我を負ったのかすらわからない状況だ。だが、悠長に手当をしている暇はない。

「先ほどは助かった。礼を言うぞ」

「まあ、よかったよ。でも、なぜここに？」

「虫の報せがあっての」

「ふうん」

　仲望の意味深な視線に戸惑う春蘭の視界に、袍をまとった翠蓮の姿が映った。その脇には、右肩に怪我を負った初老の男性の姿もある。

「翠蓮！」

「ああ、春蘭！」

　よかった、無事だったのね、と翠蓮は瞳を潤ませる。春蘭は、翠蓮に伝えなければならないことがあった。

「翠蓮。落ち着いて聞け。玉翠が攫猿に攫われた」

　切れ長の瞳が大きく見開かれ、翠蓮は糸が切れたようにその場に膝をついた。今にも倒れそうな翠蓮を支え、春蘭は励ますように声をかける。

「落ち着け。まだ望みはある」
「で、でも……ぎょく、すい、いや……だって、あの子がいないと、わたしは、わたしは……」
「翠蓮！　私を見ろ！」
いやいや、と首を振る翠蓮の頬を両手で押さえ、春蘭はその瞳を覗き込んだ。
「攫猿が逃げても居場所はわかる。あとは、兵士たちが玉翠を助ける。ぬしは玉翠の無事を祈っていてくれ」
「……春蘭っ」
いきなり抱きついてきた翠蓮を受け止め、春蘭はできるだけ優しく震える背を撫でた。そこで、閒かなくてはならないことを思い出した。
「翠蓮。ぬしの簪は、どこで買ったものだ？」
「かん、ざ、し？」
涙声で応じる翠蓮は、なにを問われているのかわからない様子だった。
攫猿は翠蓮の簪に、異常なまでの執着をもってい た。
「そうだ。ぬしが髪に挿していた、銀の簪だ」
「あれは……」
必死になって思い出そうと眉を顰めた翠蓮の代わりに答えたのは、右肩に怪我を負った初老の男性だった。
「さる方から頂いたものだ。翠蓮にちょうどよいと思い与えた」
誰だと翠蓮に眼差しを向ければ、「伯父ですわ」と答えが返ってきた。
「花家の当主殿か」
「いかにも」
「私は李春蘭。鄭家の客だ。翠蓮と玉翠とは、とある縁から友として付き合っている」
「花興奏だ。翠蓮から話は聞いた。命を賭して姪たちを救ってくれたことに感謝する」
深々と拱手され、相手が相手なだけに普通の者ならば慌てるところだが、春蘭は鷹揚に頷いただけ

だった。
「その怪我では動くこともままならぬだろう。手当したらどうなのだ？」
　攫猿の爪に抉られたらしい興奏の右肩は、未だ血を滲ませている。家人たちが顔を真っ青にして手当しようとするが、興奏はそれを撥ね除けていた。
「不要だ。わしはこのままで玉翠を待つ」
「血の流しすぎで死んでしまったらどうするつもりだ。無事で戻ってきた玉翠を泣かせるつもりか。ぬしらも、おろおろしていないで、取り押さえてでも手当してしまえ」
　春蘭の言葉に後押しされたのか、興奏はあっという間に家人たちに取り押さえられ、問答無用とばかりに奥へと連れ去られてしまった。
「翠蓮も、伯父上殿の許へ行っておれ」
「春蘭、あなたも行かれるのですか……？」
「私にも役目がある。なに、攫猿と相対するつもりはない。心配するな」
　ほろほろと涙を零す翠蓮の頭を、春蘭は腕で覆うように抱きかかえる。そして、言い聞かせるように囁いた。
「心配するなとは言わぬ。だが、私が行かねばならぬのだ。玉翠は、きっと連れ帰る」
　春蘭は家人たちに翠蓮を預けると、待っていた仲望に抱え上げられ門前へと向かった。そこには、馬に乗った兵士たちの姿がある。
「――準備が整ったぞ」
　そう告げた子慮に、春蘭も頷いた。
「白桃」と呼び、仲望に支えられながら背に跨る。今の春蘭には、自力で白桃にしがみつけるだけの力は残っていない。代わりに、仲望が白桃の背に跨った。片手で白桃に縋り、もう片方の手で春蘭を抱きかかえる。
「振り落とされるではないぞ」
　夜空に漂う、わずかな匂いの残滓。
　唇を引き締めた春蘭は、「行け、白桃！」と告げた。



玉翠（ぎょくすい）はできる限り息を殺し、半壊した房の隅で震える体を丸めていた。

暗闇の中、同じ房の真ん中では、攫猿（かくえん）が体中に負った傷を丹念に舐めている最中だった。

切断された片腕から流れ出ていた血も、今は止まっている。はじめはそのまま死んでくれるのではないかと期待したのだが、そんな気配はまったくなかった。かと言って、逃げたところで、すぐに追いつかれるのが関の山だろう。

連れて来られた屋敷は、まるで盗賊が押し入ったあとのような有様だった。屋敷の広さ、そして、しっかりとした造りから、貴族や高官、もしくは皇族の住処（すみか）であった場所かもしれない、と玉翠は推測した。

人が住んでいるような気配はなく、打ち捨てられてからかなりの年月が経っているようだ。大声で助けを求めたところで、声の届く範囲に人がいるとは思えなかった。

逃走経路を探し、玉翠はそっと房内を見渡した。辺りには調度品の一つもなく、武器になりそうな物もない。すべて持ち去られてしまったあとのようだ。房内に出入り口は一つしかなく、それを塞ぐようにして攫猿が陣取っている。

――姉様は無事だろうか。

春蘭（しゅんらん）の姿は見たが、その傍らに姉の姿はなかった。なぜ、どうして、という言葉がのどまで出掛かったのを覚えている。

でも、春蘭は翠蓮（すいれん）を守ると言ってくれた。ならばきっと姉は無事なのだ、と玉翠は自分に言い聞かせ

た。

それに、春蘭が翠蓮を見捨てたのだとしても、自分に責める権利はない。

助けを呼んで来ると言ったのに、結局、戻ることはできなかった。二人を助けて、と頼んだのに、誰もが屋内という狭い場所での交戦は危険だと口にした。ならばと自分一人で屋敷に戻ろうとしても、それを阻まれ、結局見ていることしかできなかった。

攫猿に捕らわれた時も同じだ。逃げればよかったのに、恐怖のあまり両足がすくんで動けなかった。気付いたら攫猿に捕らわれていて、そのせいで、誰も攫猿に攻撃を仕掛けることができなくなってしまった。

自分が人質にされたことに玉翠が気付いたのは、ここに来て気持ちが落ち着いてからだ。

攫猿に殺されたという子女たちのことが頭を過った。このままでは、きっと自分も遠からず同じ目に遭う。

――死にたくない。

玉翠の頬を涙が伝う。必死で嗚咽を殺して、体をより小さく丸める。攫猿は傷を一通り舐め終えたあと、なぜか自分の右手に視線を注いでいた。食い入るように、なにかを凝視している。

玉翠がいる場所からは、攫猿の手元がよく見えない。そもそも灯りのない部屋なのだ、たとえ見えても、そこになにがあるのかまではわからなかっただろう。ただ、その視線が哀愁を帯びているように感じられた。

不意に、攫猿が顔を上げた。攫猿から視線を離さなかった玉翠は、反射的に体を揺らした。

穴の空いた天井からは、雲に覆われた空が垣間見える。その穴を凝視していた攫猿だったが、低い唸り声をあげる。

いよいよ殺されてしまうのではないか。込み上げてくる恐怖に震えていると、玉翠は毛深い腕に抱え上げられ、気付いた時には屋根に上っていた。

攫猿は夜空に向け、轟音のような遠吠えを放った。同時に、腕に抱えていた玉翠の体を見せつけるように掲げる。

玉翠が恐怖から悲鳴をあげようとした時、凛とした声が耳朶に響いた。

「――玉翠を離せ、愚か者が」

攫猿に抱えられた玉翠はたくさん泣いたのだろう、顔を涙でぐしゃぐしゃにし、救いを求めて春蘭を見ていた。

待っていろ、と春蘭は心中で呟く。

攫猿が潜んでいたのは、無人の廃屋だった。家主が屋敷を手放したあと、買い手がつかなかったのだろう、とは仲望の言だ。

屋敷の周囲には、龍乎と花家の警備兵の混成部隊が包囲網を敷いている。攫猿が逃げた場合、弓矢で威嚇する手筈となっていた。

玉翠を抱えて周囲を見回す攫猿は、必死で逃げ道を探しているようだった。だが、松明に赤々と照らし出された周囲には逃げ場はない。そのうえ、左腕を失くした今、唯一の武器である右腕は玉翠によって塞がれていた。

攫猿にできるのは人質を盾にすることだけ。

春蘭は白桃の体を支えとしながら、攫猿から少し距離を開けた屋根の上に立っていた。その隣には、仲望の姿もある。

「仲望。作戦通りに行くぞ」

「はいはい」

仲望が、下に控える兵士たちに見えるように、片手に持った松明を左右に振り合図を送る。

空を裂くように、兵士たちの放った矢が攫猿を狙う。わざと狙いを逸らした矢が、攫猿の周りを飛んでいく。それに意識を取られた攫猿は、視界を失った右側から接近する子慮の存在に気付くのが遅れた。

言葉もなく、大刀が攫猿の右腕に振り下ろされる。

攫猿は、とっさに玉翠を手放すことでそれを避けた。
玉翠の細い体が宙を舞う。
「――白桃！」
春蘭の命を受けた白桃は、落下する玉翠目掛けて跳躍した。
玉翠の体が地面に激突する寸前、白桃は腰紐に牙を引っ掛ける。そして、玉翠を銜えたまま重さを感じさせぬ動きで春蘭の許へと戻ってきた。
瞬く間の出来事に思考が追いつかないのだろう。茫然とした様子の玉翠は、春蘭の顔を見てはっと我に返ったようだった。泣きながら春蘭に抱きつく。
「よく頑張ったな」
「あ、あ、あああああっ。しゅ、しゅんら、ん」
「翠蓮も伯父上殿も無事だ。もう少し待っていろ。すぐに屋敷に戻してやる」
春蘭は玉翠の背を撫でながら、追い詰められる攫猿から視線を離さなかった。
大刀を縦横無尽に振るう子慮に対し、攫猿は防戦一方に追い込まれている。時折、攫猿の集中を乱すために兵士たちが矢を射掛け、わずかな隙をついて子慮がその巨体に傷を刻む。
決定的な一撃を与えるまでにはいかないが、それでも勝敗は明らかのように思えた。子慮は普段の短気な性格とは裏腹に、慎重に攫猿から体力を奪い、確実にとどめを刺そうとしている。
誰もが――春蘭でさえ、攫猿の終焉を疑わなかった。
だが、それは突然現れた覆面の男によって覆された。
どこからともなく屋根に現れた男は、槍を携えていた。男は攫猿ではなく、子慮に槍の切っ先を向ける。鋭い突きに、子慮は男と攫猿から距離を取らざるを得ない。
そして、その隙を逃す攫猿ではなかった。
片腕とは思えない素早さで屋根から飛び降りると、包囲網の一端を崩し、そのまま逃走に移った。これ

までのように屋根を使えば、弓矢の餌食になると考えたのだろう。

ある兵士は鈍器のような右腕に体を吹き飛ばされ、ある兵士は強靭なあごに頭蓋を噛み砕かれた。槍や弓も、本能を剝き出しにした攫猿に対してはまったく意味を成さなかった。

包囲網を突破した攫猿は、そのまま通りを疾駆する。矢を射掛ける者もいたが、それは攫猿の足を止めるには至らない。龍乎兵が馬に跨り攫猿を追う姿が春蘭の視界に映った。

だが、このままでは追いつけまい。春蘭は屋上の交戦に目を戻した。

攫猿を取り逃がす要因を作った覆面の男は、屋根の上で子慮と刃を交わしていた。

大刀と槍の穂先がぶつかり合い、火花を散らす。覆面の男の全身からは、淡い光が立ち上っていた。闇が濃い分、離れていてもはっきりと見ることができる。あれは、気術だ。それを駆使しているため、さすがの子慮も押され気味であった。

だが、ここで思わぬ助けが入った。玉翠が攫われたという一報を受けた楊秀が、単騎で駆けつけてきたのだ。

形勢は逆転。覆面の男は、二人の猛攻に遭い防戦を強いられる展開となった。

「ううむ……さて、どうしたものか」

「春蘭？」

春蘭に抱きついたままの玉翠が、不思議そうに首を傾げた。

子慮たちと交戦中の男を春蘭は知っていた。槍を遣い、気術を駆使する細身の青年。彼の言う通り気術士がそんなにいないのであれば、あれはこの間、毒入りの肉饅頭を土産にくれた青年だろう。

「いや、こちらの話だ……ん、玉翠？　手になにを持っておるのだ？」

「え？」

玉翠が右手で握り締めていたのは、安物の首飾り

だった。
　小指の爪よりも小さな赤い石が嵌められたそれは、市でもよく売っているものだ。春蘭も遠巻きに見たことがある。
「あ、これは攫猿の腕につけられていたものみたい。偶々摑んだの。そっか……攫猿は、これを見ていたんだわ」
「攫猿が？」
　明らかに女物と思える首飾りを、なぜ攫猿が腕に嵌めていたのだろうか。それを受け取った春蘭は、目の前に翳して繁々と見やる。
「簪に、首飾り……はて」
　どういう意味だろうな、と呟いた時、楊秀と対峙していた覆面の男が、轟音を立てて春蘭たちのすぐ脇に投げ飛ばされてきた。
「くそっ、んだあの馬鹿力っ」
　悪態をつく声は、やはり聞き覚えのあるものだった。ここは知らない振りをした方が賢明か、と春蘭が悩んでいると、白桃と仲望が男との間に体を滑り込ませてきた。
「うおっ、なんで屋根に人と虎が……って、お嬢ちゃんなんで生きてんの？　もしかして、毒が効かない体質だったりすんの？　あんた、本当に人間？」
「この馬鹿者が」
　せっかく知らぬ振りをしてやろうと思ったのに、これでは水の泡だ。冷めた視線で睨めば、洪釆はやってしまったとばかりに天を仰いだ。
「あー、すまん。いや、さすがの俺も仰天してさ」
「毒殺を仕掛けた相手から謝罪されても不愉快だ」
「いや、まあ、それもあるけど、な？」
「にやにやするな」
　自分で殺し掛けておきながら、生きていることを喜ぶ洪釆の声は純粋に弾んでいて……あれは本意ではなかったということか、と春蘭は納得した。どうやら洪釆には、指示を出している人物がいるようだ。
「あー、でも、結局殺さなきゃいけないんだわ。す

まん」
「そう易々と殺されてやるつもりはない」
「だよなー、って――え？」
洪采の目が、春蘭の手に釘づけになった。食い入るように見詰める先には、攫猿が身につけていた首飾りがある。
「それ、を、どこ、で」
「攫猿が身につけていたものだが……見覚えがあるのか？」
「……なん、で」
愕然とする洪采だったが、はっとした表情で槍を構え直した。
屋根伝いに辿り着いた楊秀が、偃月刀を振りかぶる。すんでのところでそれを受け止めた洪采には、先ほどまでの俊敏な動きは見られなかった。
防戦に徹する洪采は、両足に気を移動させるなり後退するように高々と跳躍した。そして、追い縋ろうとする楊秀の足許目掛け匕首を投擲する。
反射的に動きを止めた楊秀は、一瞬の間に開いてしまった距離に舌打ちした。今から追っても洪采を捕らえることはできない、と冷静に判断を下したようだ。
春蘭は首飾りをじっと見つめた。
この首飾りのなにが、それほどまでに洪采を動揺させたというのか。
「わからぬな……」
呟くと、ぽつり、ぽつりと水滴が頬を濡らした。夜空を見上げれば、糸を引くようにして雨が降り始める。
それに、春蘭は眉を寄せた。
「雨か……天は攫猿に味方したらしい」
雨によって血の匂いは洗い流され、白桃ですら追跡は不可能となるだろう。
玉翠を助けられただけでも幸いか、と思い直した春蘭だったが、自分を見詰める楊秀の冷ややかな眼差しに気付き、思わず体を硬直させた。

「……うむ。あれだ。きっと人違いだ」
「なぜ猩猩緋と顔見知りなのか、話は屋敷に戻ってから、じっくりと聞くことにしよう」
これは洗い浚い吐かされることになりそうだ、と春蘭は嘆息したのだった。

初めて通る、隠し通路。
人一人がやっと通れるほどの隙間を、洪釆は急かされるように走る。この通路の使用は緊急時に限られていたが、今はそれどころではない。
春蘭が手にしていた首飾り。
あれは、自分が彼女に贈ったものだ。安物の石をきれいな紐に結わえただけの、首飾りと呼ぶには簡素すぎるそれ。
嬉しいと喜んでくれた彼女は、常にその首飾りを身につけていてくれた。遠く離れていても、傍にいられるように、と。

なぜ、それを攫猿が持っていたのか。
「兎天殿！」
広間を通り抜け、その奥にある房室の扉を開けると、小部屋の隅で机に向かう兎天の姿があった。あいかわらずの鬼面姿だ。
書面をしたためている途中であったのか、手には筆を持っている。寝台は乱れた形跡もなく、夜通し起きていたのだと推測された。
「洪釆。その通路は、緊急時のみの使用に限ると言ったでしょう。好き勝手に使うものではありませんよ」
顔を向けることなく、兎天は訪問者に答える。荒い息を整えるのももどかしく、洪釆は感情のままに言葉を吐き出す。
「どういうことだ」
「なにが、です？」
「攫猿だ。梁華の首飾りを持っていた」
「……」

沈黙が答えとなった。洪采は兎天に詰め寄り、胸座を摑み上げる。

「なにを隠している？」

「……なにも」

「ならば、なぜ、本山にいるはずの梁華の首飾りを、攫猿が持っているんだ！」

兎天は洪采の手を摑み、自分の胸座より離す。その抵抗を赦さぬ力に、洪采は歯軋りした。猩猩緋において、一、二を争う実力の持ち主である洪采ですら、兎天には敵う気がしない。

「……紅主は知っているのか？」

「もちろんです。すべての命は紅主より出ているのですから」

「ならば、紅主は……梁華が攫猿に攫われたと知っていたのか。知りつつも、他の者には秘していたのか？　なぜだ」

やはり、兎天はなにも答えなかった。言わなくても、その理由はわかるだろうというように。洪采は唇を噛み締める。

「梁華を切り捨てたのか」

「……当時、彼女の捜索に人を回す余裕はありませんでした」

確かに相手が攫猿ともなれば、捜索する人手も一人や二人では済まないだろう。また、妖と互角以上に戦える者など数えるくらいしかいない。

「なぜ俺に教えてくれなかった。俺一人ならば、いくら動いたところで誰にも悟られなかったはずだ」

「あなたはあの時、任務中でした。それを蹴ることは許されなかった」

猩猩緋の中でも数少ない気術士である洪采は、重要な仕事を任されることが多かった。もしも梁華のことを聞かされれば、任務を放り出してでも駆けつけただろう。

「すべては猩猩緋――いえ、世のためです」

「大事の前の小事ということか。だが……」

洪采は言葉を切った。正確には、続ける言葉が見

当たらなかった。

紅主と兎天の判断は正しい。

小事のせいで、大事を失敗したのでは意味がない。

しかし、それを上回るほどの怒り、悲しみ、そして苦しみが洪釆を苦しめる。最後に見た、梁華の悲しげな笑みが脳裏を過った。

「命令です。攫猿を殺しなさい」

「なぜだ。今までは、生かして捕らえろという話ではなかったのか？」

今まで、頑ななまでに攫猿を捕らえろと言っていた兎天。それが、なぜここにきて方針を変えるのか。

「命令です」

「……わかった。だが、なぜ紅主は攫猿を追っている？　放っておけば、禁軍の兵でも龍乎でも、勝手に殺してくれるだろ」

「それは……」

兎天は洪釆を一瞥したあと、珍しく迷うように言い淀んだ。燭台の灯りが、鬼面に深い影を落とす。

「いえ……そうですね。あなたには、知る権利がある」

兎天は洪釆の耳に顔を寄せた。その耳元で衝撃的な事実が語られる。予想もしていなかったそれに、洪釆は顔を歪めた。

「まさか……」

「それが、攫猿を捕らえる理由です。もっとも、捕縛が困難になった以上、殺して口を封じるしかありません。次は私も同行しましょう」

それだけを告げると、兎天はまた机へと向かった。洪釆はなにも言えず、ふらつく足取りで房室を出る。広間に出た瞬間、洪釆は音もなくその場に崩れ落ちた。

「梁華……」

知らず、涙が頬を伝う。

梁華と二人、猩猩緋に身を投じたのは、生きて行くためだった。それが、いつか紅主を助けたいという気持ちに変わった。

「梁華」

呟きは泡の如く闇へと消える。それでもなお、洪采は愛しき者の名を口にせずにはいられなかった。

――朝日が眩しい。

昨夜の尋問のせいで疲労困憊の春蘭だったが、帰ってくるなり、寝ずに待っていた啓璋と友寧の二人に質問攻めに合ったのだ。

むろん、それは無事に戻ってきた仲望を見た途端、感涙の声に変わったが。そのまま泣き疲れた二人は眠ってしまい、春蘭も気絶するように意識を失ったのだった。

目が覚めたら寝台の上にいたので、おそらく仲望か楊秀が運んでくれたのだろう。

三日前の怪我が可愛いものだと思えるくらいの筋肉痛に苛まれながら、春蘭はなんとか食事を終えることができた。

「おい、春蘭」

〝春蘭〟と、初めて名を呼んだ啓璋は、ぶっきらぼうな口調で告げた。

「旦那様のこと。礼を言う」

「礼を言う口調ではないな」

「う、うるせぇ！」

厨房でじたばたと騒いでいると、薪割りを終えた友寧が顔を出した。そして、春蘭を見ると恥ずかしそうに微笑む。

「あの、春蘭。昨夜はごめんね。それと、ありがとう」

どこか吹っ切れたような友寧に、春蘭も笑みを返した。

「あ、それと食い扶持とは関係ねぇからな。怪我が治ったら、ちゃんと稼いで来いよ！」

「もう、啓璋ったら！　どうしてそんな意地悪言うの！」

顔を真っ赤にして怒鳴り合う二人に溜息をつき、

春蘭は厨房をあとにした。

体調がよくないという理由で、もうひと眠りしようと目論んでいた春蘭だったが、それは待ちかまえていた楊秀によって阻まれてしまった。その隣には、眠たそうに欠伸をする仲望の姿もあった。

「知っていることは全部話した。もうなにもないぞ」

五日前、楊秀と仲望の後をつけたこと。そして、その際に攫猿に襲われ、郭洪釆という青年に助けられたこと。むろん毒殺されそうになった件も、包み隠さず話すはめになった。

さらに、尋問は白桃のことにまでおよび、春蘭は自身の事情まで語らざるを得なかった。しかし、嘘偽りなく語ったにもかかわらず、楊秀は春蘭のことを、たまたま神獣を持つ無謀な仲望の嫁として納得した。いい加減、嫁から離れてはくれないだろうか。

鄭玄楽の生存については、あいつならば生きていたところで不思議じゃない、の一言で終わってしまった。

「生きていると名乗りを上げないのは、死んだままにしておきたかったのだろう」と、楊秀は言った。それ以上、玄楽のことに対して言及することはなく、春蘭が求めるような情報は得られなかった。

もっとも、春蘭が守り神だということは、どれほど言葉を尽くしても信じようとはしなかったが。終いにはおかしなことを言うなと、説教されてしまったほどだ。

助けを求めるように仲望を見ても、わざとらしく視線を逸らされてしまい、結局、春蘭は楊秀の小言になけなしの体力を削られたのだった。

しかし、楊秀との話で、わかったことが一つある。洪釆は、猩猩緋と呼ばれる義賊の一味であるというのだ。

むろん、確証はない。

だが、実際に猩猩緋が攫猿を捕縛するために動いていたこと、素顔を見た春蘭を口封じのために殺害

しようとしたことから推測するに、その可能性は高いだろう、と楊秀は言った。

「いや、怪我の具合はどうかと思ってな」

「うむ。全身が痛いぞ」

中庭に面した回廊に座り、春蘭は頷いた。今では、どの痛みが膝のものなのかわからなくなっているほどだ。

「やはり攫猿は見つからなかったのか？」

「ああ」

春蘭の問いに応じたのは、右隣に座っていた楊秀だった。

「途中で見失ってしまったらしい。雨に降られたことが決め手だっただろうな。松明の灯りなしでの捜索は自殺行為だ。今は華安内の廃屋を中心に龍乎が捜索している」

「うむ。しかし……攫猿は、なにを目的としておるのだろうな」

目的がなければ、わざわざ自身の身を危険にさらすはずがない。本来、妖というものは山塀で暮らし、よほどの理由がない限り人里には姿を現さないものだ。

「目的、か」

「なにか知っておるのか？」

「いや……ただ、あの妖かは不明だが、ある邑が攫猿によって半壊させられたことを思い出してな」

楊秀の言葉に、春蘭は首を傾げた。なぜ、その邑は攫猿に襲われたのだろうか。その疑問に答えたのも楊秀だった。

「実は、その邑には攫猿の子を身籠もった女がいた。だが、ある時、何者かに殺害されてしまったらしい。攫猿は邑人の仕業だと思い、復讐のために邑を襲ったようだ」

「その攫猿が華安に？」

「攫猿がごろごろいなければ、同一のものだろう」

「ふむ……なぜ、華安まで来たのだろうな」

「それがわかれば苦労はない。もっとも、理由など

必要ないだろう。どうせ、攫猿は殺される定めにあるのだからな」

確かに必要はないかもしれない。

だが、攫猿が華安に来た理由が、春蘭は気にかかってしかたなかった。

「……のう、楊秀。攫猿を誘き出す方法があるといったら、協力するか？」

楊秀が驚きに目を瞠る。隣では、仲望が春蘭を咎めるように名を呼んだ。もっとも、それは春蘭の身を案じるというよりは、面倒事に巻き込まれる気配を察したからのようだ。

「私はどうしてもあの攫猿が哀れでならぬのだ。まるで、誰かを捜すように夜な夜な徘徊する、あの妖が」

片目を射られ、片腕を落とされ、それでも攫猿は山塀へ戻ることをしない。今もまた、どこかに身を潜め、夜が訪れるのを待っているはずだ。

華安に紛れ込んだ攫猿は、いずれ龍乎か猩猩緋の手によって成敗されることだろう。それでも、手負いの妖は最後まで足掻き、追い詰められ、そして、ぼろぼろになって死ぬ。

なぜか、春蘭はそれを哀れだと思わずにはいられなかった。

「だめだ」

予想していたとはいえ、一刀両断に即答されて春蘭は眉を寄せた。だが、ここで引き下がる気はない。

「よいのか？　猩猩緋に先を越されてしまうぞ」

「……作戦だけは聞こう」

「私が同行することが条件だ」

「子供を危険な場所に伴えるか！」

楊秀に言わせれば、花家の件に春蘭がかかわっていたこと自体、許し難い行為だったようだ。「お前の嫁なのだからなんとか言え」と、仲望にまで食って掛かっている。

「私は友寧と啓璋に約束したのだ。仲望を守ると。ぬしは、また攫猿退治に仲望を伴うつもりだろ

仲望の溜息を聞きつつ、春蘭は晴れ渡った空を見上げたのだった。

う？」

当然だ、とばかりに楊秀が頷いた。隣では、仲望が嫌そうに顔を顰めている。

「ならば、夜の街を手当たり次第に見て回るよりも、より確実に攫猿を退治できる方がよいだろう。今回、また攫猿に逃げられたことで、禁軍の評判はがた落ちだ。確実に誘き出すことができるのだぞ？　むろん、私には白桃がいる。ぬしが思うよりも遥かに安全だ」

ぐっと押し黙った楊秀だったが、苦虫を嚙み潰したような表情をしたあと、唸るような声を漏らした。

「それは、確実なのだろうな？」

「保証はできぬぞ。だが、攫猿はきっと来るだろう。来ずにはいられまいよ」

きつく目を瞑った楊秀は、しばらくの思案の後、渋々といった様子で頷いた。そして、忌々しげな表情で春蘭ではなく仲望を睨みつけた。

「お前の嫁だ。傷一つつけるなよ」



華安の花街で、百年以上も続く黄海楼。

中庭の四方を囲うようにして建てられた三階建ての楼閣では、連日にわたり煌びやかな宴がもよおされていた。

即席の床が用意された中庭で舞うのは、幼さの残る美しい少女。琴の音に合わせ、蝶が舞うように真っ白な袍の袖をはためかせる。

上等な生地で仕立てられた袍には、金糸で刺繍が施され、同じく揃いの刺繍が施された赤い帯を腰に締めていた。白い生地に生える赤の、なんと艶めかしいことか。

見事に結い上げられた黒い髪には、銀細工が施された簪が挿され、少女の動きに合わせ軽やかな音を奏でていた。

唯一、そのほっそりとした首から提げられた安物の首飾りだけが、違和感を添えていた――。

春蘭が条件として上げたのが、攫猿と大立ち回りを演じられるくらい広い場所であること。また、兵士の姿があれば攫猿が警戒しかねないため、彼らが隠れられる空間があること。

そして、天井のない吹き抜けとなっている場所、という三つだった。

協議の結果、楊秀が提案したのが、花街の妓楼である。

そこならば、兵士は客に扮して紛れ込ませることができ、武器も隠しやすい。また、吹き抜けの中庭があり、戦闘となっても広さに問題はない。

話は楊秀がつけてくれた。華安を騒がせている攫猿には、花街の者たちも脅える日々を過ごしていたようだ。妖を退治することと、損害は禁軍が補償することを告げると、喜んで場を貸し出すとの了承が得られた。

客役はいくらでも兵士がいるが、妓女となるとそうはいかない。頭を悩ませる楊秀に、危険を承知で黄海楼の娘たちは協力を申し出た。肝の据わった美女たちである。

「作戦を開始して、すでに三日か」

真っ白な袍と、赤い帯を腰に締めた春蘭は、化粧が施された姿で中庭の隅に立っていた。その傍らには、楽人に扮した仲望と楊秀の姿もある。

「……本当に来るのだろうな？」

「むろん。ここ三日は雨も降らず、時折ちょうどよい風が吹いておった。攫猿の嗅覚は鋭い。すでに、ここを嗅ぎつけておるだろうよ」

「ならば、なぜ姿を現さない？」

「警戒しておるのだ。これが罠だと勘付いているやもしれぬな」

それでは、このまま姿を現さないのではないか、と楊秀は疑いの眼差しを春蘭に向けた。

「来ずにはいられぬのだ。これまでがそうであったように」

花家の物々しい警備に、それでも攫猿は怯まずに向かってきた。たとえこれが罠だとわかっていても、攫猿は躊躇わずにやってくるだろう。

「だが、攫猿は手負いだ。以前よりも警戒心が強くなっているのではないか？」

「だから、兵を隠したのだ。罠かもしれない。どうしよう。でも、兵士の姿はない――じっとこちらを窺っていた攫猿は、動くだろうよ」

「そうであってほしいものだ」

そろそろだな、と春蘭が中庭を見回していると、仲望が不思議そうに訊ねてきた。

「しかし、春蘭はどこで舞いを覚えたんだ？」

「私が生まれ育った邑では、豊穣祭の際、若い娘たちが神に舞いを捧げていた。私も幾度か踊ったことがあっただけだ」

意外と覚えているものだ、と春蘭は笑った。それに、春蘭の守護する邑の娘たちも、豊穣祭に見事な舞いを披露してくれた。振りつけは違うが、あれはあれで美しいものだった。

「そういう仲望こそ、琴を弾けるとは思わなかったぞ」

「嗜みとして、小さい頃に覚えさせられたんだ」

「うむ。たまに音を外すのはご愛嬌だな」

楽人たちも、楊秀が用意した兵士たちだ。兵の中で楽の心得がある者たちを募ったのだという。そして、楊秀当人は楽人の中にありながら、横笛を吹く振りをしている。戦場に笛の音は必要ない、というのが楊秀の主張だ。

「さて、刻限だ。今日こそは攫猿が現れるやもしれぬ。気を抜くなよ」

春蘭は、翠蓮から借り受けた簪を髪に挿し直し、観衆が見守る舞台へと歩き出した。

変異があったのは、一曲目も終盤に差しかかった頃だった。この季節にしては、生温かい空気が春蘭の頬を嬲った。

そこに混じる、わずかな獣の匂い。

きたか、と春蘭は唇を引き結んだ。舞う振りをして背後を向けば、楊秀と仲望もそれに気付いたように頷いた。

扇を頭上に放り投げる。

それが、座敷で客の振りをする兵士たちへの合図だ。妓女たちも心得たとばかりに中庭に面した房の奥へと移動する。

春蘭は舞う。

吹き抜け、その切り取られたような夜空を見上げ、舞い続ける。

そして、曲が終わろうとした時だった。
真上から、黒い影が落下した。
それは、春蘭より少し離れた場所に着地する。片方だけになってしまった金色の瞳が、春蘭を凝視していた。
「ヴォオオオオオオ！」
攫猿の絶叫が妓楼を揺るがせた。好奇心からか、欄干から身を乗り出していた妓女たちも、これにはさすがに慌てて顔を引っ込めていた。代わりに、袍を脱ぎ捨て武具で身を固めた兵士たちが、それぞれ槍や弓を構え攫猿を威嚇する。
いくら頑丈な足腰をもつ攫猿であっても、三階の高さを誇る妓楼を、たった一度の跳躍で飛び越えることは不可能だろう。どの欄干を足場にしようとも、そこには兵士たちの姿がある。
もはや、攫猿に逃げ場はなかった。
春蘭を庇うように、偃月刀を構えた楊秀が前に出た。仲望もまた、得意の弓を引き、攫猿に矢尻を向ける。
「……約束だぞ、楊秀」
「わかっている」
ここでなにかが起ころうとしているのは、街の情報に少し詳しければすぐにわかる。洪釆はどこから見ているのだろうか。
「春蘭。もっと下がって」
「平気だ。いざとなれば、白桃を出す」
春蘭は、一瞬たりとも見逃さぬために、攫猿を見詰めていた。
攫猿は、楊秀が手強い相手であると気付いているのだろう。安易に飛び掛かろうとはせず、機を窺うように上体を低く保つ。先に緊張を破ったのは楊秀だった。
「はぁあ！」
振り下ろされる偃月刀を、攫猿は素早い動作で避ける。だが、間髪を入れずに二打目、三打目が繰り出される。片腕を失った攫猿は、防戦一方で反撃す

る余力がないように思われた。
だが、攫猿は隙を窺っていただけだった。
楊秀が攫猿の残された右腕を狙い、偃月刀を振りかぶった時。あろうことか、攫猿は自らの肩でその一撃を受け止めた。
血飛沫が上がり、誰もが攫猿の絶命を思った――そう、楊秀を除いては。
「しまった！」
楊秀の一撃を受けた部分の筋肉が、不自然に盛り上がっていた。偃月刀の刃がその筋肉に押さえつけられ、引き抜くことができない。
とっさに柄から手を放した楊秀だったが、わずかにできた隙を見逃す攫猿ではない。真っ赤な口内をさらしたかと思うと、鋭い牙が楊秀に接近する。
だが、それを一本の矢が辛うじて阻む。
攫猿が相対しているのは、楊秀だけではないのだ。
仲望の放った矢が、攫猿の肩に突き刺さる。
「ガァアアアアッ！」
楊秀はその隙に攫猿から偃月刀を引き抜いた。
「油断するな、楊秀」
仲望の厳しい声に、楊秀は自嘲するように笑った。
「次で終わらせる」
今まで楊秀の腕を覆っていた光の膜が、分厚さを増す。〝気〟を集約しているのだろう。攫猿がまた、その一撃を受け止めようとも、骨ごと肉を断つために。
「――行くぞ」
しかし、楊秀が偃月刀を振りかぶろうとした時、その足許に匕首が刺さった。
緊迫した空気の中、音も立てずに空から舞い降りた影が二つ。どちらも、右の二の腕に鮮血のような赤い布を身につけていた。
「……でたな、猩猩緋め」
憎々しげに楊秀は呟く。
欄干から中庭に向かって槍や弓を構える兵士たちも、攫猿ではなく覆面の男と、鬼面の人物に向かっ

て切っ先と矢尻を合わせた。
「韓将軍は私が相手をします。あなたは、攫猿を殺しなさい」
「……」
沈黙する相手に対し、感情の起伏を感じさせぬ声が、冷酷に告げる。まるで覆面の男――洪采の背を押すように。
「もはや、生きることが地獄でしょう。それに、生け捕ったところで周りは敵ばかり。運びだすことも困難です」
「だが！」
「せめて、あなたの手で葬ってやりなさい。それが慈悲というものです」
鬼面の人物はそれだけ告げると、楊秀に向かって双剣を構えた。
一方、洪采は、肩で荒い息をつく攫猿と相対していた。だが、以前は躊躇いもなく槍を振るっていた洪采が、なぜか攫猿を前に躊躇している。やはり、洪采と攫猿の間にはなにかあるのだ、と春蘭は確信を深めた。
「しかたないな」
「仲望？」
「……楊秀を助ける。白桃を出して、傍から離れないように」
驚くことに、気術兵である楊秀が、鬼面に押されていた。流れるような剣捌きに、受け流すだけで精一杯のようだ。
楊秀の分が悪いと判断した仲望は、鬼面に向かって矢を射掛けた。寸分の狂いもないそれは、しかし目にも留まらぬ速さで叩き落とされてしまう。
「うわぁ……面倒臭そうな相手だ」
ぶつぶつと文句を言うが、それでも弓矢を射る手は休めない。
「白桃」
春蘭は仲望の指示に従い、白桃を呼び出した。白桃は警戒するように周囲を見回し、春蘭を体で守る



ように包み込んだ。
「洪采、なにがあったのだ」
春蘭の呼び掛けに、洪采は肩を揺らした。そんな相手に隙を見たのか、攫猿が腕を振りかぶる。とっさにそれを回避した洪采だったが、やはり反撃する意思が見られない。
「……めだ。駄目だ。俺には、殺せない」
「洪采？」
悲しみに満ちた瞳で、洪采は攫猿を見やった。
「……あれは、梁華だ」
「りょうか？」
洪采の声が震えた。
「俺の妹なんだ」
――攫猿は女を攫う。攫われた女は攫猿の妻とされ、子を身籠もれば人里に返されるが、子を身籠もらなければ何年も返されることはない。
そして、子を産まぬ女は、山塀の気に耐えられず、数年でその姿を攫猿に変え、人であったことを忘れてしまうのだ、と玉翠は言っていた。
「攫猿から人に戻ることはない。だが、それでもあれは梁華に変わりないんだ……」
おそらく、その者も猩猩緋の一人なのだろう。それで、なぜ猩猩緋が攫猿を捕らえようとしていたのか合点がいった。
彼らは、元の仲間であった攫猿――梁華――から、猩猩緋の情報が漏れるのを恐れたのだ。攫猿は人語を喋ることはできないが、意味を解することは可能だ。万が一、人であった時の記憶が残っていたら、猩猩緋の潜伏場所を知られかねない。
殺さずに生け捕りにしようとしていたのは、仲間を手にかけることを躊躇い、せめて山塀に帰してやりたいと考えたのか。山塀で暮らす限りは、人の手も届かない。
春蘭はただ、洪采の言葉に耳を傾けるしかなかった。
「その首飾りは、俺が梁華に贈ったものだ。安物な

上、俺の手作りだったが……肌身離さず持っていると笑っていた」

「そうか、だから……」

この首飾りを、妖と化した今でも肌身離さず持っていたというのか。

「兄として、この手で葬ってやるべきだとはわかっている……わかっているが」

辛いのだ、と洪采は言った。

しかし、そんな洪采の心など知らず、攫猿は牙を剝き出しにして迫りくる。歯を食い縛る洪采の横顔が見えた。

「洪采！」

攫猿の牙が、洪采の肩に深々と突き刺さる。歯を噛み締め、痛みを堪える洪采は「りょう、か」と妹の名を口にした。しかし、攫猿は構わずに洪采の肩を砕こうと、顎に力を込める。

「梁華ぁあああああ！」

洪采の悲痛な叫びが楼閣に響き渡る。唇を噛み締めた春蘭は、意を決した顔付きで攫猿を睨んだ。

「これを見よ！」

春蘭が掲げたのは、攫猿が持っていた赤い石の首飾りだった。それにぴくりと反応した攫猿は、洪采の体を投げ捨てるように手放すと、視線を春蘭へと向ける。

「簪もあるぞ。ぬしは、これが欲しかったのだろう？」

低い唸り声を発した攫猿は、一拍の後、春蘭に猛然と襲い掛かった。それに応戦するように白桃が跳躍するが、片腕で弾き飛ばされてしまう。

「白桃！」

春蘭の声に反応した白桃が、主に走り寄るが、攫猿の腕がそれよりも早く春蘭を捕らえようとした。

だが、それは春蘭の背後から射られた一本の矢によって阻まれることになった。

攫猿の右肩に命中したと思った瞬間、その上腕部分が粉々に吹き飛んだ。

啞然とした春蘭だったが、背後を見れば矢を射たと思しき仲望が、前髪で隠れていた片目を苦しげに押さえている姿があった。

「仲望、どうした……！」

手の下、右目から淡い光が漏れていた。

それは楊秀や洪采が気術を使用した時に見られる光と同じだった。だが、なぜ胸部ではなく、瞳から漏れているのか。

「仲望！」と叫んだ春蘭の声は、断末魔の絶叫をあげる攫猿によって掻き消された。両腕を失った攫猿は、痛みのあまり狂ったようにのた打ち回る。

しかし、終焉は唐突に訪れた。

背中から深々と胸を抉るように突き出された一撃が、攫猿の分厚い胸板を貫通する。崩れ落ちるように倒れた巨体の向こう側には、片腕で槍を握り締める洪采の姿があった。

洪采はなにかに耐えるように唇を噛み締め、槍をさらに奥へと捻じり込んだ。

大量の血を吐き、攫猿の体が横倒しとなる。やがて、その金色の瞳から、急速に光が失われた。力の抜けた四肢が床に沈む。

茫然と、洪采はその遺骸を眺めた。

「洪采……」

「苦しんでいたのに、俺は殺してやることしかできなかった」

「……だが、少なくともこれで彼女の苦しみは終わった」

「それが救いだというのならば、梁華はいったいなんのために生まれ、なんのために死んだんだ」

春蘭にはかける言葉は見当たらなかった。また、絶望に染まる瞳には、どんな言葉も届くことはないだろう。

彼の苦しみは、彼にしかわからない。

攫猿に攫われた娘の苦しみが、当人にしかわからぬように。

キン、となにかを弾くような音が響くと同時に、

洪釆の傍らに鬼面が現れた。はっとして周囲を見回せば、偃月刀を弾き飛ばされ歯噛みしている楊秀の姿があった。

「もう、ここに用はありません」

「……わかっている」

「逃がすな！　矢を射掛けろ！」

楊秀の声に反応した兵士たちが、二人目掛けて矢を射ろうとする。しかし、洪釆と鬼面の人物は、まるで一陣の風のように姿を消していた。

残されたのは、攫猿の遺体のみ。

「……結局、ぬしがなにを捜しておったのかわからず仕舞いだったな」

物言わぬ攫猿に向かい、春蘭はぽつりと呟いた。



攫猿は華安の都から消えた。

禁軍の気術兵が活躍したとの発表がなされたが、いや、実は龍乎が退治したのだの、はたまた不甲斐ない朝廷の代わりに猩猩緋がだの、と人は口々に噂する。

だが、真実を知るのは一握りの者たちだけ。その者たちも口を噤んでいるため、真実が広まることはない。

「真名を取り戻すこと以外、瑣事にすぎぬのだがな……」

夜半のことだった。

屋敷の者たちが寝静まった中、房室で水神盤を取り出した春蘭は、用意していた桶にそれを浮かべる。月明かりの下、くるりくるりと動いていた水神盤が動きを止める。

「やはり……」

呟き、春蘭は空を見上げた。

その手には、攫猿の首飾りが握られている。じっとそれを見詰めたあと、春蘭は「白桃」と呟いた。

西離宮。

それは、後宮の四夫人の一人、黎貴妃にあてがわれた宮なのだという。

見事な庭を望むことができる欄干に、一人の美しい女が立っていた。

わずかに寄せられた柳眉、驚くほど細い腰、そして、作り物めいた美しさを漂わせる顔。体の線をより強調する寝衣を身にまとい、女は憂いを帯びた

眼差しで、池に映る月を眺めていた。
それを屋根の上から観察していた春蘭は、白桃に跨ったまま女の前に姿を現す。
「綺麗な月夜だな」
「な、何者ですかっ！」
「騒ぐな。人が来て困るのは黎貴妃、そなただぞ」
言いながら、春蘭は首飾りを掲げた。それに、黎貴妃と呼ばれた女は小さく息を呑む。
「それは……」
「見覚えがあるはずだ」
だが、気を取り直した様子の黎貴妃は、小さな笑みを浮かべただけだった。困惑するのではなく、落ち着き払った様子で春蘭の言葉を否定する。
「いいえ」
「心配はいらぬ。私がなにを喋ろうが、子供の戯言と誰も信じはせぬだろう。もっとも、このことは誰に言うつもりもないが。ただ、私は確かめたかっただけだ」
黎貴妃の瞳が怪訝そうに細められた。
「私にも情報が入っておりますわ。あの攫猿は、人の娘が山塺にて妖となったなれの果ての姿。その娘の形見なのでしょう？」
「そうだな。猩猩緋もそう信じていた。だがな、人は人なのだ。いくら山塺の気に当てられようと、妖にはならぬのだ」
梁華として殺された攫猿は、元より山塺の気より産まれた妖であった。ただ、その妖は、梁華と呼ばれた女が大切にしていた首飾りを持っていた。そして、梁華本人がどこにもいなかったために、山塺の気によって妖と変わり果てたのではないか、と誤解が生じてしまったのだ。
「これは、ぬしのものなのだろう？」
原因は、黎貴妃の産んだ子にあった。
祥安。
そう名付けられた赤子は、皇帝の子ではなかったのだ。

「男児を出産したぬしは、向かう所敵なしだといってもよい。皇帝の寵愛があれば、自分の子を太子にするなど造作もないことだからの。しかし、ぬしでも恐れることがあった」

黎貴妃は沈黙を守り、春蘭を見詰め続けた。清楚な印象しか与えぬこの女性の本性は、悪か、善か。そのどちらでもあるのだろうな、と春蘭は思った。そもそも、どちらか一方に偏っている者の方が珍しいのだ。

「公子の出生の秘密を知る者がいた。それは、ぬしと共に攫猿に攫われた娘だった」

娘が黎貴妃の正体に気付く可能性は、ほんのわずかだっただろう。

しかし、彼女はそのわずかを恐れた。

公子が攫猿の子だという証拠はないが、猜疑心の強い皇帝に知られることは避けたい。だから、黎貴妃は権力を使い、攫猿の子を身籠もり邑に戻された娘を殺害させたのだ。

だが、ここで問題が発生した。

娘と子を殺された攫猿が怒りのあまり、邑を襲った。そして、攫猿はあろうことか華安に姿を現す。

だから、黎貴妃は皇帝に禁軍を動かすよう哀願したのだ。攫猿が後宮に気付くより先に排除するために。

「のう、黎貴妃。攫猿は、なんのために華安に現れたと思う？」

「さあ……私にはわかりかねますわ。でも、そうですね。きっと復讐のために来たのではありませんこと？」

「復讐、か」

「娘を殺された復讐ですわ。復讐すべき相手が、華安にいると思ったのでしょう」

「なぜ？」

「そこまでは知りませんわ」

「違う。私が訊ねた意味は、なぜ攫猿が華安に復讐すべき相手がいると知ったのか、だ」

黎貴妃は両目をわずかに瞠った。
腹の前で組まれた指が小さく震えている。それは、おそらく彼女の内心を表しているのだろう。春蘭の意図がわからぬ限り、彼女は安心することはできないのだから。
「攫猿は知らなかった。復讐は、邑を襲うことで終わったのだ」
「ならば、なぜ」
「気付かぬか」
攫猿が襲ったのは、高級官吏の屋敷だった。そして、その屋敷にいた娘が殺害された。
「張高厳、黄如恵、曹文親、そして、花興奏。この名に心当たりはあるだろう。おそらく、ぬしが接触を持った相手だ」
黎貴妃は答えない。
だが、信じられないものでも見るような表情を浮かべていることが答えだった。
「ぬしは攫猿が都に現れたと聞いた時、娘を殺害した者を捜しに来たと思ったのだろう。攫猿は鼻が利く。房に閉じ籠もるか、匂いを消すために大量の香を焚くか。他にもなにかしたやもしれぬが、おかげで攫猿はぬしを見つけることができなかった。だが、香りが消えずに残っていた物があった」
黎貴妃の許を訪れる客は多い。むろん、御簾越しでの対面となるだろうが、その度に皇帝の寵姫に贈り物を持参したはずだ。
そして、黎貴妃は高級官吏の時のみ——自分側に取り込みたいと思った者のみ、己が使用していた簪などの装飾品を下賜した。その内の幾人が、彼女側についたのだろうか。
「復讐は終わっていた。では、なぜ攫猿はぬしを捜していたのだろうな」
「……私には関係のないことですわ」
「ああ、そうであろう。なによりも、黎貴妃であるぬしが攫猿と関係があってはならぬ」
たとえ、春蘭の言葉がどれだけ正しかろうとも、

黎貴妃は肯定することだけはできない。してはいけないのだ。

「戯言だと思ってくれてよい」

ただ、知っていてほしかった。

なぜ攫猿が、危険を承知で華安に留まっていたのか。なぜ、黎貴妃を捜し続けていたのか。

「攫猿は確かめたかっただけなのだ」

「……確かめたかった？」

黎貴妃の眉が不審げに寄せられる。それに、春蘭は頷いた。

「己の子と、子を産んだ女の無事を」

一人の娘は子を産む前に殺されてしまった。

邑を襲った攫猿は、その時、もう一人の娘がいないことに気付いたのだ。

「……邑人が、攫猿の子を身籠もっているとわかっている娘を後宮に差し出しますか？」

「娘自身が攫猿に攫われたとは言わなかった。このご時世、人買いや盗賊に襲われたのだと言えば、疑う者はいない」

そして、娘はその美貌から皇帝へと差し出された。

「……だから、なんだというのです」

黎貴妃の顔に宿るのは、仄暗い憎悪だった。

攫猿に犯され、そして、救われたと思えば今度は後宮に押し込められ、皇帝とはいえ見ず知らずの男に夜の相手を強要される。

産まれた子が皇帝の子でないと知れれば、死は免れないだろう。それも、目を覆うような責め苦の末に殺されるのだ。

恨むなという方が酷だ。

春蘭は気付いていた。だからこそ、真実を白日のもとで明らかにするのではなく、夜半を待って忍び込むような真似をしたのだ。

「あなたにはわからぬことでしょうね。愛してもいない男に抱かれるという屈辱を。そして、化け物の子を宿し産んだ女の悲しみを。自分の子を愛せぬ母親がどれほど哀れか」

春蘭は目を伏せた。

わずか十二で時を止めた春蘭にとって、黎貴妃の苦しみを理解することはできなかった。ただそれは、憎しみを持たずしては堪えられぬほどの痛みだったのだろう。

「……母様と呼ばれる度に、幾度あの子を殺そうと思ったことか」

慕い寄ってくる子に愛情がないわけではない。攫猿の子であると同時に、己の血を受けた子でもあるのだ。だからこそ苦しい、と黎貴妃は語る。

「公子を太子に望むのはなぜだ？」

「生きるため。そして、私を見捨てた世に復讐するためです」

皇族の血を受け継がない子を帝位に据える。これほどの復讐があるだろうか、と黎貴妃は残酷にも美しい笑みを浮かべながら語る。

「そのためならば、無辜の民が犠牲になろうとも、私は無慈悲に笑みます。自分の子ですら犠牲にしましょう」

満月に照らされ、艶やかな笑みを浮かべた黎貴妃を春蘭は素直に美しいと感じた。その岩をも穿つ激しい想いが、彼女に妖しくも蠱惑的な美しさを与えているのだろう。

だからこそ、皇帝も彼女に惹かれたのではないだろうか。

「そうか……」

「あなたが何者かはわかりません。ですが、私の行く手を阻むというならば容赦はしない」

黎貴妃が決意に満ちた眼差しを春蘭に向けた時、小さな鈴の音が聞こえた。そして、侍女の衣擦れと共にその声が低く響く。

「黎貴妃さまに申し上げます――主上がお渡りになられました」

黎貴妃は立ち上がり、春蘭へ視線を向ける。春蘭も白桃の背より下りると、ゆっくりとした歩調で黎貴妃へと近付いた。そして、手にしていた首飾りを

黎貴妃の手に掛ける。

彼女の手を離れてもなお、それに宿った〝想い〟は主の居場所を正確に示した。ずっとずっと、大切にし続けたものだったのだろう。

「……洪釆は、なにも知らなかったんだ。知っていたら、すべてを投げ出してでも助けに行ったと言っていた。あやつは、死ぬまで後悔に苛まれ続けるはずだ。それを、少しでも哀れに思ってやってくれ。苦しんだのは、なにもぬしだけではない」

黎貴妃は目を見開いた。言葉を発しようとしたが、うまく声が出ない様子だった。春蘭は悲しげな笑みを浮かべた。

「せめて洪釆のことだけは、恨まずにいてやってくれ――梁華」

それが、危険を冒してまで後宮に忍び込んだ最大の理由。

「さらばだ。二度と会うこともあるまい」

白桃の背に跨れば、あっという間に黎貴妃の姿が遠ざかる。春蘭は白桃の背に縋りながら、唇を噛み締めることしかできなかった。

鄭家の屋敷へ戻ると、欄干に佇む影があった。

月を眺めるその横顔には、あいかわらず表情らしきものは窺えない。

「……なにをしておる」

「月を見ていただけだよ」

「そうか」

「春蘭は？」

「散歩だ。月が綺麗だったからな」

「夜間の外出は禁止されているのだけどね……」

ずいぶん命懸けの散歩だ、と仲望は笑った。白桃を玉に戻した春蘭は、なにも言わずにその隣に腰を下ろす。

わずかに吹く風が、木々の梢を揺らす。時折、思い出したように梟の鳴き声が響いていた。

「右目はもうよいのか？」
「痛みは一時的なもので、外傷もないから。すぐに引いたよ」
「そうか」
仲望の胸に埋め込まれた玉の暴走により、右目に気が集まるようになったのだ、と春蘭は見舞いに来た楊秀から説明を受けた。
目に集められた〝気〟は通常よりも扱いが難しいようで、気術を使用する度に頭部に多大な負荷がかかるのだという。見た目の異様さもあり、いつもは前髪で隠しているのだそうだ。
あの時、なにを思って仲望はその力を使ったのか。気になるのだが、なぜか春蘭は口に出して訊ねる気にはなれなかった。
「……そういえば、広場で晒されていた攫猿の遺体が、次の日にはなくなっていたらしい」
「そうか」
「おそらく、猩猩緋が持っていったんだろうな」
救うことはできなくとも、その遺骸を弔うことはできる。なによりも、洪采は攫猿の遺体を晒したままにしておくことなどできるはずもなかったのだろう。
春蘭には、あれが梁華ではないとわかっていた。だが、洪采にとっては、己の手で殺した攫猿こそが愛した妹なのだ。
俯けば、背をふわりとした温かな感触が覆った。見れば、仲望が羽織っていた袍が春蘭の体にかけられている。
「すまぬな」
白桃の背に揺られていたせいで、余計に体が冷えていた。仲望の袍はじんわりとした温かさを春蘭に与えてくれた。
「……いつの世も、人の心だけはままならぬな」
ぽつりと呟いたそれに返答はない。
黎貴妃の復讐は止まらぬだろう。止まることは、死を意味している。

だった。

猩猩緋もまた、世が荒廃し続ける限り義賊で在り続けるのだろう。できれば、その二つが敵対し、互いを滅ぼしあうような事態にならなければいい。

いずれ、守り神へ戻った時。

また、人としての感情を失ってしまうのだろうか。たくさんの人の心に触れ、その都度、感じた思いも、すべて〝人であった時のもの〟と割り切ってしまうのだろうか。

守り神であった時、春蘭の心は風のない湖面のように凪いだまま、どんな感情にも揺らされることはなかった。

でも、今は違う。

〝春蘭〟である今は、心が様々な想いに揺さぶられ苦しくてしかたがなくなる時がある。

真名を取り戻す。

それ以外に、心を傾ける必要などないはずなのに。

「人の心だけは、ままならぬ……」

仲望に聞こえないように、春蘭は今一度呟いたの

了

あとがき

いつもここの書き出しで悩みます。なら、悩んでると書けばいいじゃん的なことを思いついたので、思いつきに忠実になってみました。

新シリーズです。ダメ出しの嵐を掻い潜り、ようやく一つの物語りとして形作ることができました。春蘭はそんなに変わってませんが、仲望ははじめこんなにダメダメさんではありませんでした……。由貴さんのキャラクターラフを見て、のほほんなのにこんなにかっこよくていいのだろうか、と真剣に悩んだほどです。

表紙を見て、かっこいい仲望を連想してしまった方はもうしわけありません。中身は二十代にして隠遁希望のニートに片足を突っ込みかけている男性です。家僕の少年たちに心配されるほどです。そして、小さい女の子を嫁に貰おうとしている犯罪者予備軍です。春蘭のキャラクターラフを見てから、仲望は犯罪者のレッテルを貼られてしまいました。

二巻目はもう少しかっこよく書いてあげたいと思っています（笑）。

今回もご迷惑をかけてしまった担当さん。ダメ出しの嵐に、後半は感覚の麻痺からか、どんどん来い的なものになってました（笑）。校正者さんもありがとうございます。イラストレー

ターの由貴海里さん、素敵なイラストをありがとうございます。春蘭のイラストには、担当さんと二人で可愛い可愛いとたぎっていました。

本書を手にとって下さった読者のみなさまにも、心からのお礼を。

新シリーズをよろしくお願いいたします。

次回は、捕らわれのお姫様（仲望）を、王子様（春蘭）が助けに行きます（笑）。

果たして、仲望のかっこよさをアピールする機会はくるのか。

ご期待ください。

九条　菜月

ご感想・ご意見をお寄せください。
イラストの投稿も受け付けております。
なお、投稿作品をお送りいただく際には、編集部
(tel:03-3563-3692、e-mail:mail@c-novels.com)
まで、事前に必ずご連絡ください。

C・NOVELS Fantasia

奪われた真名
——華国神記

2011年6月25日　初版発行

著　者　九条菜月
発行者　小林敬和
発行所　中央公論新社
〒104-8320　東京都中央区京橋2-8-7
電話　販売 03-3563-1431　編集 03-3563-3692
URL http://www.chuko.co.jp/

ＤＴＰ　ハンズ・ミケ
印　刷　三晃印刷（本文）
大熊整美堂（カバー・表紙）
製　本　小泉製本

©2011 Natsuki KUJO
Published by CHUOKORON-SHINSHA, INC.
Printed in Japan　ISBN978-4-12-501158-5 C0293

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

●本書の無断複製(コピー)は著作権法上での例外を除き禁じられています。
また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化を行うことは、たとえ
個人や家庭内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。

第8回 C★NOVELS大賞 募集中！

あなたの作品がC★NOVELSを変える！

みずみずしいキャラクター、
はじけるストーリー、
夢中になれる小説をお待ちしています。

賞

大賞作品には賞金100万円

刊行時には別途当社規定印税をお支払いいたします。

出版

大賞及び優秀作品は当社から出版されます。

第4回
- 大 **夏目 翠** 翡翠の封印
- 特 **木下 祥** マルゴの調停人
- 特 **天堂里砂** 紺碧のサリフィーラ

第5回
- 大 **葦原 青** 遙かなる虹の大地 架橋技師伝
- 特 **涼原みなと** 赤の円環（トーラス）

第6回
- 大 **黒川裕子** 四界物語1 金翅のファティオータ
- 特 **片倉 一** 風の島の竜使い

第1回
- 大 **藤原瑞記** 光降る精霊の森
- 特 **内田響子** 聖者の異端書

第2回
- 大 **多崎 礼** 煌夜祭（こうやさい）
- 特 **九条菜月** ヴェアヴォルフ オルデンベルク探偵事務所録

第3回
- 特 **海原育人** ドラゴンキラーあります
- 特 **篠月美弥** 契火の末裔（けいかのまつえい）

大…大賞受賞作　特…特別賞受賞作

この才能に君も続け！

応募規定

❶プリントアウトした原稿、❷表紙＋あらすじ、❸エントリーシート、❹テキストデータを同封し、お送りください。

❶プリントアウトした原稿

「原稿」は必ずワープロ原稿で、40字×40行を1枚とし、90枚以上120枚まで。

※プリントアウトには通しナンバーを付け、縦書き、A4普通紙に印字のこと。感熱紙での印字、手書きの原稿はお断りいたします。

❷表紙＋あらすじ（各1枚）

表紙には「作品タイトル」と「ペンネーム」を記し、あらすじは800字以内でご記入ください。

❸エントリーシート

C★NOVELSドットコム[http://www.c-novels.com/]内の「C★NOVELS大賞」ページよりダウンロードし、必要事項を記入のこと。

※❶❷❸は、右肩をダブルクリップで綴じてください。

❹テキストデータ

メディアは、FDまたはCD-ROM。ラベルにペンネーム・本名・作品タイトルを明記すること。必ず「テキスト形式」で、以下のデータを揃えてください。

ⓐ原稿、あらすじ等、❶❷でプリントアウトしたものすべて
ⓑエントリーシートに記入した要素

応募資格

性別、年齢、プロ・アマを問いません。

選考及び発表

C★NOVELSファンタジア編集部で選考を行ない、大賞及び優秀作品を決定。2012年2月中旬に、C★NOVELS公式サイト、メールマガジン、折り込みチラシ等で発表する予定です（一次選考通過者には短い選評をお送りします）。

注意事項

- 複数作品での応募可。ただし、1作品ずつ別送のこと。
- 応募作品は返却しません。選考に関する問い合わせには応じられません。
- 同じ作品の他の小説賞への二重応募は認めません。
- 未発表作品に限ります。ただし、営利を目的とせず運営される個人のウェブサイトやメールマガジン、同人誌等での作品掲載は、未発表とみなし、応募を受け付けます（掲載したサイト名、同人誌名等を明記のこと）。
- 入選作の出版権、映像化権、電子出版権、および二次使用権など、発生する全ての権利は中央公論新社に帰属します。
- ご提供いただいた個人情報は、賞選考に関わる業務以外には使用いたしません。

締切

2011年9月30日（当日消印有効）

あて先

〒104-8320　東京都中央区京橋2-8-7
中央公論新社「第8回C★NOVELS大賞」係

（2010年11月改訂）

九条菜月の本

オルデンベルク探偵事務所録

ヴェアヴォルフ

20世紀初頭ベルリン。探偵ジークは、長い任務から帰還した途端、人狼の少年エルの世話のみならず、新たな依頼を押し付けられる。そこに見え隠れする人狼の影……。第2回C★NOVELS大賞特別賞受賞作！

ヴァンピーア

不可解な状況で消えた女性の遺体探索依頼が探偵事務所に舞いこむ。探偵フェルが派遣されるが、到着直後から相次ぐ殺人事件。お転婆な少女に邪魔されながらも、地精の協力を得て謎に挑むが――。

ヘクセ 上

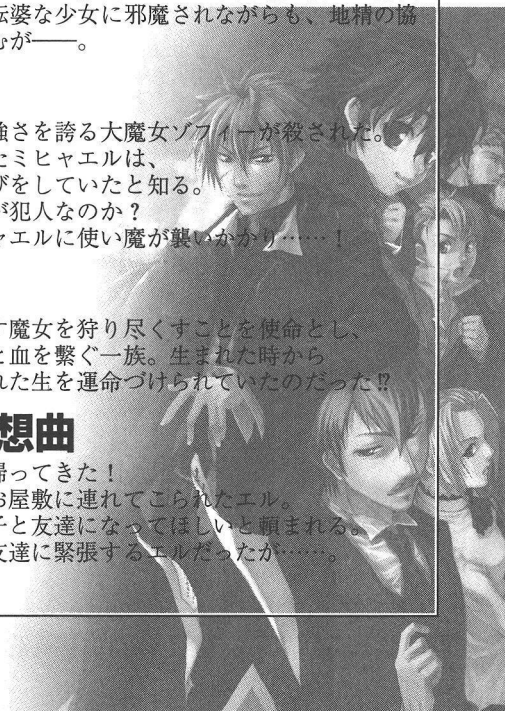
凄艶な美しさと強さを誇る大魔女ゾフィーが殺された。
調査に乗り出したミヒャエルは、
彼女が後継者選びをしていたと知る。
弟子たちの誰かが犯人なのか？
核心に迫るミヒャエルに使い魔が襲いかかり……！

ヘクセ 下

人の世の理を乱す魔女を狩り尽くすことを使命とし、
歴史の陰で連綿と血を繋ぐ一族。生まれた時から
彼らは血にまみれた生を運命づけられていたのだった⁉

エルの幻想曲

エル＆ジークが帰ってきた！
兄貴分クリスにお屋敷に連れてこられたエル。
そこに住む女の子と友達になってほしいと頼まれる。
初めての人間の友達に緊張するエルだったが……。
五篇収録。



イラスト／伊藤明十

九条菜月の本

魂葬屋奇談

空の欠片
平凡を自認する高校生・深波。学校に紛れこむ自分にしか見えない少年の存在に気付いたことで、平凡な人生に別れを告げることに！

淡月の夢
助人となった深波。見知らぬ少女に喧嘩を売られ、ユキからは呼び出され休む暇がない。今回は警察から欠片を盗み出せって……⁉

黄昏の異邦人
三日間だけだからとユキに拝み倒され、魂葬屋見習い・千早の最終試験に駆り出された深波。どうやら彼は訳ありのようで……。

追憶の詩
通り魔が頻発する地区で、使い魔を連れた男女に出会った深波。時雨からは「死にたくなければ近付くな」と警告されるが……。

螺旋の闇
ユキの失った生前の記憶に繋がる日記帳を手にした深波。意を決して、調査を始めようとした矢先に生意気な魂葬屋に捕まって……⁉

蒼天の翼
ユキの記憶をたぐる手がかりを僅差で失った深波。一度は落ち込むが、再び立ち上がったその身に危機が迫る！　シリーズ、完結！



イラスト／如月水

九条菜月の本

翼を継ぐ者

1 契約の紋章

シュルベル王国の小さな農村で育った少女リディア。ある日、村に他領の騎士が乗り込んでくる。リディアは主家の継承者の証を持っていて、自分たちは迎えにきたというのだが……。

2 紋章の騎士

紋章貴族として生きる決意をしたリディアの前に立ちふさがる難問。
――戦争か？　和平か？
自身の判断で人々の未来が決まる。
究極の決断を迫られ惑う彼女の命を狙い、刺客が放たれた！

3 封印の紋章

シュルベル、カーランド両国で高まる戦争の機運。二つの国に生きる、二人の少女は、争いを避けるため、それぞれの戦いに挑む！
一方、国内では教会を巡り、不穏な動きが加速していた。

4 紋章の覇者

国境で戦の火蓋が切られた。
命を狙われた一連の出来事の裏に義兄がいたことを知り傷つくリディアだったが、紋章に秘められた力を使い、起死回生の手に打って出る！
シリーズ完結巻



イラスト／キヲー

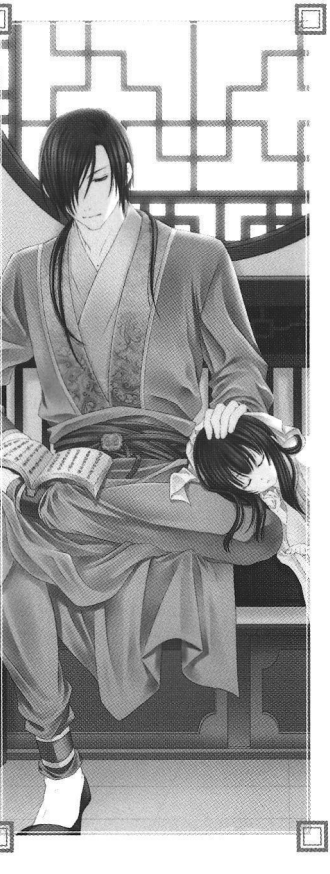
9784125011585

ISBN978-4-12-501158-5

C0293 ¥900E

1920293009001

定価 本体900円＋税



下級官吏・鄭仲望の前に現れた少女・春蘭。小さな体で神虎を操り、無表情で尊大に喋る彼女は、自分は真名を奪われた神だと宣言し、４年前に死んだ仲望の兄が犯人なのだからと鄭家に居候を決め込んだ。同じ頃、都では魔物が跋扈し、良家の子女が立て続けに殺される事件が発生。禁軍が出動する事態となっていた。緊迫する街で、とある姉妹を人攫いから助けた春蘭は、都を揺るがす大事件に巻き込まれていく！